

民族植物学ノオト 第17号 (2024) 目次
Ethnobotanical Notes No.17 (2024) : Contents

巻頭言 風の時代に心を深く考える Preface: Thinking deeply the Mind out in the Air Era	黍稷農季人 …… 1 Kibikibi Noukijin
富士山北麓地域における植物と食文化 Plants and Foods in the North Region of Mount Fuji	井上典昭 …… 2 Noriaki INOUE
伝統的発酵食品の企業生産③：岩手県久慈市山根町“新山根温泉べっぴんの湯”によるご ど豆とその関連商品 Corporate Production of Traditional Fermentation Foods, part 3: Godo-mame and related products by Shin-Yamane Onsen Beppinnoyu (New Yamane Spa, Bath of Beautiful Lady) in Kuji, Iwate, Japan	星野保 …… 5 Tamotsu HOSHINO
沖縄の歳時風習における植物を用いた食品梱包文化の移り変わり ～ムーチーの日と豊年 祭の事例に～ The Shifting Culture of Food Packaging Using Plants in Okinawa's Seasonal Customs: The Case of Muchi and Harvest Festival.	～ムーチーの日と豊年 玉木陸斗 …… 11 Rikuto TAMAKI
雑穀街道普及会の顛末記 ～見捨てられた穀物への多くの感謝と少しの謝罪～ A Detailed Report of Japan Hirse Straße Promotion Band; Many Thanks and a few Apologies to the Orphan Crops	木俣美樹男 …… 21 Mikio KIMATA
この阿修羅は天道の門の近くに咲く草花に転生する ～風の時代に心を豊かに育む～ This Ashura would become a blooming flower near the gate of heaven in reincarnation. ～Growing up my own Mind in the Air Era～	黍稷農季人 …… 55 Kibikibi Noukijin
へだまと進ちゃん Hedama and Susumuchan	岩谷美苗 …… 71 Minae IWATANI
再録随筆；雑穀物語 8 山中進・三千恵夫妻 Stories of Millet 8: Mr. & Mrs. Yamanaka, Susumuchan and Michy	木俣美樹男 …… 72 Mikio KIMATA
[付録 1] 自然文化誌研究会 2023年の活動記録 Appendix 1: A Record of INCH in 2023	黒澤友彦 …… 73 Tomohiko KUROSAWA

[付録 2] 植物と人々の博物館 2023 年の活動記録
Appendix 2: A Record of Plants and People Museum in 2023

木俣美樹男 …… 75
Mikio KIMATA

編集後記
Editor's postscript

西村俊 …… 77
Shun NISHIMURA

巻頭言 風の時代に心を深く考える
黍稷農季人

Preface: Thinking deeply the Mind out in the Air Era
Kibikibi Noukijin

地の時代が終わり、2021 年からは風の時代が始まったと、占星術では言う。風の時代は目に見えないものに価値置く。すなわち、風は知性や情報を象徴している。物質より心に関心が向くようだ。自然とは何かという命題を探求してきて、自然観という心の中の自然という想念に行き当たり、心には夙に関心があつた。岩田慶治(1986)は心の中の自然こそ真の自然と言っており、ぼくの想念は大いに励まされて、ELF 環境学習過程という方法論を考えた。自然文化誌研究会の実践活動に支えられたこの理論は、さらに、S. ミズン(1996)の心の先史時代から啓発を受けて、心の構造を環境学習過程に反映させることにした。さらに、任意市民活動の実践において経験した人間の悪心を理解するために、M. スタウト(2005)やB. アマテウス(2008)の言う良心(あるいは教養、思い遣り、第七感)の未発達(退化進化)から心の構造に加えて機能に気付いた。この構造と機能を繋ぐのが認知流動性であるというところまで、実践理論が仮設できた。

しかし、人の心というものは、確かに風の様で、突然、向きを変える。当人でも認知、制御できない動きなのだろう。ましてや、他人にはその心変わりは全く理解が及ばない。とりわけ、人間の悪心の原である嫉妬、羨望や保身が関与しているのであるが、大方はそれを自ら自律することができない。認知流動性が良好に機能すれば第

七感により代償や浄化、昇華に至れば、思い遣りへと転化できる。

自然から乖離した都市暮らしをして、自然の中で生きる技と術を学ばず、現代文明が伝統的知識を忘却し、人間は生物的進化においてはもちろん、文化的進化からも定方向に退廃してきた。この国の生活様式は根本から修復がいる。里の衰退が里山の崩壊になり、野生動物の生活圏との緩衝地帯が無くなったので、里に出没、帰化動物は街に順化適応してきている。里を見捨てて、都市に集住、コンパクト・シティという趨勢は、中山間地の過疎高齢化、耕作放棄地や所有者不明土地を増やすばかりである。

ぼくたちは現象論(始めの一步)や実体論段階にとどまり、なかなか本質論にまで深く考えることをしない。ジャラルヴァンド(2022)は哲学について進化学はどう答えるかと考察を述べている。彼の論理の基盤となる古典哲学の豊かな知識はヨーロッパの大学の基礎学習過程によるのだろう。日本ではアジアの古典をほとんど学ぶことがない。日本の古典が『古事記』と『日本書紀』という神話ではなく、その古典哲学は中国の『論語』やインドの『ヴェーダ』などである。先師・先達の思索を一般教養として学ぶことが、自然に遊び、生業に勤しむと同時に、大事である。

富士山北麓地域における植物と食文化

井上 典昭

日本高山植物保護協会事務局員、富士山五合目自然解説員

Plants and Foods in the North Region of Mount Fuji

Noriaki INOUE

Japan Alpin-Flora Preservation Association

Nature Guide of Fifth Station of Mount Fuji

富士山の植物

富士山は、古来から和歌に詠まれ、江戸時代は浮世絵の題材となってきた。日本の象徴であり、現在は日本人だけでなくインバウンドの人气が高く、五合目でも半分以上は外国人で占める日もある。



凱風快晴（葛飾北斎）

私は、昨年度より自然解説員として年間十数日間五合目に詰めて、観光客に富士山の素晴らしさを伝え続けている。

五合目の植物

富士山は基本的に新しい火山なので、植物種はそう多くはない。同じ山梨県にある日本2位の標高を持つ北岳(3,193m)と比べると、かなりさみしい。

五合目が森林限界「天地の境」になっていて、それより上はほとんど植物はない。

五合目のお中道にはイタドリがたくさん生えている。イタドリは漢字で「虎杖」と書くが、読める人はほとんどいない。しかし、最

近はやっているアニメ「呪術廻戦」の主人公の名前が虎杖悠仁（いたどりゆうじ）であるので、意外に小学生が読めたりする。



富士山五合目のイタドリ群落

我々が子供のころ、イタドリの皮をむいて、塩を振って食べたが、今はそんなことをする人はいない。かなり酸っぱいのであまりお勧めは出来ない。昔の童謡に「土手のスカンポジャワ更紗（さらさ）～」というのがあるが、スカンポというのが、イタドリのようなのである。（スイバという説もある）秋になると茎が硬くなり、虎の皮のような模様ができることが名前の由来である。

また、コケモモという植物があるが、ダケカンバ樹林の林床にカーペットを敷き詰めたように広がっている。盛夏に白い小さな釣鐘状の花をつけ、秋には真っ赤な実が成り、この実が桃の実の形に似ているから名前が付けられているらしい。北麓地域では「ハマナシ」と呼ばれ、お菓子やジュースの材料として利用されている。しかし、富士山は世界遺産であり、国立公園であるので、植物の採取は禁

止されている。それでは販売しているのはどこのコケモモかという、フィンランド産のようだ。（お土産物屋さんの営業妨害になるのでナイショ）

このコケモモは、中国の秦の時代、始皇帝の命を受けた徐福という人が、不老長寿の薬を求めて日本にやってきて、富士山でこのコケモモを発見したが、そのまま日本に住み着いてしまったという伝説が残っている。味は甘酸っぱい。



富士山五合目のコケモモの実

また、富士山五合目にはシラビソ・コメツガの根元にマツタケが生え、「奥庭山荘」でマツタケ料理（要予約）を出しているが、正しくはツガタケというらしい。

富士北麓の食べ物の変遷

富士吉田市を中心とする富士北麓地域は、昔は寒さのために米を作ることができず、**麦作**中心であった。また、養蚕業が盛んで、女性は機織りが忙しく、昼食の準備は男性が行った。男性の強い力で小麦粉からうどんを作ったので、吉田のうどんは硬いうどんになった。これが今では富士吉田の名物となっている。本格的な吉田のうどんはゆでたキャベツと馬肉が乗っている。以前勤務した山梨県立ひばりが丘高等学校では日本でも珍しい「うどん部」というのがあり、うどん部の生徒にうどん作りを教わったので、私もうどん打ち

ができるようになった。

また、今では富士山の豊富な湧水を使って**米作り**が盛んである。ブランド名は「ミルクークイーン」、温暖化の後押しもあり出来もいいようだ。さらに冷たい湧水を使って、**水かけネギ**というのを作っているが、まだ食べたことはない。



吉田のうどん

民族植物学礼賛

南北に長い日本列島は、様々な植物が生育していて、昔から人々はそれを上手に利用して生きてきた。



農村拠点の碑と向こうに田んぼが広がる背景は富士山

現在、都市生活者は食材を流通だけで得ており、海外から入ってくる物品が滞ったり、大きな災害で流通がストップしたりしたら、すぐに飢餓に陥る可能性がある。（実際に能登半島では起こっている）

我々は食材をできるだけ自給すると共に、昔から伝えられているさまざまな知恵を学ん

でいく必要があるのではないだろうか。

※ 井上の富士山五合目をガイドを希望される方は富士山五合目周辺公園利用協議会のHPまで（5月から10月まで）

E-mail shinrinbunka@onshirin.jp

伝統的発酵食品の企業生産③

—岩手県久慈市山根町“新山根温泉べっぴんの湯”によるごど豆とその関連商品—
星野保 (八戸工業大学 工学部)

Corporate Production of Traditional Fermentation Foods, part 3:

Godo-mame and related products by Shin-Yamane Onsen Beppinoyu (New Yamane Spa, Bath of Beautiful Lady) in Kuji, Iwate, Japan

Tamotsu HOSHINO, Hachinohe Institute of Technology

1. はじめに

“ごど”は、大豆あるいは大豆の煮汁を使用した食品と定義せざるを得ない。しかし、これに当てはまらないものも存在する、宮城県北上丘陵には、大豆を使用しない「ゴト」も存在する。これは、『ごはんとその半分くらいのこうじにひたひたのぬるま湯を加え、一昼夜温度を保ってねかせ、濃い甘酒をつくる。これに塩をきつく（醤油ぐらいの濃さ）入れて10日くらい発酵させたもの』で、漬物やおひたし、ご飯などにかけて食べた（「日本の食生活全集 宮城」編集委員会 1990）。

現在、ごどは、青森県十和田市周辺で製造されている米麴と納豆をあわせたものが一般的であるが（図1. 「日本の食生活全集 青森」編集委員会 1986など）、これ以外に小麦フスマを麴とし、大豆の煮汁（アメ）や塩を加え発酵させたもの（図2. 岩手県教育委員会 1978, 菅原ら1995など）、アメにフスマを加え発酵させたもの（飛澤 2020）や、炒ったフスマと粗挽きした小麦に煮大豆を加え発酵させるもの（大森 1989）、炒った粗挽き小麦に煮大豆と塩水を加え発酵させるもの（ごちそうさまおふくろの味刊行委員会 1979, なにゃとら編纂委員会 1983, 「日本の食生活全集 岩手」編集委員

会 1984）、醤油醪や醤油滓（民俗学研究所 1955など）、味噌を仕込んだ際に生じる上澄み液、いわゆるタマリ（船越 1940）、味噌自体（山野目 1940など）に加え、納豆を塩水で煮たもの（西根町史編纂委員会 1990）やアメ（豆汁）に昆布や豆などを入れたもの（中市 1929, 民俗学研究所 1955）といったものは発酵食品で無いものまでが、“ごど”あるいは“ごと”と称されている（多くの事例は、小田 2008にまとめられている）。



図1. 米麴と納豆を合わせたゴド

写真提供：八戸工業大学・本田洋之博士



図2. 岩手県山田町にて販売されていた小麦フスマを用いた発酵調味料（ゴド）<http://yamada-michinoeki.seesaa.net/article/352992093.html>（2023年12月8日閲覧）2013年3月製造。原材料は、大豆の煮つゆ、ふすま、食塩。

2. 岩手県久慈市山根町のごど豆とその製法

類似の食品に岩手県久慈市山根町のごど豆・ごど豆がある（山根六郷研究会 1991, 1994, 川上）。黒豆を柔らかくなるまで煮た後、冷めた煮豆に香煎あるいはきな粉をまぶし、木箱（トウカ）に入れ、藁や新聞紙で蓋をした後、囲炉裏の上で置く。1週間以内に白い菌糸が発生する（これを「ハナがつく」と称する）（図3）。この菌類の実態は、報告されていない。これを戸外で1週間程度乾燥させた後、乾燥させたごど豆を煮冷ました塩水で4-5日漬け、豆が柔らかくなったら食べられる（図4）。



図3. トウカに入れ（上）ハナが来た状態（下）のごど豆 エフエム岩手久慈市 ふるさと元気隊「くじいくじ〜く」ブログより2016年2月9日（現在は削除済）



図4. 新山根温泉べっぴんの湯にて提供されていたごど豆 写真提供：藤織ジュン氏

<https://www.instagram.com/fujiorijun/>（2023年12月8日確認）

3. 新山根温泉べっぴんの湯によるごど豆の製品化

これまで山根町にて自家用として消費されてきたごど豆を製品化したのは、宿泊可能な温泉施設である新山根温泉べっぴんの湯（新山根温泉振興協会 畠山俊郎 理事長）である。当施設は1995年に開業し（久慈市総合政策部 2018）、2019年10月に湧出量の減少に伴い休業した。新たな源泉を掘削し、指定管理者は社会福祉法人 琥珀会に交代し、2022年4月に営業を再開した。

ごど豆は、2015年度に久慈市地域づくり振興課地域づくり・女性参画係がおこなった「ふるさと未来づくり事業 山根地区 ふるさと点検結果」において、村井・千足・浅小沢・木売内元村・橋場・^{ほれいら}保礼羅地区の郷土料理・食文化にも上げられており、このため地域の特産品として、製品化が検討されたと判断した。
https://www.city.kuji.iwate.jp/assets/fukushi/151215_furusatotenken_yamane.pdf（2023年12月8日確認）。

ごど豆の製品化については、温泉の休業に伴う指定管理者の交代により、資料などが散逸したとされ、詳細は確認することは出来ないが、当時のべっぴんの湯の活動や利用者の感想は、インターネットやSNSなどに残されており、これに加え当時のスタッフからの聞き取りにより、その概要を確認できた。

2012年頃に温泉施設内の物販にて、袋詰めした乾燥ごど豆を販売していた（図

5）。この乾燥ごど豆は、いずれも地域住民が製造したものである。



図5. 新山根温泉べっぴんの湯で販売されていたごど豆 べっぴんの湯スタッフブログ（2012年2月6日）より

<http://sinyamaneonsen.seesaa.net/article/250759682.html>（2023年12月8日確認）

さらに2016年頃には、真空パックした製品を販売した（図6）。原材料名に黒豆・大豆とあることから、煮豆には、きな粉をまぶしたと考えられる。この製品は、2017東北・新潟のこだわり 特産品ガイド 特別号 発酵食品特集

（https://www.kasseiken.jp/pdf/library/guide/tokusanGuide_2017jp.pdf 2023年12月8日確認）に掲載されている。

パッケージ裏面には、本品の利用法が以下のように記されている。

『本品一袋（60g）と食塩水（200cc、塩10g）を容器に入れ、常温または冷蔵庫で一日程度もどしてからお召し上がりください。発酵保存食独特の風味をお楽しみいただけます。発酵臭がありますので、タッパ等の密閉容器で保存してください』

一方、元べっぴんの湯調理主任であった畠山美保氏(久慈市総合政策部 2018)に当時のお話を伺ったところ、宿泊施設でごど豆を提供する際、水洗いの回数を増やすことで、独特の臭いを除き、さらに乾燥ごど豆を塩水で戻す時に使用する塩水の濃度を下げるなど、食べやすく工夫したと伺った。通常、乾燥ごど豆を塩水で戻す際、水1升(1.8L)に対して、塩1合(230g)を加えて塩水を調整する。販売された真空パックごど豆レシピでは、約2/5に減塩されていた。



図6. 真空パックごど豆の販売品 写真提供：藤崎ジュン氏

<https://www.facebook.com/kitasanrikurukuru/posts/pfbid0rSFXtFphhcM1ZeRkw3AK2sFvmwDryzbR1p9pmNtxPsZ3bNYjcNUr6gAcBJ82njiul> (2023年12月8日確認)

これに加え、中山間地域の特産品開発の一環として、ごど豆を使用したさまざまな商品開発が試みられた。ごど豆飯(ごど豆を入れた炊き込みご飯, 図7)は、2016年3月に道の駅くじにて試食に供され、ごど豆チョコプリン(図8)も試

作された。さらにごど豆を入れたクッキーなども検討されたと聞いたが、残念ながらこれらの存在を示す資料を見いだせていない。



図7. ごど豆飯のツイートおよびチラシ

<https://twitter.com/beppinnoyu/status/694058657428811776> (2023年12月8日確認)



図8. ごど豆チョコプリンのツイート

<https://twitter.com/beppinnoyu/status/687145592657543168> (2023年12月8日確認)

4. おわりに

前述のように新山根温泉べっぴんの湯は、2019年10月に湧出量の減少に伴い休業し、これと同時にごど豆および関連製品の販売・試作は終了した。その過程を大まかにインターネット・SNSの情報を通じて確認することができた。

2022年、著者が山根六郷研究会を通じて地域でのごど豆製造に関して伺ったところ、製造者の高齢化が進み、製造は困難だろうとの回答を得た。これにより、岩手県久慈市山根地区におけるごど豆の製造は、残念ながら終了（絶滅）したと判断した。

一方、現在でも岩手県田野畑村沼袋地区では、若干製法が異なるがごど豆を生産している（岩手県田野畑村 2023）。このため今後は、田野畑村沼袋地区のごど豆製造の調査を通じて、発生する菌類の実態とその機能を明らかとしたい。

謝辞

新山根温泉べっぴんの湯におけるごど豆および関連製品については、畠山美保様よりさまざまなご教示を受けました。この場を借りて深く感謝致します。

また、八戸工業大学工学部 本田洋之博士、ふれあいパーク山田、エフエム岩手 久慈市支局、合同会社 プロダクション未知カンパニー 藤織ジュン様、社会福祉法人 琥珀会 田代誠様には、インターネット・SNS上の掲載写真使用許可や使用に関する便宜を図っていただきました。重ねて深く感謝致します。

引用文献

岩手県教育委員会 (1979) 宮古市重茂字荒巻地区 漁労習俗調査. 岩手県文化財調査報告第30集, 岩手県教育委員会, 盛岡
 岩手県田野畑村 (2023) 田野畑村総合計画, 田野畑村
 大森輝 (1989) 下閉伊郡岩泉町「釜津田」

と「下有芸」地域における焼畑習俗調査報告. 岩手の民俗 8・9: 87-102

小田正博 (2008) 南部詞の世界 改訂版第一巻, 小田正博, 六戸町 (青森県)

川上香 岩手県久慈市における伝統智. http://www.ppmusee.org/_src/1636/kujil-jpn.pdf (2023年12月8日閲覧)

久慈市総合政策部 (2018) 山あいの静かな宿 新山根温泉べっぴんの湯. 広報くじ 平成30年12月1日号 (No. 306) : 2-7

ごちそうさまおふくろの味刊行委員会 編 (1979) ごちそうさまおふくろの味—岩手の郷土料理—, 熊谷印刷出版部, 盛岡
 菅原税子・大山陽子・荒川薫子・大森輝 (1995) 大豆関連発酵食品「ごど」—岩手県特産の背景と食品学的評価—. 岩大教育学部研年報 55: 119-130

飛澤茂美 (2020) 墓目弁物語<辞典>増補版, 飛澤茂美, 盛岡

中市謙三 (1929) 野邊地方言. 旅と伝説 134: 38-42

なにゃとやら編纂委員会編 (1983) なにゃとやら—岩手県北地方の伝統食を探る—, 熊谷印刷出版部, 盛岡

西根町史編纂委員会 編 (1990) 西根村史 民俗資料編, 西根町, 西根町

「日本の食生活全集 青森」編集委員会編 (1986) 日本の食生活全集②聞き書 青森の食事, 農山漁村文化協会, 東京

「日本の食生活全集 岩手」編集委員会 編 (1984) 日本の食生活全集③聞き書 岩手の食事, 農山漁村文化協会, 東京

「日本の食生活全集 宮城」編集委員会 (1990) 日本の食生活全集④聞き書 宮城

の食事, 農山漁村文化協会, 東京
船越田鶴 (1940) 下閉伊郡門馬村郷土教育
資料 第四編 民俗 [岩手県立図書館蔵]
民俗学研究所 監修 (1955) 総合日本民俗
語彙 第1巻 (アーキン), 平凡社, 東京
山野目訓導 (1940) 下閉伊郡田老村郷土教
育資料 [岩手県立図書館蔵]
山根六郷研究会 (1991) ふる里伝承記録映

画 山根六郷の四季 三部作「山壁 (やま
ひだ) の食 (く) らし」, 山根六郷研究
会, 久慈
山根六郷研究会 (1994) 山根・六郷自然・
文化景観等調査報告書 山根風土記, 山根
六郷研究会, 久慈

沖縄の歳時風習における植物を用いた食品梱包文化の移り変わり
～ムーチーの日と豊年祭の事例に～

玉木 陸斗

東京農業大学国際食料情報学部宮古亜熱帯農場

The Shifting Culture of Food Packaging Using Plants in Okinawa's Seasonal
Customs: The Case of Muchi and Harvest Festival.

Rikuto TAMAKI

Miyako Subtropical Training and Research Farm, Tokyo University of Agriculture

はじめに

日本各地において、植物の葉を使った梱包文化は存在している。イネ藁を使って包まれた藁納豆や柏餅が思い浮かぶ植物を使った梱包文化になる。しかし、農林水産省がまとめたうちの郷土料理

次世代に伝えたい大切な味 (https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/index.html) には日本各地に伝わる植物を使った梱包事例がある。東日本においては、カシワの葉で端午の節句のモチを包む文化がある、一方で、西日本では、サルトリイバラの葉で端午の節句のモチを包むという文化が現在でも残っている。

沖縄県は、九州から台湾に連なる南西諸島の南半分、およそ北緯 24 度から 28 度、東経 122 度から 132 度に位置しており、距離にして東西約 1,000 km、南北約 400 km に及び広大な海域に散在する琉球諸島の島々から成る。琉球諸島には、沖縄諸島、先島諸島、尖閣諸島、大東諸島の大小 160 の島々 (0.01 km² 以上) があり、そのうち有人島は 47 である。

筆者は 2016 年から沖縄の農耕文化や伝統食文化について聞き取り調査を実施してきた。その際に、伝統行事について聞き取りを行うと、農耕祭祀

の供物や行事食について話を伺うことあった。そこで、様々な島にて自然の植物を使った食文化が今でも残っていることが明らかになった。

しかし安易にプラスチック製の梱包資材が購入できるような世の中になり、植物を使った梱包文化が消滅の危機にさらされていると実感した。

そこで筆者自身にも生活の中で親しんだ文化である、ムーチー(鬼餅)を起点として、本研究を実施する決意した。本研究は、沖縄に残存する植物を使った梱包文化と食の関係性について民俗植物学的な視点から報告する。

調査方法

(1) 現地調査

現地調査は、沖縄本島・先島諸島は 2016 年から 2024 年 1 月まで実施した。

フィールド調査は、都市間は航空機、島嶼間は高速船、島内は、自転車、自動車及び村内は徒歩によって移動した。

調査地は、沖縄本島(名護市久志、南城市玉城奥武)、宮古諸島(多良間村)八重山諸島(石垣市白保、竹富町竹富、竹富町小浜、与那国島)で現地協力者とともに、地元精通している方や老人会の皆さんに、協力を得て聞き取り調査を実施した。調査項目は以下の通りである。ムーチーの文化有無、他の

行事にて植物の葉で包む文化があるのか(料理名なども含む)。包む材料となる植物の種類(方言名)なども聞き取りを行った。

(2) 文献調査

沖縄県立図書館や宮古島市立図書館に所蔵されている、市町村字誌の民俗編や生業編から抽出した。ムーチーにまつわる伝承やムーチー行事の方言名、梱包にまつわる植物(方言名)、習慣等を追跡した。

ムーチーの説明

ムーチーとは、旧暦 12 月 8 日(一部地域では、12 月 7 日)一年間の厄を払う物忌みの儀式で悪霊や悪疫などを払いのける民俗行事として行われる。「鬼餅」と呼ばれる由来は、民話に基づいており、那覇市首里金城町に残る民話からと言われている。

両親を早く失った兄妹の妹が年頃になり嫁ぐと、ひとり投げやりに暮らす兄が鬼と化し、家畜だけでなく子どもも食べるようになった。そこでそれをなんとかしようと、妹が兄の大好きな餅に鉄を入れて作り、食べている隙に崖から突き落とし、退治したと伝えられている。

基本的な作り方は、もち粉に砂糖など混ぜた後、水を加えて手でこねて、耳たぶくらいの硬さにする。ぬれた布巾で包んでしばらく寝かした後、生地をおにぎり大に分けて、サンニン(月桃)の葉の裏側にのせて包み、紐で結び 30 分間ほど蒸す。ウコンの粉末や黒糖、紅芋などを入れて、彩りよく仕上げることもある。

出来上がったムーチーのお初(ハチ)は、必ずヒヌカン(火の神)とトート

ーメー(仏壇)に供納して、家族の健康を祈願する。子供がいる家庭では、子供たちの年の数だけひもで両端を縛り、天井から梯子をつるしたようにして、無病息災を祈願する。このムーチーを初めて迎える赤ちゃんは、ハチイムーチー(初餅)として、赤ちゃんの健康と無病息災を祈願して、親戚や知人、隣近所にお配りする風習がある。ムーチーの煮汁は、鬼の足を焼くといって門口や、屋敷の隅々にかけてりする(渡口 1981)。

聞き書きの結果

沖縄本島①

2022 年 12 月南城市奥武島では、旧暦 12 月 8 日にムーチーを作る。所用がありその日に、島の中にある奥武観音堂を訪ねた。神殿の中には、供物としてクバの葉で包まれたムーチーがあった(図 1)。島内には、月桃が畑の隅や境界線用にと植えられているが、ビロウ(方言クバ *Livistona chinensis* (Jacq.) R.Br. ex Mart.)の木は限られた場所にしかない。島民に会うことができず、後日奥武島区が発行している字誌によると、クバやサトウキビの葉を用いてムーチーを作ると記されている。



図 1. 供えられたクバ餅

沖縄本島②

2022年4月に調査を実施した名護市久志においては、ムーチーの日にはクマタケラン (*Alpinia × formosana*) を使用する。集落を歩いてみると、屋敷内の畑にクマタケランが植栽されている。畑作業中の80代女性に尋ねてみると、クマタケランを'メス'と称し、シマゲットウを'オス'と称し、大雑把な品種の区別をしている。さらにムーチーについて尋ねると、シマゲットウは包むときに葉が硬く、匂いも好みかわかれるが、クマタケランは柔らかくて匂いもそこまでしないから昔からムーチーは、クマタケランを使っているからアタイの中にも植わっているんだ。と説明を受けた。

ムーチー文化は沖縄本島周辺離島のみにはかない風習であるため、先島諸島ではムーチー文化は存在しない。しかしながら、豊年祭や十六日祭に植物の葉で包んだ餅を供納する習慣がある。それらの聞き取り事例について報告する。

多良間島

聞き取りによると、旧暦一月十六日の十六日祭(あの世の正月)にキビ餅(キム°ィ°ムツ)を食べる風習がある。方法は、以下の通りである。屋敷内や畑に生えているクマタケランの葉を採取し洗い、水に浸しておいてキビとコメを葉にのせて包んで炊く。という風習が一部の家庭で残っている。

石垣市 聞き書き ①

豊年祭(プーリン)は村全体で行う大きな祭りである。その供物の一つとしてカナパムチ(リュウキュウイトバシヨウで包んだモチ)を供納する。

2023年に行われた白保地区の豊年祭に参加した。以前よりお世話になっている方のところで、プーラムツの製造工程を見学した。山から採ってきたリュウキュウイトバシヨウ (*Musa balbisiana* Colla) の葉を既定のサイズに合わせ、2種類の形を準備し、長方形と正方形の葉の2つの組み合わせで餅を包む(図2)。しかし、台風よく来る襲来する季節のため、台風が襲来する前に採取していた葉を冷蔵庫にて保存した。



図 2. 成形したリュウキュウイトバシヨウの葉 2023年7月撮影

餅を包む前に、濡れ布巾で葉の表裏をきれいにふき取り、包む側の葉に油を塗る。市販のモチ粉に水を加えて、練り計量したのを正方形の葉に乗っける。手で平たくなるように葉の上に押し付ける。餅の上にもう一枚の長方形の葉を被せて包む。その後は、蒸し器で蒸す。蒸されて完成したのは図3の下に示している。

与那国島

旧暦 6 月以降の丙午（ひのえうま）に行われる豊年祭にて、クバ餅を島の御嶽に供える。神事・祝い事に使われるクバの葉餅は昔から白い餅が使われている。供物の準備は、供物の準備は公民館役員がする決まりになっている。13 の御嶽のすべてに供えるため、13 膳のお膳が 13 回供えられる。その中には、米・もち 9 本・にんにく・生蟹 9 匹が供えられる。クバの葉餅には紅芋・黒糖・ウコン・長命草など様々な味のものがあるが、これは最近になって特産品用に作られたものが購入できる(図 3 上)。



図 3. 上 クバ餅 下 カナパムチ
2022 年 7 月 撮影

竹富町小浜

雑穀栽培など農業の得意な 88 歳の夫婦に聞き取りを 2023 年 7 月に聞き取り調査を行った。稲作栽培が可能な小浜島だが、戦前終戦直後はイモを常食としていた。その中でリュウキュウイトバショウの葉で包んだ餅を食していた。モチ粉を使っていない餅である。在来のトゥマイクルー、沖縄 100 号などのカンショを摺り下ろし、リュウキュウイトバショウ

ウの葉で包んだ。なぜ、イシヌムツという名前の由来を聞き取りした。戦前前後は、東石に使っていた菊目石(珊瑚)を摺り下ろす調理器具として利用していたことから、イシヌモチと呼んでいる。農耕祭祀儀礼にも供納する。

竹富町竹富

種子取祭は、陰暦の 9、10 月中に廻り来る甲申（きのえさる）の日から甲午（きのえうま）の日と定められ、国の重要無形民族文化財に指定された島内最大の祭事である。儀礼食としてのイヤチを作る。実際の料理工程を 2022 年 9 月に実施された竹富町立竹富小中学校イヤチ作り体験教室に許可を得て見学した。材料は、モチ米・モチキビ(本来はアワ)・アズキ(沖縄ではササゲのことを示す)になる。四枚鍋で湯がいたモチ米とモチキビにアズキを入れてイビラ(大きな木製しゃもじ)で混ぜる。蒸らす工程でカチャヌパー(リュウキュウイトバショウ)の葉を用いる。蒸しあがり後、さらにイビラで練る。練り上げたら、イヤチダー(イヤチを入れる長方形の木枠)に詰める。その時に、タッピヤギ(*Crinum asiaticum* L.)の茎を広げたもので、押し付けて詰めていく。



図 4. イーヤチダーに詰めている様子
2021 年 9 月 竹富島にて撮影

文献調査による結果

特徴的な聞き取りや伝承が記載されている地域について地図上に示す(図5)。以下の市町村である。石川市・具志川市・津堅島(現在うるま市)、備瀬

(本部町) 座間味村、久米島西銘(久米島町)、屋良(嘉手納町)、佐敷町(南城市)、渡名喜村、伊是名島(伊是名村)、北大東村の10地域。文章については、原文をそのまま転記している。

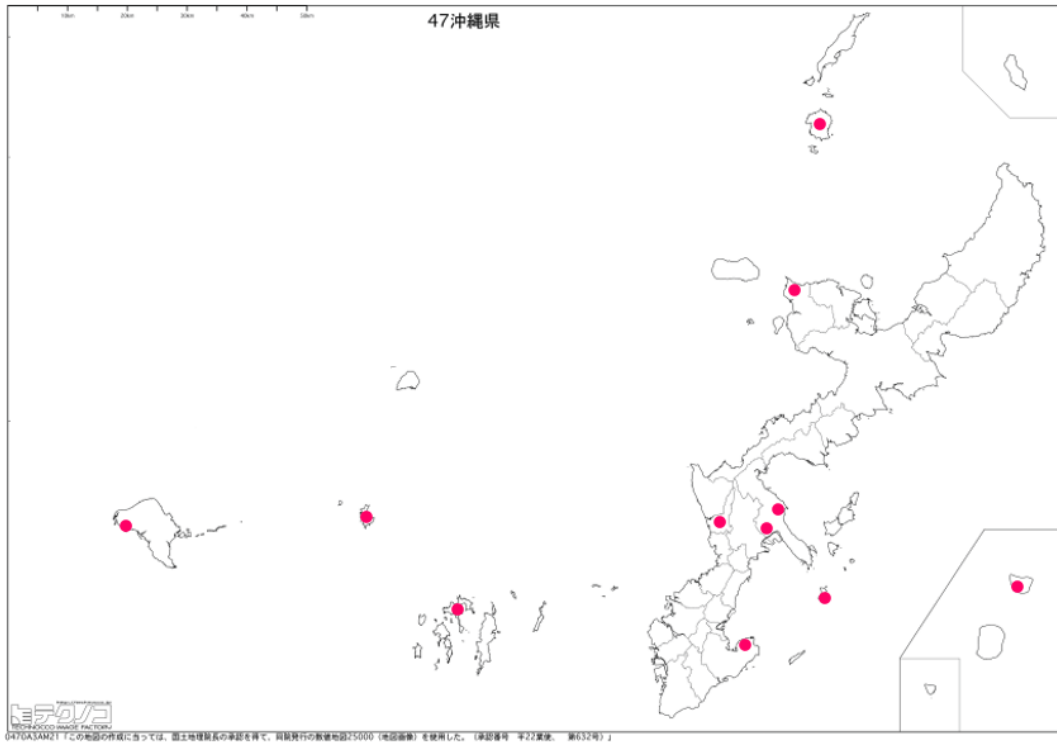


図 5. 文献によって特徴的な伝承と風習があった地域(沖縄本島と周辺離島)

*https://technocco.jp/n_map/dl/0470/okinawa2_am.pdf を一部改変

石川市史(現在のうるま市)

カンカムーチーと称しているが、伊波では、牛の肉と血で子供の健康を祝うものである。その日の夕刻前に大人はアジマー(交差点)に集まりしめ縄を緋い、ついでに酒を飲んだが子供たちに牛肉を配ったりしていた。そこでなったしめ縄は牛肉を洗った水に浸してあと、ムーチーガーサ(ゲットウの葉)を吊して門に張ったりした。昔は、部落の入口に縄を張った。

具志川市史(現在のうるま市)

市史によれば、天願では旧暦12月7日屋取では、8日に行っている。米粉で餅を作り、さとうきびの葉や月桃(サンニン)の葉に包んで蒸す。天願や江洲ではその汁は邪気を払う効用がある。と言われていたので、庭先にまいていた。家庭によっては、子供の年の数だけ作って与え、軒下や玄関に吊るしていた。川田では、九つムーチーと称し、小さいものを八個、一番下に大きなカムーチー(クバ、サンニンの葉

で包んだ大きめのムーチャーを力餅といった) 江洲では、餅を食べた後の包み葉は十字にして家の軒下に差し込んだという。昆布(屋取)ではシワシムーチャー(師走餅)といい、米粉にモロコシ粉を入れることもあったという。

備瀬 (本部町)

ウニムッチーと呼び、小麦粉や粟粉にイモを混ぜ合わせ、または糯米をこねて月桃やカンシャの葉に包んでウニムッチーを作り神仏に供え災払いする。この日はライミ(折り目)でもあり、山羊汁や豚の肉汁等も神仏に供える。従って鬼餅を食い過ぎるとライミのサンデー(直会)ができないから適度にしなさい、と親から注意されたものである。

座間味村

座間味村史によれば、ムチャーと呼び食べたとは、十字にしてつるす。屋嘉比や久場島に漁師船でサニンとクバの葉を採りに行った。

久米島西銘(現在の久米島町)

前の日につくった餅を子供たちは、年の数だけ紐で結んで壁に吊り下げた。門口には二本の竹を立て、それに注連縄を張り渡し、餅を食べた後のカーサ、白紙、ンバシの葉挟む。1970年代初期までは見られたが、自然に行われなくなった。久米島では月桃ではなく、クマタケランを使う。餅の煮汁は門前の道に撒いた。屋敷木うい切倒すことができるのは、この日だけであるといわれた。その際、代わりに何万何千何百何十本の木を植えますと唱え

た。

津堅島(現在のうるま市)

その日は、「ウルマンチャー」といって、ユーナの木の子で男女を型どった人形を造り、胴体にはバショウの葉の茎を20センチぐらいに切ってさし、男には弓矢を持たせ、女にはナギナタを持たせて軒下につるし魔除けとした。夕方になると餅が出来るので、その煮汁を門の入口に注ぎ、そのあとウルマンチャーの口には餅を少しずつやり、そのあと軒下から取り除いたが、子供たちの間に「ウルマンチャーヒッキエー」といって、他家の軒下につるしてある「ウルマンチャー」をぬすみその数を競う風習があった。翌日は、「ウルマンチャーシミエー」という遊びがあり、まず二人の「ウルマンチャー」を組み合わせて結び「ウルマンチャーシーミティー、シミティー、モウキテイ、ササイエ、ルカヘーイ」と叫びながら上の方にほうり投げる。そして落ちてきた時、上になったのが勝ちということで、負けたら、「ウルマンチャー」を相手に渡すが、これを何回も繰り返して、沢山取るのを誇りにしていた。娯楽の少ないしまの子供達にとってはほんとうに楽しい遊びの一つであった。なお、このウルマンチャーとは、「うるまの人」とも考えられた。またその年に誰かが亡くなった家庭では餅を造らない風習だった。

渡名喜村

村史によれば、ムーチャーガーシャが不足すると、クバ、アダン、ヤマボートウ(オオタニワタリ)の葉で包んだ。その年の冬に亡くなった新仏では裸ムーチャーと言っ

て葉っぱを付けない餅を作った。ウナーヌヒシャー(鬼の足)といい軒先に吊るし魔除けとした。

屋良(嘉手納町)

7 日に行く食べた後のサンニンの葉を踏むと、足が大きくなる(象皮病)といって踏まないように注意された。

佐敷町(現在の南城市)

ムーチー小屋グラー 旧暦十二月九日に行われ、各集落の近辺には、ムーチーヤー毛(ムーチー小屋をたてるための原っぱ)があり、「ムーチー」の数日前より、茅などを刈り取って準備しておく。十四歳以下の子供たちは、各自、竹などを持ちより、小屋づくりをした。小屋では、子供たちが、持ち寄った材料で料理をつくって食べたり、いろいろなゲームなどをして遊ぶ。料理といっても簡単な汁とご飯が一般的であり、ところによっては、部落や大人たちから肉などの差し入れがあったという。いずれにせよ、子どもたちにとっては大きな楽しみであった。夕方になると、小屋は「ムーチーヤー ホーハイ」の掛け声と共に燃やされた。防火のため、見回りには青年たちがあたっていた。

伊是名村

この日をウェータといい、カーサ包みの餅を作り、子供たちの健康祈願をし、悪払いをする。現在ではもっぱらサンニンの葉を使うが、戦前はクバやさとうきびの葉を使った。

北大東村

十二月八日に月桃(サンニン)に包んで蒸した楕円形の平たい餅(ムーチー)を神仏に供え子供達のために「力餅を食べて大きい人、高い人に h してください」と祈願する。食べ終わった月桃の葉(カーサバー)を門や戸口に張った左縄(メ縄)に十字形に束ねて吊し鬼を払うまじないとした。又その年に生まれた子のいる家では力餅を親類や隣近所にくばる。八丈島にはこの風習はないが、戦後は八丈島出身の過程でも鬼餅を作るところが増えてきた。

植物を使った梱包文化から植生の一考

現在においては、ほとんどの地域でムーチーガーサ(月桃の葉)を用いるが、本島北部地域と多良間村においては、クマタケランを用いて梱包する習慣が今でも受け継がれている。与那国島と奥武島では、クバの葉を使った食品梱包が現在でも重要視されている。

聞き取りの結果から一考してみると、本島北部地域と多良間島においては、クマタケランが先に生活の中で利用されていて、土壌流亡防止や観賞用としてシマゲットウが入ってきたとみられる。

集落内に生えていない場合には、生えている島から採取してくるといったことがある。

ショウガ科の研究者である船越英伸によると、1832 年に書かれた「琉球国史略」には「砂仁草 三種葉相似ル。皆蒸炊用ニ供ス」。これは砂仁と呼ばれている草には、ゲットウ、クマタケラン、アオノクマタケランの三種類があり、葉は似ていてどれ

も調理に用いられる、という意味であろう。

また東京都立大牧野標本館に収められているショウガ科の押し葉標本のラベルには「七十番 砂仁 方言同シ 明治九年四月五日 那覇ヨリ採ル」とされている。

植物分類学上で見てみると基準変種であるシマゲトウは台湾と琉球列島に分布している。

クマタケランについては雑種であると考えられている。江戸末期の本草書である飯沼慾齋の草木図説(1856)に「ソノ原福州ヨリ傳ト云(ソノモト福州ヨリツタフトイフ)」と記載されている。クマタケランは当時、中国原産と考えられており、その後も Makino(1902)などでもクマタケランは “Native of China” と書かれているように、今日考えられているようなゲトウとアオノクマタケラン(*Alpinia intermedia* Gagnep.)の雑種という考えはなかった。

これはゲトウより葉が柔らかく、アオノクマタケランより葉が大きいクマタケランが利用しやすかったことから選択的に琉球から薩摩に伝わったものと論じている。

文献から現在への歳時風習への思い

文献から読み取ると以下のことが挙げられる。

- ・子供たちの健康祈願と悪霊払いを兼用。
- ・周辺離島地域では稲作が可能であった地域とそうでない地域で、モチ粉を使った餅かカンショを使った餅なのか地域の農業事情と食生活が垣間見れる。
- ・ムーチーの日に合わせて地域が一つと

なり、豚や牛を屠畜し、左緋い縄に肉片や足骨などを下げるシマフサラシの行事が同時に行われていた。

ムーチーの文化がない先島諸島では、豊年祭におけるカナパムチの文化が深く根付いている。

- ・豊年祭の日に来れない子や孫のために、作って蒸して郵送するなど地元の人たちの中では根付いている。
- ・先島諸島では、ムーチーの文化はなかったが、最近では作る家庭もある。

文献に記載があった、行事というのは現在では継承されていないことが多くある。人と物の流れが活発となり容易にモチ粉が手に入ることで、昔はイモやトーナチン (*Sorghum bicolor*) を混ぜて作っていた地域でも、変容していると思われる。

また生活スタイルが多様になり、一軒家でなくアパートやマンションなども多く建ってきた。アタイ(自給菜園)などで採取して四枚鍋で作ることは少なくなっている。そこで、月桃の葉も市場やスーパーマーケットにて数枚単位でまとめられて販売されている。沖縄高速自動車道の伊芸サービスエリアにてご自由にお持ちくださいと無料配布してるところもあった。

包んだ餅がバラけないように束ねるのは、昔は月桃の茎を叩いて作ったもので縛るが、現在では簡易なビニール紐で行うことが多くなっており、ゲトウの茎を使って縛るという工程は消滅の危機にさらされている。ゲトウの茎を叩いて作った紐で縛るのを以下の通りである(図 6)。



図 6. 昔ながらのムーチーの様子

ムーチーの日が近づくとスーパーマーケットでは、モチ粉や黒糖、カボチャの粉、ヨモギの粉、紅芋フレックなどが並んだ特設コーナーが設営される。ムーチーの日の前日や当日には、スーパーマーケットでもゲットウの葉に包まれて蒸されたムーチーが販売される。ここ最近においては、コンビニエンスストアにてムーチーの日が近くなると月桃の葉のパウダーを練り込んだムーチーが販売される。食べやすいように梱包資材はプラスチックになっている(図 7)。



図 7. 市販されている新たな形態のムーチー

将来に継承するには

時代とともに歳時風習は変容していく

が、世代が変わっても、現在でも継承されている文化に誇りを持ち、これから先、昔の梱包文化などにも着物してもらいながら、歳時風習が続くことを切に願う。また、八重山諸島の豊年祭についても家庭カナパムチが受け継がれて、農耕祭祀を支えていることには間違いない。しかし課題がある、どの世代にも作ってもらえるように、梱包するリュウキュウイトバショウの葉の調整方法やレシピなどをデジタルデータに書き起こし残すことが、さらなる継承につながると期待している。

この伝統のある植物を使った梱包文化を未来へつなぐためには、植物の維持から保全もしっかりと取り組む必要がある。

本研究では、周辺離島での聞き取り調査は実施できておらず、今後調査に挑んでみたい。

謝辞

今回の現地調査にあたり、寛大な対応やご助言いただきました東京農業大学農学部河瀬 眞琴 教授、西尾 善太 教授、丹羽 克昌 准教授、東農大宮古亜熱帯農場 西川 真衣子 氏、聞き取り調査にて多大なご協力を賜りました、吉村 良美 氏、垣花 光夫 氏、垣花 明美 氏、屋良部 初 氏、屋良部 京美 氏、沖縄県立宮古総合実業高等学校 米盛 英博 教諭、玉城 享子 氏、よなは民具 與那覇 有羽 氏、與那覇 桂子 氏、野嵩モチ店、ショウガ科の分類や技術的な面にてご指導いただいた東京農業大学植物園元技術職員 伊藤 健 氏、また植物分類学などについてご教授いただきました船越 英伸 博士、など数多くの皆様にご協力いただいております。

本報告の一部は、
令和元年度 沖縄美ら島財団の助成金事業
2021 年度味の素食の文化研究助成事業
令和 5 年生き物文化誌学会さくら基金助成事業
Slow Food ®Ryukyu・Slow Food®
から助成を受けました。
記して感謝申し上げます。

引用文献

『字誌』編集委員会. 2011. 奥武島誌奥武区自治会:163-179.
石川市役所. 1988. 石川市史. 伊波信光:305.
伊是名村史編集委員会. 1989. 伊是名村史下巻 島の民俗と生活. 伊是名村:p372-373.
北大東村誌編集委員会. 1986. 北大東村誌. 北大東村役場:p589.
久米島西銘誌編集委員会. 2003. 久米島西銘誌. 久米島西銘誌編集委員会:p600
具志川市教育委員会. 2011. 具志川市史第 8 巻 [1] . うるま市具志川市史編さん委員会:p511-526.
佐敷町史編集委員会. 1984. 佐敷町史 2 民俗. 佐敷町役場:p396.
座間味村史編集委員会. 1989. 座間味村史中巻. 座間味村役場:p395
竹富町役場. 2011. 竹富町史第二巻竹富島. 南山舎. p428-513.

竹富町役場. 2011. 竹富町史第三巻 小浜島. 南山舎 p293-395.
玉木陸斗. 2023. 沖縄で収集されたアワの農業形質と種子調達からみる雑穀の多様性. 東京農業大学修士論文:1-62.
渡口初美. 1981. 沖縄の祭祀と行事料理. 国際料理学院:80-82, 189-190.
渡名喜村. 1983. 渡名喜村史下巻. 渡名喜村:p504.
仲田 栄松. 1984. 備瀬史. 本部町備瀬区事務所:p184.
うちの郷土料理次世代に伝えたい大切な味
https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/index.html 2024 年 1 月 31 日最終アクセス
船越英伸. 2021. ショウガ科の世界(4)~月桃について. 熱帯植物友の会 No. 190.
比嘉繁三郎. 1990. 津堅島の記録. 比嘉繁三郎:241-242. .
屋良誌編纂委員会. 1992. 嘉手納町屋良誌. 字屋良共栄会:p526.

雑穀街道普及会の顛末記

～見捨てられた穀物への多くの感謝と少しの謝罪～

木俣美樹男

雑穀街道普及会／植物と人々の博物館

A Detailed Report of Japan Hirse Straße Promotion Band;

Many Thanks and a few Apologies to the Orphan Crops

Mikio KIMATA

Japan Hirse Straße Promotion Band, Plants and People Museum

要旨

関東山地の農山村を頻りに訪れるようになったのは 50 年ほど前からである。1972 年に東京に出てきて、雲取山に登って三峯に下ることから始めて、1974 年からは雑穀の栽培・調理のフィールド調査のためにたび重ねて関東山地各地の山村に行き、爾来、何百もの農家を訪問してきた。この間に経験した不条理で非情理な社会事象に伴う 3 つの謎を抽出し、解き明かそうとした。本稿は、東京学芸大学定年退職後の 10 年間に研究成果を地域振興に役立てようと多大な時間を傾注してきた雑穀街道の普及提唱による雑穀栽培の普及活動に関して、その経過を検証した。雑穀街道普及会は多くの方々や団体による協力があったにもかかわらず、地域行政や地元市民等の関心を十分に得ることができなかつたので、解散するに至った。しかしながら、この活動過程において 3 つの謎を解く鍵は見出された。

緒言

関東山地の農山村を頻りに訪れるようになったのは 50 年ほど前からである。1972 年に東京に出てきて、東京教育大学大学院に入学し、雲取山に登って三峯に下ることから周辺の山々に行き始めた。1974 年から東京学芸大学に就職して、雑穀の栽培・調理のフィールド調査のために関東山地の山村に行くようになり、爾来 50 年、定点観測のように、たび重ねて何百もの農家を訪問してきた。一方で、日本全国、ユーラシア各地のフィールド調査も続けて、国内外で多様な経験をした。これらは『日本雑穀のむら』(2022)と『雑穀の民族植物学』(2024 一部公開)で記述している。日本における雑穀とは、コムギ・イネ・トウモロコシ以外の穀物類、アワ・キビ・ヒエ・モロコシ・シコクビエ・ハトムギおよびソバ・センニンコク・キヌア等のことである。特にイネ科雑穀とはソバは 1950 年代までは日本の全土であまねく生産されていた。世界的にみれば、現在でもアフロユーラシアのサバンナやステップなど半乾燥地や丘陵地で相当量が栽培されている。

本論では、とりわけ、この 10 年の間に雑穀街道の普及活動を通じて不条理かつ非情理な社会事象を体験した。地域振興を阻害するこの経験に伴う 3 つの課題(謎)を抽出し、解き明かすことにした。西暦第 2 千年紀に生きる解き明かしたい 3 つの謎(課題)とは次の事項である(木俣 2018)。なお、雑穀街道普及会の会則は付録 1 に示した。雑穀の調査研究や普及活動の前史およびこの 10 年に関しては付録 2 に、特に、国際雑穀年 2023 の普及活動については付録 3 に示した。

人間はおおかた 100 年に満たないので、植物研究官 ET や廃棄物処理機地球型 WALL-E の

ように千年紀を見て生きることにはできない。しかし、縄文農耕の数千年紀を受け継ぐひと時の駆伝走者にはなれる。イネ米だけでなく、すべての作物を正月・小正月の儀礼を尊重して、行事食や健康食として、人々に寄り添ったその長い歴史を受け継ぐのは大切なことである。生物文化多様性を消滅させてはならない。家族自給農耕は続けるべき生業であり、家族のためにする有機農法は手間がかかり、安全ではあるが沢山は取れない。多品目多品種、在来品種の選抜は飢饉の危険を避ける方法だ。親しい知人には分かち合い、お裾分けはうれしい。しかし、現世の人々は先人の生活文化に関心がない (第1謎)。

秩父多摩甲斐国立公園周辺の農山村で、50 年ほど環境学習・環境保全を目的とした地域振興に関わってきた。篤農の人々には歓迎され、とても親しくお付き合いいただいた。彼らからは日本国の為に頑張ってくれて、ありがとうと感謝されてきた。しかし、役場行政や農業協同組合などの団体からほとんど関心を向けられたことはなかった。これは地方からではなく、私は関連団体の理事を兼務していたので、全国中央の役員と同席することも多かったが、彼らの対応も同様であった。地域の行政は、村人でない、関係者でない者の余計なお世話、迷惑と敬遠したのであろうか。私のようなマスメディア嫌いで、名利を求めている変人は猜疑の目で見られるのだろうか。自然文化誌研究会が10年ほどして環境活動を定着させると、四度も決まって追放の憂き目にあってきた。地域振興のための市民活動が軌道に乗ると地域から排除される (第2謎)。

世間では地域創成と助成金の大風呂敷が舞っているが、小利口な若者は村に誇りを持って都会に出ていき、村に残るのはどうしても先祖伝来の土地を大切にしている老人だけになるのだろう。もう高齢で畑作業がつかなく、妻女に強く励まされなければ、もう働けない。息子は野良仕事をしないで、週末は遊びに行ってしまうと民宿主人は言う。頑丈な電気柵に囲まれた畑さえも耕作放棄されている。

秩父多摩甲斐の地域では、かつて明治前期には薩長閥明治政府への反骨精神もあって、自由民権運動が勢いをもっており、五日市憲法草案も地域住民が独自に検討していた。名利にとらわれない高い自尊心をもった地域の豪農や豪商が地域住民の窮状を見かねて、自由民権運動をしたが、自由党や秩父困民党なども明治維新政府の苛酷な弾圧で、指導者は獄中でひどい目にあわされ、一家は没落・離散した。しかし、それ以後、地域住民は彼らを助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだ。この構造がその後100 年以上たってもあまり変わらないのは、明治維新政府の罪過によるのだろうか。このように地域社会の歴史への誇りを消し去ってきた (第3謎)。

多くの方々による協力があったにもかかわらず、篤農の伝統的知識や学者の蓄積された科学的知識への敬意がない地域行政や地元住民等の関心を得ることができずに、雑穀街道をFAO世界農業遺産に登録申請する活動は不成功に終わった。

1. 対象地域と活動方法

東京学芸大学定年退職後の 10 年間には研究成果を地域振興に役立てようと多大な時間を傾注して、雑穀街道の提唱による雑穀栽培の普及活動を行ってきた。とりわけ、2023 年は国際雑穀年であった。インド政府が提案して実現したのであり、長年の共同研究者、全

インド雑穀改良計画の統括責任者であった A. シタラム博士の努力によるものである。私も彼との共同提案で 1967 年に国際雑穀フォーラムの提案をしている。

現在は国連家族農業の 10 年 (2019~2028) で、国連小農宣言 (2018 年) もなされており、昨 2023 年は国際雑穀年 International Year of Millets であった。インドでは 2018 年に全国雑穀年を祝賀し、インド外務省は国際連合食糧農業機関 FAO に国際雑穀年を提案して 2026 年に予定されていたが、国連栄養行動の 10 年 (2016~2025) の期間内に入れるために 2023 年に前倒しして決定された。これは雑穀の栄養的価値を高く評価したからである。私たちが実施してきたインドとの共同調査研究の成果も大きく貢献していると、シタラム博士からは評価されている。

1) 対象地域：雑穀街道

私たちが敬愛する上野原市西原の降矢静夫 (1910~2003 年) は、自分たちの食生活を賄ってくれた雑穀の恩を忘れてはならないとの信念から、彼岸に旅立つ直前まで雑穀栽培を続け、在来品種の種子を絶やさないように保存していた。実際、雑穀はミネラル分はじめ栄養的価値が非常に高い食材として、国内外で見直されている。しかしながら、1960 年代以降は、国の工業優先と農業軽視の政策により、また山村地域の道路拡張造成により、多くの若者が町に働きに出たために山村の家族農業や林業は従事者の高齢化により衰退の一途を辿ってきた。耕作放棄地や所有者不明土地が激増している。

雑穀街道 Hirse Straße に沿う山村では多様な雑穀が栽培されてきた。そこで、私は生物文化多様性が豊かな地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から 相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と呼ぶことを提唱した (初出は第 34 回環境学習セミナー 2014)。これらの地域は縄文時代中期の勝坂式土器の文化圏にかさなる。栽培植物の在来品種を保存・継承するために種子を共有するつながりを創り、山村の生業、農耕技術や加工・調理技術、多様な食材・料理を継承し、未来に向けて山村社会の復元力を高め、家族とともに幸せに暮らせるようにしたい。伝統的な農作物在来品種をめぐる農耕文化、栽培、加工、調理、儀礼などは、縄文時代以来の祖先から継承してきた社会的共通資本、現在も生きている大切な生業文化財である。この山村の生活を豊かにし、男女そろっての健康長寿を支えてきた麦・雑穀を中心としてきた生物文化多様性がとても大事にされている地域が、私たちの暮らしている関東山地の山村である。縄文文化の中心地は関東甲信地方で、今日でも山住の生活文化が生業や食べ物に色濃く継承されている。

雑穀街道は山村と都市をつないで、縄文時代から未来へと、素のままの美しく楽しい暮らしを継承するために、雑穀や豆類、野菜などの在来品種を栽培保存する活動を普及する。現地、農耕地での環境保全活動こそが有効である。繰り返して記すが、雑穀街道に沿って、今も雑穀など由来作物を栽培している山村がある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などがある。世界農業遺産の認定を受けるに正にふさわしい地域である。

FAO 世界農業遺産は現在日本では 15 か所 (2024) が認定されており、山間地農耕で雑穀や焼畑と関わっているのは、徳島県にし阿波地域の傾斜地農耕システムおよび宮崎県高千

穂郷・椎葉山地域の 山間地農林業複合システムの 2 か所である。雑穀が近年までもっとも栽培されてきた雑穀街道地域を 3 番目に登録することが、私の意図した手段であった。

2) 雑穀街道普及会の活動 :

準備日程 (2021.12~2024.2) では、次の活動を実行した。

- ①雑穀栽培者を増やす。上野原市の雑穀在来品種、アワ、キビ、モロコシ、ヒエ、シコクビエ、トウモロコシ (甲州) など、キヌアおよびジャガイモ、サトイモ、ウズラマメ (ひよっこ)、シャクシナなど、相模原市の雑穀在来品種、アワなどやダイズ (津久井在来)、ノラボウ、キュウリ (相模半白) など、茶や桑 (養蚕) などの栽培者を増やす。ア) 栽培講習会を連携して開催する。イ) 雑穀種子と栽培手引きを配布する。ウ) 雑穀など栽培者組合を創る。
- ②雑穀街道協議会 (申請団体) の創立準備をする。ア) 雑穀街道協議会準備会の活動申請団体を創立するために、協賛後援団体への説明などの準備会活動を進め、参加・賛同を依頼する。イ) シンポジウムやセミナーを行い、普及活動を行う。ウ) 雑穀街道普及会は雑穀街道協議会が創立されるまで暫定事務担当をする。
- ③雑穀街道協議会 (申請団体) を創設する。ア) 事務局担当の設置 : 定款、組織規程、構成員名簿、会計規程の作成。イ) 農業遺産保全計画を作成。ウ) 創立総会の開催。
- ④農林水産大臣への申請準備。ア) 山梨県と神奈川県知事の意見書。イ) 学術機関の意見書。

古守豊甫・鷹嘴テル両博士の意見では、桐原の長寿の要因は次の点と指摘されている。マクバガン・レポート (1977)、チャイナ・スタディ (2004) とおおよそ同じ見解である。

- ①長寿桐原は麦を中心とした雑穀、芋類、豆類を十分に摂取して、ビタミン B1、B6 等を充実してきた。
- ②全粒粉および小麦胚芽の高度活用により、ビタミン E を多量に摂取し、不飽和脂肪酸に対する比も正常値を示している。
- ③低コレステロール食品を適当に組み合わせ、動物性食品を発達段階に応じて適量にとってきた。
- ④桐原地区特産の冬菜の常食によって、ビタミン A、C、鉄分を十分に補給してきた。
- ⑤発酵食品を十分に活用し、腸内細菌を正常に保っていた。
- ⑥調理はすべて一物全体食、土産土法でなされていた + ⑦食物繊維多含食品を補充する。健康・予防医学、栄養学を大切にして、ピンシャンコロリ天寿を全うする (古守・鷹嘴 1986)。

趣意書 : 雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録しよう。

雑穀街道普及会 関東山地南部の山梨県東部地域および隣接する神奈川県北部地域は、首都圏にありながらも、過疎・高齢化が著しい典型的な農山村地域である。秩父多摩甲斐国立公園の周辺にあり、野生生物が豊かに生存している一方で、野生動物による食害は森林から農耕地に及んでもいる。また、耕作放棄地も拡大し、自然環境に適応して形成されてきた伝統的な山間地・里山での栽培植物の在来品種、農耕技術、それらの加工調理技術、さらに農耕儀礼など、伝統文化の継承が消滅・危急の時期を迎えている。特に、フンザと

並び称された上野原市桐原地区は、穀菜食による世界的に知られた健康長寿村で、生物多様性に依拠した文化多様性も豊かに蓄積されてきた地域社会であった。

しかし、この 50 年ほどで、生物多様性のみか、随伴する文化多様性までが過疎・高齢化の末期的状況により、著しく衰退傾向にあり、継承の危機に瀕している。したがって、山間地・里山における生物文化多様性保全の手法を継承して、野生生物と人間が共存、共生可能な生活技能を再創造することは、自然共生社会を構築するために最重要課題である。地球環境変動、多くの自然災害や病虫害の拡大など、現代文明は危機的状態にある。人間社会を安定的に維持するためには、とりわけ食料安全保障が基盤であり、地域に適した在来作物の衰退を防ぎ、それら品種の保全・継承・普及に努める必要がある。

このような課題解決に向け自然共生社会を再構築するために、農山村地域の自然共生的な生活文化の基層（縄文文化の系譜、畑作伝統の温故）にある、栽培植物、雑穀、いも、野菜などの在来品種を保存継承するためのローカル・シード・バンクを地域で共有する体制をすでに構築し始めている。さらに、自然共生してきた農山村社会で、栽培植物在来品種の栽培生産を維持、加工調理し、伝統食を活かしながら、新たな食品を開発して、地域経済を展開するように、生物文化多様性保全を確保する一般的手法を探求してきている（移行への知新、トランジション）。これまで 40 年余りの地道な成果の蓄積を発展させ、NPO 法人、農業生産法人、自治体などが連携する雑穀街道協議会を組織して、FAO 世界農業遺産「雑穀街道～農山村における生物文化多様性保全」の登録申請をめざす。

2. 調査・研究方法

自然科学論文の手順に従い、研究対象と研究方法、結果事実を公正に記録して、できる限り誠意をもって冷静にこの過程を解析、考察する。原則として個人名・敬称、個人情報 は除去するが、個別の行為や団体名については明確に記す。地域振興に重要な課題解決である、その3つの謎を解く鍵を見出すことを目的とした。本稿は環境学習原論の統合的な心の構造と機能の存在状況の分析から深く考察して、山村地域の振興方策のあり方を改善する希望を提示する。

雑穀街道普及活動において体験的に観察した事実を裏付ける配布文書や記録映像（youtube）に基づいて、上記の3つの謎を考察する。10年間には多くの関連文書を公表してきたので、これらは根拠資料になるに違いない。

2. 雑穀の普及活動とその経過観察の結果

1) 普及活動の経過

多摩川水系と相模川水系を結ぶ雑穀街道には経験豊かな篤農が幾人もいたので、長寿村桐原の研究の古守豊甫博士、全インド雑穀改良計画コーディネーターA. シタラム博士、コルカタ大学のパンダ博士、考古学の松谷暁子博士、民族植物学の阪本寧男教授、菌学の加藤肇教授、食品総合研究の平宏和博士ほか、多くの研究者たちが調査研究のために訪ねてきた。

生物多様性条約締約国会議（2010 名古屋）において展示と提案（生物多様性条約市民ネットワーク／たねと人々の未来作業部会）をした。雑穀研究会シンポジウムにおける巡検

を 3 回担当した。生きた文化財である、多様な雑穀種、その在来品種が農耕地で保存されており、日本エコミュージアム研究会大会も開催した。

旧石器時代、縄文時代の遺跡が多く発掘されている。新嘗祭への献穀も何度か行われた。私たちの生活は現在でも、長い歴史で発展してきた多様な文化が積み重なって営まれている。これらの基盤となっている農耕文化は特定の地域で、地域固有の作物群を基に起源して、世界各地に伝播した。イネ、ムギやトウモロコシとは異なり、雑穀は主にサバンナ気候において栽培化された。アフリカ、インド、中国などを経て、縄文時代以降に順次、日本に伝播してきた。

植物と人々の博物館／森とむらの図書室では、家族自給農耕、家庭菜園、市民農園、などについても地域調査の研究資料を提供している。財団法人森とむらの会の農林業政策提言のための、調査研究の全資料も継承し、保管してある。植物と人々の博物館は、東京学芸大学と小菅村の社会連携協定により、エコミュージアム日本村のコア博物館として小菅村井狩にあり、植物標本、民具などを多数収蔵、展示している。森とむらの図書室では日本のほか、インド亜大陸、ユーラシアや北アメリカ大陸で収集した農林業、環境、教育、民族学などの文献書籍（約 8,000 点）を所蔵、日本村塾セミナーや雑穀栽培講習会なども開催し、雑穀栽培見本園も維持し、在来雑穀の自家採種種子を希望者に配布している。

他団体と連携して環境学習市民連合大学をウェブ・サイトに作り、セミナーを公開開催し、普及啓発活動を展開している。雑穀や在来作物の栽培・加工・調理、伝統的知恵、環境学習など基礎研究から応用研究を地域振興に寄与するように提供してきた。また、東京学芸大学環境教育研究センターとしても、雑穀ほかの栽培植物在来品種で、山村民（小菅村小菅の湯）と都市民（小金井市パン和洋菓子組合）の協働により商品開発を行ってきた。

このように 50 年（1974 年～現在 2024 年）に渡って、定点参与観察してきた。20 世紀後半においても、日本で最も多くの穀物の種類、在来品種が残り、多くの篤農が継承してきた。しかし、繰り返し強調するが、雑穀をはじめ、芋類、豆類、野菜類ほかの在来作物品種も急激に生物文化多様性を衰退させて、消滅に向かっている。家族が生存するための、これら伝統的な優れた食材を保存するように、地域社会の理解を広めて、再び普及する必要がある。伝統的な栽培植物の栽培、加工、調理技術を伝承し、生物文化多様性保全を継承したい。上野原市西原に現在も機能している、自然エネルギーで動く水車を活用、維持する。

日本における雑穀の栽培面積は急減してきたが、中山間地の多い日本では麦や雑穀は本来、重要な食料である。現在、農林水産省の公表自給率 38%、しかし実際はたった 18%しかない（高橋 2023）。家族や地域市民の食料安全保障のために自給を高めるためには、麦・雑穀の復活が必要である。平地の水田稲作（夏）に加えて、麦作（冬）、また中山間地での雑穀作（夏）と麦作（冬）を復活すれば、食料自給率は倍以上に復活する。中山間地の地域振興も図れる。共有地、入会地を社会的共通資本として拡大すれば、耕作放棄地や所有者不明土地は減少する。都市民も自然に親しみ、小規模自給農耕を楽しめる。自家有機栽培の野菜は安全で美味しく料理ができる。素のままの美しい暮らし（sobibo）で、家族は幸せになる。

雑穀街道普及会は自給農耕ゼミを、神奈川県相模原市緑区佐野川と東京都小金井市で、植物と人々の博物館／日本村塾および環境学習市民連合大学と連携して開講している。この地域には現在でも在来品種を継承している篤農家がある。旧家の土蔵には穀槽があり、飢饉に備えてアワと陸稻の種子を保存してきた(図 1)。このアワはこの地域の在来品種で、私たちが農家から分譲を受けて保存していたのである。

2) 団体および個人の対応行動の事例

東日本大震災の際に、放射性物質からの遺伝的被害を避けるために、東京学芸大学に系統保存していた穀物など約 1 万系統の現地調査による収集種子（遺伝子資源）をイギリスの王立キュー植物園のミレニアム・シード・バンクに緊急避難で移管した（2011）。この際には、相当量の放射性物質が東京にも拡散し、計画停電に対する種子貯蔵庫の非常用電源も確保できなかった。震災で重ねて見捨てられても、生きている穀物種子を救うために、個人の判断で緊急にイギリスに送ることにした。これまでも、ましてや震災時にも、研究者を含めて誰も関心を持たずに、救援はなかった。この判断は日本人研究者としてまことに情けなく、絶望的な思いであったが、世界中から収集して預かっていた生きた種子は無事に移管することはできた（図 2）。多くの栽培植物とその近縁種を生きたまま委託することができたことを僥倖と考えるしかない。



図 1. 飢饉に備えた穀物の貯蔵とアワ（秋山在来品種）の復活



図 2. 東京学芸大学腊葉標本庫、種子貯蔵庫およびイギリスの王立キュー植物園ミレニアム・シード・バンク。

東京学芸大学を 2014 年に定年退職するにあたって、整理が済んでいた腊葉標本、東京腊葉会および武井コレクションは環境教育研究センターに残した。海外から収集した腊葉標本および実験の証拠標本は整理不十分であったので、山梨県小菅村の植物と人々の博物館に移した (図 3)。最後まで実験に使用していた保存種子約 700 系統はトランジション・タウン藤野のお百姓クラブに移管し、ローカル・シード・バンクとした。これを契機として、小菅村中央公民館や藤野倶楽部での展示解説、雑穀栽培講習会を進めることになった。



図 3. 植物と人々の博物館と収蔵資料

自然文化誌研究会／植物人々の博物館は第 34 回環境学習セミナーで雑穀街道を提案して、その普及活動を積極的に始めた (2014)。雑穀街道提案から同会閉会処理 (2024) までの経緯と各団体への交渉進捗状況は付録 2 および付録 3 に示した。

植物人々の博物館は雑穀栽培講習会などを実施していたミレット・コンプレックス (2003) を改称して創立して (2006)、小菅村と東京学芸大学の社会連携協定 (2007) により、小菅村中央公民館に置いていた (~2017)。小菅村の民具の整理や展示の委託を教育委員会から委託されて実施、多くのプロジェクトを文部科学省や民間財団の助成を受けて展開していた。しかしながら村長が変わり、中央公民館の耐震工事のためとの理由で、移転を求められ、細川邸の倉庫に移転した (2017)。その後、公民館に再帰することはなく、細川邸母屋は古民家旅館 Nipponia になった。これを企画・運営している会社の代表取締役からの依頼で、道の駅で展示、すでに世界農業遺産に登録されている宮崎県椎葉村において焼き畑と雑穀栽培に関して 2 回講演した。この際に同行した日本への LOHAS 紹介者からも勧められて、農林水産省での日本農業遺産認証・講演会にも参加した (2017)。

事例 1. 行政関連機関の対応

①農林水産省農村振興局農村環境課農村環境対策室 (生物多様性保全班) を 2016 年 12 月に訪問して FAO 世界農業遺産登録申請について助言を求め、その指示に従い、2017 年 1 月には申請窓口である関東農政局農村振興部農村環境課 (環境保全官) に相談した。

②山梨県知事に手紙でお願いしたところ、すぐに対応されて、山梨県農政部農政企画監を窓口にするように取り計らってくださった。

③その後、小菅村村長および上野原市長に登録申請について提案した。小菅村では源流振興課長を関東農政局に出張させたが、当時の上野原市長からは何の反応もなかった。また、山梨県東部栄養士研修会で話す機会を得た (2016)。

上野原市農業委員会会長ほか委員および山梨県富士東部農務事務所農業農村支援課には趣旨説明をしたが、県職員の関心を引くことはできなかった。総務部企画課担当者にも紹介されたが、関心を得ることができなかった (2019)。上野原市長が変わり、厚意ある仲介者 A の協力により市長に面会し、雑穀街道の趣旨説明をして (2021)、交渉窓口を建設産業部産業振興課、農村地域づくり担当リーダーとすることにした。この職員も雑穀街道には関心がなく、進展がなかった。そこで、担当者が代わったところで、再度、産業振興課と市民部生活環境課に趣旨説明に行ったが、進展はなかった (2022)。

雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録申請することにつき行政および住民向けの説明会開催のため、上野原市長に面会協議し、上野原市で開催する旨の了承を得た。これにより、2市2村の行政担当者の参加を求めて説明会を開催した (2023)。首長の参加はなかったが、行政担当者、農業者、住民他約 83 名が参加し、盛会であった。しかし、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録申請することに関して、積極的な合意を得る可能性は著しく低いと判断せざるを得なかった。すなわち、雑穀街道普及会の目的は果たされることなく、会員や賛同者の合意を得て、提案責任は果たしたとして解散することになった。この説明会での議論等から各団体の具体的な対応を分析し、要旨は次に記す。

④小菅村では、現村長 (2012~) に代わり、前・元村長とは異なり、地域振興施策は文化的よりも経済的に大きく重点が移った。私も大学を定年退職したので、大学との連携協定による活動が弱くなり、雑穀街道普及の提案に対する関心も高まらなかった。その状況が中央公民館からの退去ということにつながったのだろう。細川邸倉庫に植物と人々の博物館は移転し、教育長との打ち合わせではこの古民家が旅館として改修後に、民具の展示もできるとの理解であった。

⑤雑穀街道普及会の賛同者の募集を開始した。賛同者の交流を図るために雑穀街道を縦走して、丹波山村から藤野まで主な雑穀栽培者を訪問した (2017)。この際に、丹波山村役場、西原びりゅう館なども立ち寄った。丹波山村役場ではなかなか関心をもってもらえなかったが、村長が代わり、説明を聞いていただく機会ができた (2018)。村長とは時間を取って、親身に 2 回話し合い、提案をよく理解いただけたが、しばらくして他界されてしまい、また、村長が代わり、関心は全く示されなくなった。

⑥神奈川県知事には 3 度、手紙を差し上げて、賛同をお願いしたが全く何の対応もなかった。上野原市長、相模原市長、小菅村村長、丹波山村長にも重ねて賛同依頼状を送った (2018)。

⑦相模原市および緑区に関しては、藤野まちづくりセンター長に趣旨説明 (2018)、緑区長に趣旨説明 (2019)、この結果、緑区長が 2020 年度から FAO 世界農業遺産への申請準備活動を支援することを内定して、図 4 の企画案の提示を受けた。緑区長は自ら小菅村まで視察して下さった。

前相模原市長からは応答はなかったが、現市長は緑区の山間地にも重ねて視察においでになるようになった。有力な仲介者があり、市長秘書と何度か打ち合わせの後、1 年ほどして面会が叶い、国際雑穀年の意義を踏まえて、雑穀街道を世界農業遺産に登録申請する

重要性についての趣旨説明を聞いていただいた (2023)。とても好意的な関心を得たと認識した。具体的には緑区長を窓口にするようにとのことで、改めて緑区長にも説明の機会をいただいた。

⑧藤野地区の特異性

トランジション・タウン藤野：お百姓クラブにキビなど約 700 系統を移管し、藤野倶楽部の無形の家ローカル・シード・バンクを置いた。同時に、自然文化誌研究会／植物と人々の博物館／森とむらの図書室の藤野分室として主に原沢文庫を置いた (2014)。エコミュージアム日本はトランジション小菅として、イギリスのトランジション・ネットワークに登録した。さらに、ミレット藤野は自給農耕ゼミ全 6 回を藤野倶楽部の畑 (藤野駅の近く) を借りて開催した。このミレット藤野は、小菅村に活動拠点を置く自然文化誌研究会／植物と人々の博物館の私と宮本茶園、手工芸家 B およびトランジション・タウン藤野のお百姓クラブの主宰者 C が主な運営者であった。B は小菅村で初めての女性村会議員であったが、任期途中で辞職して、藤野に U ターンして手工芸家となった。彼女の助力で、藤野倶楽部に森とむらの図書室分室、ローカル・シード・バンクを置くことができた、藤野駅前の畑を借りられた。さらに、上述の相模原市緑区長が雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録申請することに賛同して、担当者を置いて申請企画書を作成したのは、地元地主旧家の出身である B の影響力のおかげであった。

ところが、ミレット藤野は共同農作業が十分に機能せず、その要因はお百姓クラブの C が畑の管理などにあまり参与しないか、少ないからだということであった。B は独断でミレット藤野を解散することに決めてしまい、ミレット藤野の名称も使用を認めないとした (2017)。しばらくして、お百姓クラブの C は過労であったのか、まだ若いのに病気で他界されてしまった。

シンポジウム「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」を藤野の篠原の里や藤野倶楽部結びの家で開催した。パーマカルチャー・センター・ジャパンおよびトランジション・ジャパンの代表者に講演をしてもらい、一方で、同フェスティバルで講演も行った (2017)。さらに、パーマカルチャー・センター・ジャパンでは、アドバンスト・コースで講義をさせてもらい (2019)、上野原市西原の篤農中川兄弟と繋ぐことができた。彼らの父は中川勇である。

その後、突然、B は雑穀街道普及にも賛同しなくなり、雑穀街道普及会発起人・賛同者から退会することを求めた。その理由は、私が B の許可なく、別の会のセミナーの話題提供を藤野の有機農家 D に依頼したこと、および依頼先 D から話題提供を断られた際に、私が B に有機農家とは多くお付き合いしてきたが、頑固な方が多いと言ったことだという。これは一般論として言ったことで、むしろ誉め言葉である。私は B には事前に相談したし、特段、個別の有機農家 D の悪口を言ったわけではない。このような個人攻撃はしないし、唐突に友人関係を破壊されるいわれもない。小菅村居住以来、B を友人として信頼して、多くの協力をしてきた。しかし、突然、明確な理由もなく、手のひら返し、あるいは梯子を外す行為がなされ、ひどく戸惑った。

個人が任意団体から退会することは自由であるが、この際に、B はミレット藤野のメンバーの意見も聞かずに、藤野まちづくりセンターに即時、独断で申請企画の中止決定を告げた。またさらに、B は雑穀街道賛同者から当人初め、藤野倶楽部社長、地元スーパー・松葉社長、シュタイナー学園理事長、市議会議員 D 他、賛同者 6 名と 1 団体の退会、削除も求めた。ちなみに、D の夫の教授は先に市長選挙で対立候補であった。このために、同時に森とむらの図書室藤野分室とローカル・シード・バンクは藤野倶楽部からも撤去を求められた。こうして藤野での雑穀街道普及活動は頓挫することになってしまった。知性の高い方々がこうした共同絶交宣言、ムラ撥撫（いじめ、俗に言う村八分）に与し、かなり親しい友人も関わりを避けるために傍観するとは、真に信じ難かった。

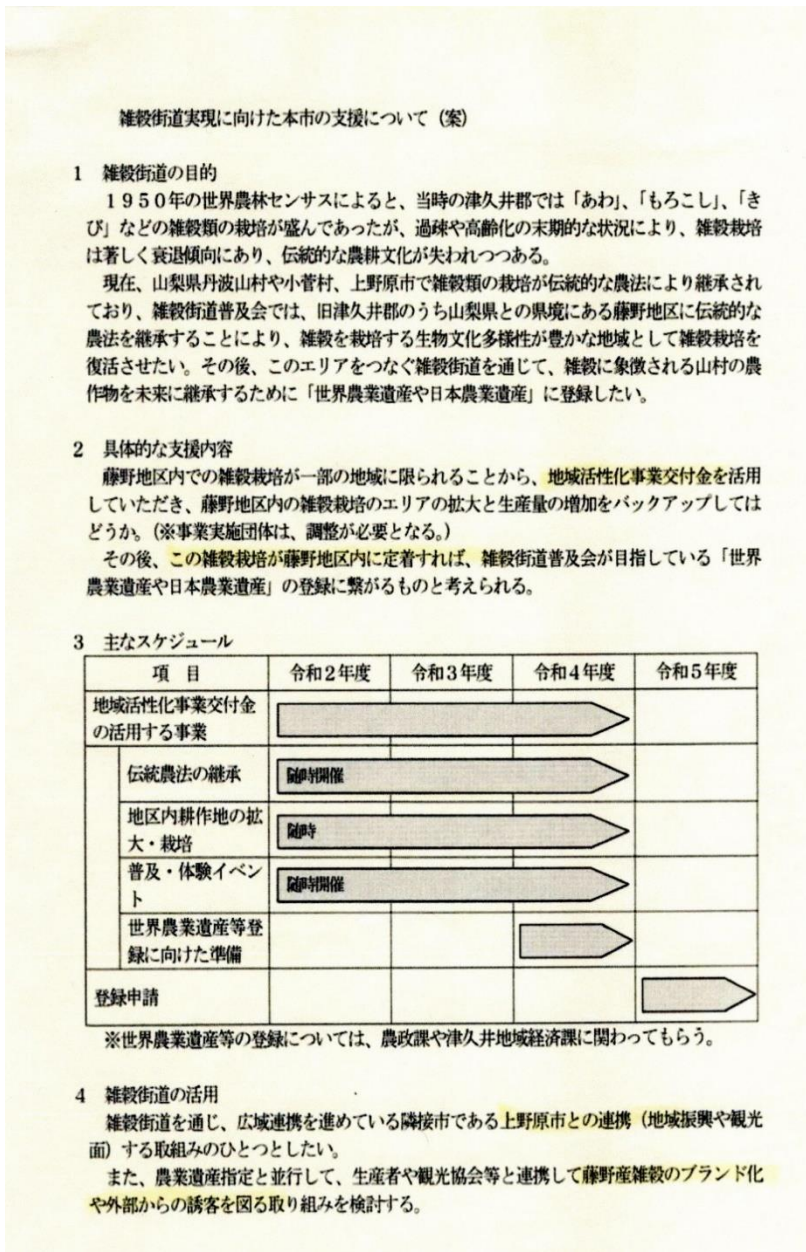


図 4. 相模原市緑区企画案

こうしたムラ撥撫行為は、裁判の判例を調べたところでは 50 万円ほどの罰金になっている。しかも、地域行政が内定していた企画を当事者との合意なく中断して、その助成は標題を変えて急遽作られた藤野あわひえきびの会に対して 3 年間の助成が実行された。助成金を求めているのではなく、行政からの賛同が重要であった。あまりに理不尽、不条理な、サイコパスのような行為なので、B のメールなどをテキスト分析など客観性をもった手法で細かく事例分析をした。この詳細は、別稿で詳細に検討したので、ここでは多くを触れないことにする (木俣 2021)。雑穀街道普及会の協力者 A 他にはその後も継続した圧力が B と D から続いてきた。これは典型的ないじめの構造であり、犯罪的なムラ撥撫である。いじめをする人に共通する 7 つの特徴は、強い嫉妬心、注目願望、自己愛、臆病、味方を分け敵への攻撃、不平不満、過去の被害者だという (内藤 2009、スタウト 2005、スタマテアス 2008、シュフーズ shufuse.com; <https://shufuse.com/154141>)。

めぐミレットの主宰者は東京農業大学院生で、雑穀街道普及会の幹事である。彼はお百姓くらの藤野のローカル・シード・バンクを引き取って、保存することになった。この中に、私が実験に用いていたキビの中に山梨県早川町奈良田で分譲を受けた系統があり、主宰者は増殖依頼を相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモンとともに委託されて、増殖した。現在は、沖縄の東京農業大学試験場に所属している。ちーむゴエモンにも圧力があつたようだが、トランジション・タウン藤野と同様に、これには同調しなかった。彼らは雑穀街道普及会の幹事らと旧知であつたからでもある。今でも自給農耕ゼミ (佐野川) とも協力関係にある。

藤野という地域は、海外から輸入したシュタイナー教育、パーマカルチャー、トランジションなどの活動が多く移住者 (住民の 6 割ほど) により行われており、いわゆる先進的な地域と思われている。しかしながら、大塚久雄など第 2 次世界大戦中の疎開した人々が描いてきたような、地域社会の悪しき遺風が潜在的には変わらない人間関係としてまだ残っているのだろう (木俣 2020)。人生で親しい人々からの裏切り行為は何回かあつたが、地域のムラ集団から私個人が攻撃、排除された事象は過去にはなかつた。私はしばらく鬱状態に追い込まれた。鬱病に至らず、自殺にまで追い込むことはなかつたが、今でも PTSD は時折生じる。人間の心というものの不可思議な浮動は度し難い。

事例 2. 公共活動団体の対応

⑨桂川相模川流域協議会の代表幹事 2 名 (市民部会、山梨および神奈川代表) には、映像作家 E (ワノサト・エコビレッジ主宰者) の紹介で、重ねて直接面会して雑穀街道普及会の趣旨を説明し、さらに市民部会でも説明して、賛同団体になることについての了承を得た。しかしながら、幹事会全体の承認が必要ということで、自然文化誌研究会は団体会員になり幹事会にオブザーバー参加して趣旨説明をさせてもらった (2022)。しかしながら、山梨県行政部会幹事 (自然共生推進課) の強い反対にあい、この協議会は協賛団体にはならなかつた。団体会員である自然文化誌研究会に対して明確な幹事会議事要録は提示されず、説明責任は取ってもらえなかつた。

ZOOM 参加の趣旨説明の際に、行政部会幹事らのよく聞き取れなかつた反対理由は、(1) FAO 世界農業遺産は農政の問題であり、自然共生とは関係がない、(2) 自然文化誌研究会の

この地域における 50 年の環境保全活動実績は評価されず、無名の団体を名義使用だけでも後援はできない、などであった。ちなみに、彼らには、私が林野庁や神奈川県環境・農林業・教育に関する調査研究事業の学識委員を多数引き受け、政策策定に関与してきたことも伝えた。本来ならこの団体が FAO 世界農業遺産登録申請の協議会になるのが適切であると、当初は考えたが、行政部会幹事からは全く関心を得られなかった。

⑩相模原市農業委員会には旧友が学識委員として加わっており、趣旨説明冊子は配布してもらった。上野原市農業委員会には 3 度趣旨説明の機会を得て、キヌアを加えるなら協力するということであった。北都留森林組合にも旧知の参事がいて、賛同団体になってもらった。津久井農協には宮本茶園から、重ねて趣旨説明の機会をもらえるように頼んだが、実現しなかった。

事例 3. 地域農家や市民などの対応

NPO さいはら、ワノサト・プロジェクトおよび自然文化誌研究会で雑穀街道普及や西原小学校の企画案などを協議した (2022)。上野原市の雑穀の取り組みについては、雑穀街道普及説明会での上野原雑穀プロジェクトの現況報告がある (小俣・長田 2023)。個別の活動はまとまりにはなっていないが、雑穀の種子が途切れることへの危機意識も生じ、地元農家や移住者によるいくつかの個別取り組みを紹介している。雑穀街道普及会に賛同して雑穀栽培を始めた農天気、有機農家と地域おこし協力隊員によるキヌアブランド化推進生産者 (2015~)、お山の雑穀応援団、雑穀栽培農家中川兄弟、びりゅう館/NPO さいはら、合同会社古民家の雑穀関連活動を要約して、今後の栽培拡大の仕組みについて提案している。

ここに示された個別活動の各主体者の雑穀街道普及への対応について記す。

⑪農天気 F は上野原市長との協議に、地域おこし協力隊員 G の紹介で飛び入り参加した。市長との面談に飛び入り参加はあり得ないが、雑穀街道普及会の責任者として受け入れたのは地元の有機農家で雑穀栽培に関心があると言ったからで、社会的に公正でありたかったからでもある。彼は初対面でありながら上野原市役所との協議を取り仕切らせるようにも要求した。これまでの活動状況を知らない人が求めることではないが、熱意により雑穀街道普及会の幹事会員になってもらった (2023)。雑穀街道普及会の行政市民向け説明会では上野原市の雑穀栽培者の事例をまとめて報告をしてもらった。

⑫地域おこし協力隊員 G はキヌアブランド化推進 (2015~) を行ってきた。生産者は 8 名で総生産量 321kg (2022) である。彼女は商品開発も行っている。雑穀街道普及会には会員のみで、幹事は途中で辞退した。

⑬お山の雑穀応援団はやまはた農園を中心に西原の雑穀を次世代に繋ごうとするプロジェクトである。事務局は NPO さいはら/びりゅう館に置いている。年間を通じて、雑穀を育てる技と知恵の学び、体験の場として年間プログラムを実施している。

中川兄弟は彼らの尊父が降矢静の畏友であったことから、私は古くからの付き合いであり、多くの研究者やパーマカルチャー・センター、トランジション・タウンの団体他にも紹介してきた。詳細は別に報告している。多種類の雑穀を栽培して、雑穀街道筋の道の駅などで販売している。中川兄弟を慕って移住した人たちに支えられ、雑穀の生物文化多様性が継承されてきた。彼らの農耕技術は DVD に記録されている。この DVD の作成は、作家

とボランティアが記録して制作した。彼らは雑穀街道普及会のような市民の社会活動には参加したくないとのことであった。

羽置の里びりゅう館は私の師である降矢静夫が名付けたそうだ。雑穀ほか地場産物の販売、食堂では雑穀メニューもある。文化的価値のある水車を利用した食文化を継承、体験学習を収益とする取り組みをしている。また、雑穀の生産物としての価値を高めるようにしている。中川兄弟への援農も行っている。植物と人々の博物館の／森とむらの図書室の旧財団法人「森とむらの会」の蔵書を貸し出しており、民具展示コーナーで閲覧できる(2023～)。

⑭合同会社古民家のつけHは3戸の古民家宿で、キヌア食堂、料理教室、菓子製造、などを行っている。農天気Fとは協力関係にあり、たかきびマイライン、雑穀ツーリズムを促進する計画である。上野原市役所での説明会における発表時には、よそ者が旧西原小学校の将来計画に関わることは迷惑であると述べていた。彼女も移住者であるが、定住して熱心に起業を進めてきた。

⑮トランジション・タウン藤野とパーマカルチャー・センター・ジャパンは藤野に本部を置いている。雑穀街道普及会には賛同団体になっているが、名義使用のみで、実質的な組織連携活動はほとんどない。

⑯ミレット・ロード(一般社団法人)は雑穀普及に関心があり、文化庁助成事業の申請のための共同を求められたが、申請が採択された場合、無職の私が千万円もの高額建て替えをすることになるようで、この助成申請の件も、講義をすることもお断りした。この団体は東京都日野市のあるNPO法人やまぼうしが20周年記念事業として、ソーシャル・ファームとして事業受託をするための団体と記述がある(やまぼうし通信 No. 122, 2021)。山梨県西原村との交流プログラム(2020)を皮切りに始めたと記述がある。

⑰ジャパズビーガンつぶつぶ(一般社団法人)は株式会社フウ未来生活研究所と共同で、雑穀料理を普及している。同会主宰者の大谷ゆみこの雑穀料理の普及活動は40年ほどに及び、彼女は古くからの知人である。過去に2回講義を依頼されたことがあり、その熱意には敬意をもってきた。ただし彼女のスピリチュアリティについては科学研究の立場からは距離を置くことにしてきた。国際雑穀年2023に関して、ワノサト・エコビレッジ・プロジェクト主催者Eの強い仲介により、2023年限りとして旧交を温めることにし、講義と情報誌『つぶつぶ』へのエッセイ4回分を引き受けた。この件については、私は率直に話して、大谷の合意了解を受けている。

⑱日本雑穀協会は、名義使用のみの後援団体であり、国際雑穀年においても、特段の連携はなかった。

事例 4. 教育・研究機関の対応

FAO ローマ本部の国際雑穀年ウェブセミナー第2回(2023)に招待されて、10分程度の日本の雑穀の歴史紹介を行った。国際雑穀年はインド政府外務省がFAOに提案して実現した。インドでは雑穀年2018をすでに実施祝賀していた。モディ首相が先頭に立って、各地で祝賀行事があると、共同研究者のシタラム博士から年賀メールを受け取った。実際に、インドで開催されたG20共同宣言i。「我々は、雑穀、キヌア、ソルガム、並びに米、小麦

及びトウモロコシを含むその他の伝統的作物といった気候変動に対して強靱かつ栄養のある穀物に関する研究協力を強化する取組を奨励する。」としている (2023)。このような経緯があるので、南アジア学会の若手研究者向けのセミナーで話題提供したいと申し出たが、高齢者の話は不要であると断られた。東京学芸大学のキャンパス内に、辻調理師学校東京校が 2024 年 4 月に開校予定で、彩色園 (農園) を使って共同プロジェクトを行っているとのことで、国際雑穀年なので調理師をめざす生徒に話をさせてほしいとお願いしたら、11 月に予定しようとのことで、担当者とも面談し、Eil-Net の食文化プログラムも提供したが、そのまま立ち消えになった。

雑穀研究会は年頭に日本大学で国際雑穀年記念シンポジウムを急遽開催した。総合討論で予定されていたパネラーが負傷されたということで、私に代替依頼があったので、「はてしない雑穀の物語」として、雑穀街道普及について紹介した。家族農業プラットフォーム・ジャパン学習会、OK シード学習会などでも講義をした。これらの動画は you tube に記録されており、2000 人以上の視聴再生がある。

事例 5. メディア・アドバイザーの対応

映像作家 E、プロデューサー I および木工会社創業者 J を雑穀街道普及会のメディア・アドバイザーの迎えたのは、友人たちの危惧を抑えてまで、国際雑穀年 2023 が日本における雑穀普及の千載一遇の最後の機会と考えたからである。これまでなら共同活動をするののないテレビ、ラジオ、新聞、雑誌などのマスメディアの関係者とは人生を通じて、自由意思によっては、共同活動は意図的に極力忌避してきた。国際雑穀年はごく例外として、一年間限定のお付き合いをすることにした。

ワノサト・エコビレッジの主宰者は映像作家 E で、この間、活動の多くを映像記録している。トランジション小金井の代表でもあり、トランジション・ジャパンの副代表でもある。この映像作家 E とはトランジション小金井の関係で知り合い、小金井環境市民会議などと共同運営してきた環境学習連合大学の環境学習会、自給農耕ゼミ (佐野川) などの映像記録を取ってもらってきた。E はつぶつぶグランマである大谷の雑穀料理をいたく気に入り、この団体とのシンポジウムなども、すべて動画映像 you tube にして公開してきた。いずれドキュメンタリー映画にするように、映像を記録しているという。E を信頼して、その熱心な仲介により、桂川・相模川流域協議会の代表幹事、ワノサト・エコビレッジのメンバー、プロデューサー I、木工会社創業者 J やレストラン経営者ほかへの紹介をうけた。旧知でありながら疎遠にしていたフウ未来生活研究所創業者の大谷との 1 年間の協力を受け入れたのも E の強い仲介による。

プロデューサー I は環境活動で有名人だそうで、アースデイ日本他を企画運営してきた。この機会に雑穀栽培も関係者たちと試し、また、ドキュメンタリー映画監督を紹介されたが、私は映像に映ることはお断りした。さすがに、世辞もとてもうまく、企画の構想整理も素早い点で、優れた手腕がある。しかし、私たちが何十年も実践してきた活動成果を、引用もなしに企画書に埋め込んで、彼作成の原図としてスライドに記された。こうした手法は昨今、漫画の原作者を自殺にまで追い込んだ手法と変わらず、マスメディアでは何の悪意や罪悪感もなく常態のほぼ盗作的改変である。その後、I は何にも参加しなくなった。

木工会社創業者 J も有名人で、林野庁長官に FAO 世界農業遺産に登録申請することに協力をお願いする。ついては、国の機関対応は自分一人にまかせて、雑穀街道普及会責任者の直接説明は不要であると言った。しかしながら、雑穀街道普及会 10 年の活動経過は全く知らずに、この活動は始まったばかりで、3 年後の申請になるのだと長官に言って、助言を受けたそうだ。彼も、家族の反対を押し切ったので、人生最後の仕事であるとまで言いながら、その後は何の活動にも加わらなかった。J については古くから知っている。

プロデューサー I も創業社長 J も、こんな有名人を知っていて、彼らの賛同を得るとか、何千万円の助成を得るとか、そうした大言を重ねてしたが、当人たちを含めて一円の寄付もそうした助成もなかった。彼らには国際雑穀年 2023 年に焦点がなく、2027 年の国際園芸博覧会に繋ぐ意図があり、生物文化多様性がその課題となる際に、活動実績とする意図があったのだろう。

こうしたメディア・アドバイザーの助言を受けて、東京学芸大学で雑穀街道普及会のシンポジウムを企画することにした。次に記すキビ発泡酒復刻を、国際雑穀年 2023 と東京学芸大学創基 150 周年記念を重ねて祝賀しようと考えたからである。

彼ら 3 名のメディア・アドバイザーは、東京学芸大学での記念シンポジウムの企画において、有名人の講演者候補を多数挙げたが、大方知人ではなかったようだ。東京学芸大学を会場として、その創基 150 周年記念祝賀を目的にするのなら、現職教授たちに司会や挨拶などとともに、講演者になってもらわなければならない。しかしながら、こうした事情を配慮せずに、有名人を挙げては、すぐに取り消し、企画・調整してプログラムを構成することが困難になった。東京学芸大学の現職教授たちの協力も得られなくなった。11 月に予定して準備していたが、とても開催責任をとれないと、公に案内する前に、このシンポジウムの計画は事務責任者の私の独断ということで、中止することにした。

同様に、メディア・アドバイザーたちは上野原市における説明会のプログラム設定や運営においても、挨拶や司会、講演プログラムに関してまでも、当日に至るまで内容変更を要求した。午後 2 時の会合であるのに、昼食 (30 食分) が事前了解もなく、つぶつぶマザーにまで注文されており、その費用は私が支払うことになった。事前に、たび重ねて打ち合わせしていた関係者らは戸惑うしかなかった。そのうえ、プロデューサー I も創業社長 J もこの重要な説明会に出席しなかった。こうした経過であるが、私は主催者としての社会的責任を取るために、上野原市における説明会は中断せずに、実行した。

事例 6. キビ発泡酒ソビボ・ピーボの物語 (正編と続編)

①東京学芸大学創立 60 周年＝創基 136 年記念事業 (実施報告 2010) は、事業名称東京学芸大学創立 60 周年記念雑穀発泡酒開発プロジェクトとして、事業主催者・共催者；植物と人々の博物館プロジェクト、学内事業担当者；木俣美樹男、日程 2009 年 5 月～11 月、助成金 0 円、執行額約 100 万円で実施した。

東京学芸大学と山梨県小菅村は社会連携協定を結び、植物と人々の博物館づくりを展開している。小菅村から借りている雑穀栽培見本園で有機・無農薬栽培したアワとキビの在来品種の種子 (30%) および多摩川源流水 (100%) を用いた雑穀発泡酒を、埼玉県小川町のマイクロブルワリー麦雑穀工房 (馬場勇) と共同開発した。ラベルは美術科生本間由香

がアワ・キビの中部アジア起源説（事業主催者の研究に基づく学説）をモチーフにデザインした。教授会でチラシを配布して寄附を募った。330ml ビンを総計 1500 本製造し、学内外の寄附者や関係者に配布、また、小菅村小菅の湯物産館、国分寺オタカフェ、イノベーション・ジャパン大学見本市／食の祭典、日本エコミュージアム研究会全国大会などで試飲してもらった。学内では創立記念パーティー、春の野草を味わう会などで試飲した。

事業参加延べ人数（概数）は、学内寄附者 44 名、卒業生など学外寄附者 10 名、試飲者は 1000 名ほどであった。材料が良いので、味についてはとても好評であったから、事業主催者としては楽しかった。読売新聞、埼玉新聞、アサヒタウンズ、文教速報など新聞 8 紙、ラジオ FM 立川等でも好意的に取り上げられた。相応の問い合わせもあり、小菅村の新商品の可能性を示すことができた。しかしながら、学内での盛り上がりには欠け、60 周年記念を楽しく祝う役には立たなかったと、残念に思っている。

私は穀物とその調理の起源と伝播の研究のために、40 年ほどユーラシアの各地を旅してきた。男ばかりの国際学術調査隊の楽しみは郷土料理とともに味わう美味しい酒であった。阪本寧男隊長はビール好きで調査旅行の夕食ではよくご相伴させていただいた。彼は自分で収集してきた小麦を素材に提供し、発泡酒ホワイト・ナイルとブルー・ナイルが京都大学と早稲田大学および黄桜酒蔵によって共同開発していたので、私たち弟子にもたいそう自慢していた。

日本の環境教育活動が草創の時に、援助いただいた行政学老師、故高木文雄（財）森とむらの会初代会長もビールが大好きで、令夫人に禁止されているが、私らに奢ってやるのだという名目で、そこそこに楽しんでおられた。最後の山村農人、故降矢静夫老師は兵隊で硫黄島に行った以外は鶴蔭の山里で「清く、貧しく（＝簡素）、美しい」暮らし、晴耕雨読、農耕と詩作を実践されていた。僕らがソビボ Sobibo 素のままの美しい暮らしを提案するのは彼の暮らしぶりが日本の持続可能な伝統社会を示唆しているからだ。

昨年（2009）、埼玉県小川町で雑穀発泡酒を造っている麦雑穀工房マイクロブルワリーの馬場勇に会った。大学教員（情報科学）を辞めて、後半生を好きなビールを醸すことに過ごしている人物である。私は雑穀研究会の第 2 代会長であったので、研究会の懇親会でも馬場の造る発泡酒を会員の皆様に美味しく飲んでいただいた。

東京学芸大学と多摩川上流の山梨県小菅村との社会連携協定に基づき、小菅村でエコミュージアム日本村／植物と人々の博物館づくりを進めている。このため、小菅産雑穀と多摩川源流水を使って、馬場と発泡酒を共同開発し、東京学芸大学創立 60 周年記念行事などで楽しんでいただきたいと思いついたのだった。

製品名：東京学芸大学創立 60 周年記念・雑穀発泡酒「Sobibo ピーボ」、雑穀を使用するため発泡酒となり、ビールと呼称することはできない。デザイナー本間由佳提案の Sobibo ソビボとは「素のままの美しい暮らし」のことで、ピーボはキビの起源地中央アジアのアルコール飲料のウズベク語の呼称である（図 5）。

②雑穀発泡酒ソビボ・ピーボ 復刻企画 東京学芸大学公認事業

国際雑穀年を記念し、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録する活動を普及促進するために、雑穀発泡酒ソビボ・ピーボ（素美暮発泡酒）を、国際雑穀年・東京学芸大学創基 150

周年記念として復刻醸造した。東京学芸大学の南道子教授から仲介の依頼を受けて始めた公認の事業である。

宮本茶園の宮本透の指導による自給農耕ゼミ（佐野川）で、参加者と共に栽培したキビを使用して、相模原市緑区佐野川のクラフトビール醸造所ジャズ・ブルーイング（山口解代表）で製造した。ラベルのデザインは前回と同様に本間由佳（明星大学准教授）による。第 1 回目は 9 月 20 日に発送、第 2 回目は 12 月日に発送しました。事業参加延べ人数（概数）は、学内寄付者数名にすぎず、自給農耕ゼミ（佐野川、小金井）参加者、自然文化誌研究会、雑穀研究会など学外寄付者 75 名ほどであった。製造本数は 1 ロット 300 本で、2 回合計 600 本であった。

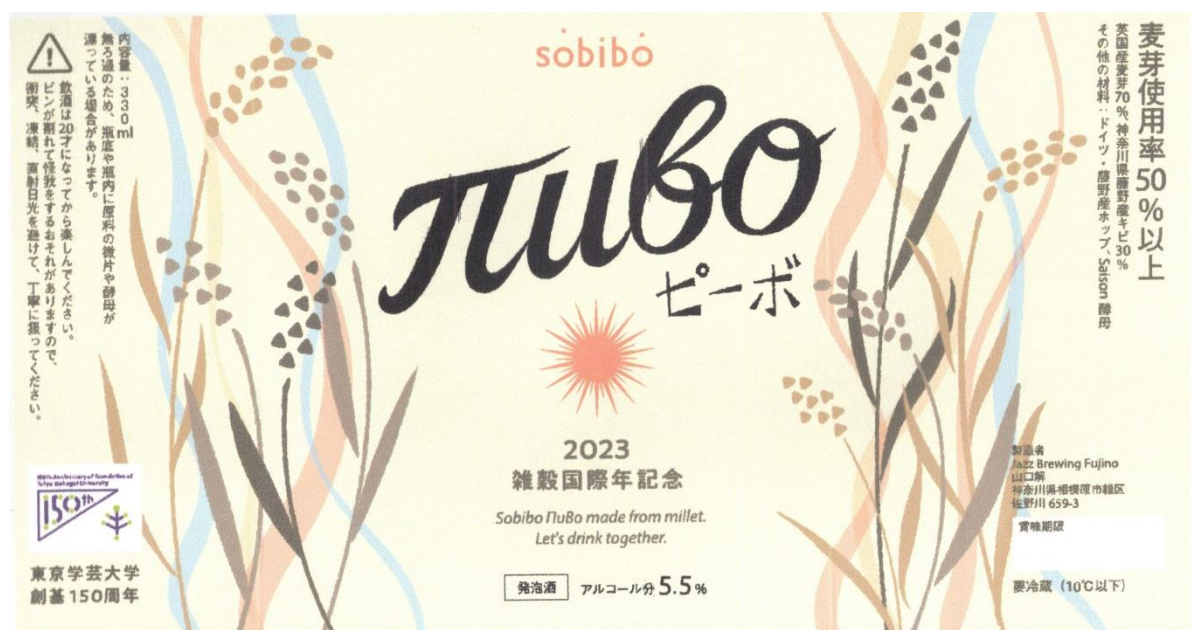


図 5. 発泡酒ソビボピーボの復刻ラベル

③結果

東京学芸大学の創立を祝賀するための公認事業であり、研究成果を活用するプロジェクトでもあったのだが、ホームページに掲載された程度で、学内の参加協力者はほとんどおらず、卒業生らの任意な祝賀の意義は大学の当事者にはほとんど認知されなかった。経費は寄付などが多くて大きな赤字にはならなかったが、不足分は自然文化誌研究会／植物と人々の博物館や事務担当によって補填した。本来、提案した K 教授から生産者や醸造者への仲介を依頼されたにすぎなかったはずであるが、その社会的な責任により、大方の事業は自給農耕ゼミ（佐野川）の主催者がその参加者の協力により実行した。東京学芸大学の提案者 K らには事前に過去の活動データを DVD で渡し、数名の関係者に直接解説もしたが、プロジェクト実行の大変さを理解されておらず、退職者にすべてお任せという無責任な経過であった。雑穀栽培、申し込み受付、会計処理、発送まで、相当の労力を要した。発泡酒の材料を栽培し、加工、調整して、さらに醸造して申込者に発送するまでには

何カ月も要した。この間、支払いをしたのに届かないという苦情があり、メールマガジンをお送りして経過報告をし、すべて終了後には会計決算報告を発送した。こうした公正な作業に対しても、東京学芸大学関係者は迷惑であったようだ。大学創基祝賀のために行ったにもかかわらず、感謝に混じって苦情もあった。

4. 観察事例に基づく考察

私は誠心誠意、人生をかけて公正に行ってきた調査研究や環境保全や学習に関する地域への任意活動を何度もひどく阻害された(木俣 2011 ほか)。もう余生が残り少ないので、これを限りに世相の事実を記録して、その作為・非作為・不作為による罪状を告発しておく。私たちが雑穀街道地域において 50 年続けてきた市民活動や調査研究を貶めて、阻害した罪は残念ながらいずれ贖われるべきだろう。個人も、ましてや行政公務員や政治家は言ったこと、行ったことへの責任は取るべきである。本論の目的である 3 つの謎の解明に関して、上記の観察事例の事実を根拠に考察する。

1) 行政関連機関の対応 (事例 1)

農林水産省や山梨県知事の当初対応は好意的であった。しかし、神奈川県知事からは三度の手紙に何も対応がなく、環境保全・学習や生物文化多様性、ましてや雑穀などには、マスメディア出身の知事の関心を引かなかったのであろう。小菅村に自然文化誌研究会は 20 年以上にわたって活動拠点を置いているので、本来は、小菅村から雑穀街道普及の提案をしてほしかったので、たび重ねて村長に提案をした。源流振興課長を関東農政局に出張させ、説明を聞いていただいたが、その先には進まなかった。丹波山村も元村長や現村長は全く関心がない。前村長は親しく提案を聞いてくださり、賛同してくださったが、しばらくして他界されてしまった。

上野原市は私たちの調査研究の出発地であったから、何度も前市長に手紙を書いたがまったく反応はなかった。同じ医者出身として古守医師の長寿村における健康医学の所説には好意をもたなかったのかと推察している。行政職員や農業委員会にも何度か説明したが、十分な関心を得ることができなかった。現市長は仲介者があったので、直接面会もできて、趣旨には賛同くださり、説明会の会場も用意してくださった。しかし、丹波山村も小菅村も役場に人手がないから、上野原市が対応するなら賛同する、さらにまた上野原市は相模原市が担当するなら賛同するという態度であった。

相模原市も同様で、前市長からは反応がなく、現市長には仲介者の援助で、市長秘書に説明したのち、1 年ほど経過してから、やっと面会が叶い、趣旨には賛同を得たので、緑区長にも具体的に説明の機会をいただいた。前緑区長も好意的で、FAO 世界農業遺産申請のための企画案まで作成し(図 3)、担当窓口も決めてくださった。ところが、藤野地区の特異な事情が上記を妨げることになった。

行政の首長は選挙で変わり、行政の職員は 2~3 年で配置替えとなり、いくら提案しても引き継ぎがなく、普及活動の実績は蓄積されなかった。何度も、初めから説明を繰り返さなければならなかった。このように、行政は雑穀街道に積極的な賛同を示さなかったので、

国際雑穀年 2023 を千載一遇の機会と考えて、とりあえず雑穀街道普及会を申請団体とすることに方向転換をし、普及活動を進めることにした。

2) 公共活動団体の対応 (事例 2)

桂川・相模川流域協議会は、山梨県と神奈川県の流れ市町村および国土交通省 (行政部会)、企業 (部会) や市民団体・個人 (市民部会) によって構成されている。雑穀街道のような県を超えた活動には、すなわち、FAO 世界農業遺産登録申請の最適な団体である。市民部会には何度も提案を説明して賛同を得た。それにもかかわらず、代表幹事から雑穀街道普及会への協賛、後援を申し込んだところ、行政部会の強硬な反対で、後援名義使用さえも拒否され、その理由も明確に説明されなかった。無名の団体に後援名義は出せないということであろう。私は過去に多くの環境教育活動において、中央省庁他の後援名義を得てきた。会員団体に説明責任を果たさないということは、公的な団体としてあってはならないことだ。県庁の職員は環境保全や生態系など環境の基礎概念すらよく理解できていない。市民の任意活動を阻害するのは協議会の会則趣旨に反している。

事例 1 から見ても、地方行政はひどい縦割り業務で、分掌事項しか見ない。2~3 年で転勤してしまうので、申し送りがなく、活動が継承蓄積されない。自然や環境は複合的な課題であるが、真に不十分な知識理解しかないようだ。中央政府の政策内容に関しても理解が弱い。地方行政職員は公務執行の権力責任を自覚していない。

山梨県の県民性を検索すると、金に細かく、負けず嫌いで、権威にはめっぽう弱いとか、閉鎖的・排他的であるとか書かれている。勤勉で行動力旺盛、独立心も強いが、一方で金に細かく、保守的で見栄っ張りである。付き合い方は要注意であるが、相性が合えば強い信頼関係ができるとも記されている。甲府商人が全国で成功を収めた背景には、山が多く平坦地が少ないために農作物が取れにくく、農耕地も限られ、長男以外は地域を出なければならなかった。このために、商いに精を出した姿がメチャカモンと呼ばれ、他県人から疎まれたという。江戸幕府の直轄領であったが、首都江戸を防御する辺境の地として閉鎖的・排他的、また、華やかな江戸への嫉妬心が見栄っ張りになったのかと考えるに至った。

3) 地域農家や市民の対応 (事例 3)

個別農家 E、地域おこし協力隊員 F、お山の雑穀応援団、および合同会社古民家のつけ G の地元市民は雑穀を大切に保存、継承しようとしているが、友好的な連携が取れずに、個別の私利私欲が勝っている。トランジション・ジャパンやパーマカルチャー・センター・ジャパンは雑穀街道普及会の賛同団体ではあるが、藤野に本部があるので、地元有力者たちに付度が働き、実際には普及活動には参加していない。

藤野の特異性をトランジション・タウンの活動から見直してみる。藤野地域の有力者の圧力はその後も続き、雑穀街道普及会は潰すとか、まだ潰れないのか、あるいは賛同者・協力者、その交友関係者にも頻りに電話して圧力を加えたと聞き及んでいる。藤野における私たちの雑穀栽培講習会も、当初は彼ら地元の有力者の全面的な好意ある協力を得ていたが、その仲介者の突然不明の変心により、共同絶交宣言がなされ、雑穀栽培講習会も、その後、雑穀街道普及会も撥撫を受け続けたのであった。この行為には藤野における NPO

市民団体にも及び、彼らも忖度せざるを得なかったようだ。恐らく、トランジション・タウン藤野とパーマカルチャー・センター・ジャパンは藤野に本部を置いており、雑穀街道普及会には賛同団体になっているが、名義使用のみで、実質的な組織連携活動はない。これは、上述した地域有力者への忖度であると考えられる。

こうした事例を、花房 (2022) はとても率直に、田舎はいやらしいと具体的な事例を多く挙げて批判を展開している。彼は地域に深入りしていないので、このように正直に発言できるのだろうが、批判は大方その通りである。しかしながら、過疎地域に希望がないと断定して、いろいろなことを諦めて、過疎地域のゆるやかな後退をめざしてよいと結んでいる。諦めるという政策に収斂させてよいのか、私は地域の現場にいて充分わかっていながら、50 年余り忍耐、我慢して抵抗してきたのである。

榎本 (2021) によれば、トランジション・タウンとは、市民が自らの創造力を最大限に発揮しながら地域のレジリエンス (底力) を高めることで、持続不可能なシステムからの脱依存を図るための実践的な提案活動である。藤野におけるトランジション活動は 2008 年頃から始まった。当初から地元有力者の協力を得て、地元団体とつながるようにしてきた。トランジション藤野にはリーダーがいない。やりたい人が、やりたいことを、やりたい時に、やりたいだけやる、といった考え方を共有する活動が主軸である。お百姓クラブは食と農をテーマとしたワーキング・グループとして立ち上がった。100 m²ほどの畑を借りて、大豆 (津久井在来) や小麦を栽培し、味噌づくりもするようになった。中心メンバーに、私は退職時 (2014) に、実験用に保存していたキビなどの種子を、移管し藤野ローカル・シード・バンクとすることになった。2015 年にはビオ市が藤野倶楽部に場所を借りて始まった。

相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモンでは食のレジリエンスを高める活動をしている。雑穀街道普及会は協力関係が強い。トランジション・タウン小金井は東京学芸大学彩色園の水田を使用している。この農園は私が 40 年間管理し、学習や研究で活用してきた。もう一点、内なるトランジションは心と意識のレジリエンスを高めることで、個人が孤独を、民族が孤立を深める現代社会で重要な課題となっている。榎本は、人類が今発揮すべき本領の中でもその最たるものは、思いやる力であり、思いやりの輪を広げていきたいと締めくくっている。都市に近い雑穀街道地域では、小規模家族農耕で食料などを自給しながら、生業の他に都市域で現金収入が得られる職業を持つことができる里山暮らしの会ちーむゴエモンはとても良い事例である。

この指とまれ式の緩やかな組織作りは自由でよい。ただし、活動の実績を積み上げて、継承することは難しい。とりわけ、管理責任の継続がないと、ローカル・シード・バンクなどの維持はできない。失礼ながら、野良仕事をしたことのない人たちが、口先だけで、農業の重要さを嘯いているようにすら思えた。日々の暮らしに手一杯で、それを超えて市民活動をするのには、思い遣り、志、事務能力に加えて、経営能力がいる。金の切れ目は縁の切れ目、助成金や補助金などがあればムラができるが、なくなれば、そのプロジェクトは成果を生かすことなく、繰り返し潰えた。私利私欲で、協力関係ができない。協力して補い合うことで、生産量も多くなり、融通が利く。協力して雑穀街道ブランドを作れば、販路も広がる。しかし、こうした経営戦術は実行できなかった。

4) 教育・研究機関の対応 (事例 4 および 6)

FAO ローマ本部のウェビナーに 10 分ほどの時間をもらい、日本の雑穀の歴史を話すことができた。雑穀研究会シンポジウムでは偶然の代替で話す機会を得た。南アジア学会の若手研究会には、老人に与える時間はないと話題提供を断られた。インドではとても重要な食文化に関わる祝賀活動が行われているにもかかわらず、日本の研究者は雑穀に関心がないのである。

東京学芸大学創基 150 周年で雑穀発泡酒復刻企画のために、雑穀栽培者 (卒業生) とクラフトビール醸造者との仲介を依頼された。しかし、単なる仲介を超えて、実質、ほとんどすべての作業に責任を持つ羽目になった。重ねて、食と環境のシンポジウムを企画しようとしたが、これまた、協力者である現職教授たちにほとんど関心をもたれなかった。学問の成果よりも、唯一有名な卒業生である野球監督の講演会が主な企画であったようだ。同大学キャンパスに新設された辻調理師学校での話題提供も、説明もなく沙汰やみになった。

古守豊甫の長寿村研究は当時、国連 WHO やアメリカの放送局 ABC が取材に来るほどであった。天皇の行幸や新嘗祭への献穀もあり、寄付を募って長寿村の大碑も造った。善玉・悪玉菌に関する光岡知足の研究にも貢献した。しかし、里山に関心があっても、里に暮らす人々や生業、在来品種、食文化には関心も、敬意もない。ましてや、篤農の経験知や科学者の成果への関心も敬意もない。雑穀は貧しさの象徴とでもいうのか、むしろ差別、忌避しているように見える。地方行政、地元市民、さらに研究者さえもが伝統的生活文化や生業文化を大事にしていない。まさに雑穀は見捨てられた作物である。

5) メディア・アドバイザーの対応 (事例 5)

本来、私はマスメディアに露出することは極力避け、おおよそテレビには出ないようにしてきた。日々の暮らし、現職では講義、彩色園・農場の管理、会議のほか、国内外のフィールド調査、収集品の整理、植物の実験研究、文献の読書、論文の投稿など、とても時間が足りない。マスメディアなどに専門家面して出ている時間などはない。日がな一日中、自由でなければ植物実験はできない。しかし、テレビに出て有名にならなければ世間は評価しない。有名になればまた時間を失う。

マスメディアの職業は、流行に乗り、一時を面白くする。そこに誠意など不要で、ひらめきが受ければよいのだ。言ったことやったことにも責任を取らない。オリジナルをいのように変形して、面白おかしくマスメディアに流す。このような所業は研究者の場合はほとんど盗作であり、やってはならないことである。言ったこと、やったことには無自覚で、責任感や倫理感がない。世間に受けないとなれば、躊躇なく一瞬で引く。今どきは、社会的地位の高い人ほど、虚偽、隠蔽、文書の偽造、何でも悪徳を知らなかったと、平然と嘯き、お手盛りで何でも不問にする。国会議員などの法律や条例の作り手が、あまりに無法者である。権力を持てば、何でもできるということは、若者の行動規範にひどい害悪を与えている。大変な犯罪である。最近では、科学研究者すら、少数ながら嘘をつき、データ偽造や盗用をする。科学は事実のみを根拠にするから、嘘をつかないのである。科学を技術

として利用するには、安全確認や倫理的合意が、科学者だけではなく、広く市民社会も含めて、必要であるが、金と名誉のために独走する研究者もいる。

ちなみに、2023 年は国際雑穀年であったので、講演や講義もし、多くの依頼原稿を書き、あるいはいくつかは編集者の要望に応えられないので断りさえした。私の主義に反しても、大手マスメディアに協力を依頼したが、ほとんど反応がなかった。国連が提案している家族農業や雑穀年などに日本のマスメディアは全く無関心である。世界の動向を直接取材して、報道しないジャーナリストなど日本の記者クラブくらいなものだろうか、不思議としか言いようがない。人生の現場で記者に出会うか、あるいは訪問を 200 人以上から受けたが、大方は事前学習をしておらず、基礎知識もなく、的外れな質問をする。突然の電話取材もあったが、私たちがそのようなことをすることはできない。当然相手にされることはないのだ。

6) 日本の翻訳文化の特性

江戸時代は鎖国しながら独自の学問が形成されていたが、一方で、幕府権力者には西欧の学問研究は好感をもたれずにいた。第 2 代水戸藩主が始めた『大日本史』編纂の過程で形成された水戸学は尊王攘夷思想で、明治維新の思想的基盤となり、教育勅語にも影響を与えた。ところが、幕末のころ、薩英戦争、馬関戦争にあっさり敗退して、薩摩・長州の攘夷派は急転して、開国派になった。欧米の兵器に恐怖を抱いたからである。これ脱亜入欧、富国強兵となり、禁止していた蘭学、欧米の科学技術が被植民地主義として、翻訳されて、権力や権威に利用されるようになった。当時は、鎖国体制を揺るがすように、異国船打払令 (1825)、シーボルト事件 (1828)、天保の大飢饉 (1832-1837)、大塩平八郎の乱 (1837)、などが連続して起こっていた。蛮社の獄 (1839) では、渡辺崋山ら 8 名が逮捕された。その中に町者の高野長英がいた。彼は『勸農備荒二物考』を書いて、飢饉の対応するために馬鈴薯と蕎麦を推奨していた。こうした有意な人物まで投獄して、果ては殺してしまった。大塩にしても幕府の与力でありながら、庶民の困窮を見かねて異論を呈して、抗議したためにひどい殺され方をした。

西欧米主義、舶来品付加価値、被植民地主義の弊害は大きいだが、唯一、翻訳文化良い点は多言語の著述が日本語で読めることである。しかし、悪い点は日本の独創性が評価されず、マスメディア受けの良い二番煎が高い評価を得る。創作者の原作を大事にしない。自然科学論文でいうのなら、二番煎が引用文献を明記しないのなら、恥ずべき盗作になる。一般雑誌に随筆などを書く際に、せめて原著者名 (年) と記述するのさえ、鬱陶しがられるが、これを書かなければ、他者の文節の盗用になる。

生きもののうた文学会から、特別企画「共存し生きるために一現場からの肉声を拾う」への寄稿を求められて、「だけどの思考～時空を超える想像を」という随筆を書き、次のように指摘した (木俣 1992)。日本の科学者はごく狭い専門領域に限定して研究するようにトレーニングされている。先見性や創造性のある未知の研究という行為に敬意を払わない。通俗化され、模倣されたような二番煎じが好まれて消費される。日本の基層文化を食い尽くし、自主的な評価や任意な行為は尊重されず、他からの評価や強制によって動くという姿勢で、責任の所在を曖昧にする付和雷同の社会構造ですらある。世間は自己主張が強い

人がのさばり、一般市民は議論が嫌いであるので、議論によって明確な主張をせずに、思考の妥協水準を上げることはしない。何事も単純化が求められるが、心にまで達する基層文化複合の課題は複雑系であり、統合する手法を長年トレーニングせねば、課題解決の手法は身につかない。学校教育制度の中の学習指導要領は学習原論から根底的に再検討が必要である。

西川一三 (1991) は第 2 次世界大戦中に、総理大臣東条大将の命令により、蒙古人ロブサン・サンポー (チベット語で美しい心) として北西シナに潜入し、8 年間に内蒙古からチベット、ネパール、インドにまで極秘の調査旅行をした人である。彼の名著調査記録で次のように記述している。シナ商人は蒙古人にとっては恰も腹に養っている回虫のように、毛虱、ダニのように蒙古人の間に喰い入っている。この恐るべき不屈な漢民族に対し、財閥、学閥、軍閥と国を背景とし、国家にもたれかかっている我々日本人が果たして対抗できるであろうか。大自然は金銭や書物からも得ることのできない、なにかしら偉大なものを与えてくれた。それに対し、近代文明というものがどれほど人間を虚弱にし、自然に美しく伸びようとする心をゆがませ、虚栄、ねたみ、詐欺、その他複雑陰険なものにしてゆくかをも改めて考えさせられた。そして人間は、裸より強いものはないということを強い感動をもって考えさせられた。

東 (2023) は次のように記している。ネットでもリベラルへの反発は年々激化している。大学人や知識人の声は大衆に届かなくなった。保守は革新と対立し、社会変革への消極的な態度を示す。リベラルは自由という意味の言葉で、個人の自由を重んじるがゆえに、逆に社会の急進的な変革に慎重だという立場は十分にありうる。その場合はリベラルな保守主義者ということになる。保守は共同体が閉じていることを前提としている。そのうえで仲間を守る。それに対してリベラルは共同体は開かれるべきだと信じる。現実には日本でのリベラルは、彼らの自意識とは裏腹に、閉じたリベラル村をつくり、アカデミズムでの特権や文化事業への補助金など、既得権益の保持に汲々としている人々だとみなされ始めている。

カズオ・イシグロ (2021) は次のように述懐している。現在のリベラル知識人たちが、世界の市民と連帯しているかのようにふるまいながら、じつのところは同じ信条や生活習慣をもつ同じ階層の人々をつるみ、同じような話題について同じような言葉でしゃべっているだけの実態を鋭く抉り出している。保守は閉ざされたムラから出発する。リベラルはそれを批判する。けれども、そんなリベラルも結局は別のムラをつくることしかできないのだとすれば、最初から開き直りムラを肯定する保守の方が強い。ローティは、わたしたちリベラルについて、それは自分自身を拡張し、より大きな、いっそう多様性に富むエトノス (民族や習慣) を創造するために身を捧げる集団であるべきなのだとして記している。

2023 年の今、日本では人文学の評判は落ちるとこまで落ちている。言論人や批評家にかつての存在感はない。有名な学者もほとんどいない。世に出てくる文系学者といえ、活動家まがいの極端な政治的主張を投げつける、目立ちたがりの人々ばかりだ。シンギュラリティ (特異点) とは人工知能 AI が人類の生物学的な知能を超える転換点、あるいはその転換によって生活や文明に大きな変化が起きるという思想を意味する。こうした論考の上

に、東 (2023) は、哲学とは過去の哲学を訂正する営みの連鎖であり、そのようにしてしか正義や真理や愛といった超越的な概念を生きることができないと、結論を述べている。

心の構造と機能は、個体 (個人) として系統発生 (人類史) を繰り返す (追体験)、感覚と知能を統合することによって、その発育 (文化的進化) が担保できる。都市文明の中でこの自然体験を失い感覚を育てず、生きるための仕事を失い、心の構造と機能は退行して不全のままである。これが現代都市市民の心の病理である。生業仕事というのは生き物 (動物) として自然の中で自ら食べ物を獲得し、暮らしの行動を決定することである。とりわけ、緑の革命により画一大量生産された 3 大主穀トウモロコシ、コムギ、イネを大量に輸入して、自ら食を獲得せずに与えられた餌を食べ、自らの認知による行動判断をせずにマスメディアや専門家に委ねて思考停止しては、これを自己家畜化というのだろうが、文化的進化を退行させているということになる。すなわち、最大の課題である心の謎はここにあり、何が病理的原因かが明らかになってきた (林・加藤 2023、山本 2024)。この課題に関しては別稿で詳細に検討した (黍稷 2024)。

このくりに人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同する。実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。自然から離れ、生業を放棄し、食料も自給せずに、大方を買ってすますことで、人間は単に与えられた餌を食むだけの自己家畜化へと退行進化している。加えて、AIやChatGPTなどに存して思考停止に陥れば、そろそろ生き物ではなくなり、化け物になってしまうのだろう (黍稷2024)。

今だけ、金だけ、自分だけ (鈴木2013) の世相の中で、大方がこれに流されているが、このようなことは人間の持って生まれた性で、とりわけ都市文明化して以降に著しく昂進したのだろう。自ら剣で人を殺すのではなく、無人機や毒薬で人を殺すなど、現代の野蛮への文化進化的退行はとどまることをしない。

佐伯 (2022) のさらば欲望の論理は、私の到達点と近似している。われわれに突き付けられた問題は、富と自由の無限の拡張を求め続けた近代人のはてしない欲望の方にあるのだろう。彼は福澤諭吉を引用して、衆論の非を多少なりとも正すことができるのは学者である。しかし、今日の学者はその本文を忘れて世間を走り回り、役人に利用されて目の利害にばかり関心を寄せ、品格を失っている。学者たるもの、目先の問題よりも、将来を見通せる大きな文明論にたって衆論の方向を改めさせるべきである、と記している。

ミズン (1996) は人間の心の構造と機能は草原で暮らす遊牧民において十全な統合が見られると言う。現代、都市住民の大方は心が委縮、病んでさえいるようだ。しかし、東京砂漠の中でも、休暇には自然に回帰し、生活様式の平衡が良く執れて、心の構造と機能が十全に発育し、誠実に暮らす人々も少なからずおり、生き物の文明への移行、希望はここに残されている。

結論

私が愛着を持って人生の大半、50 年も関わった地域、雑穀街道筋でも、個人的には優れて教養が高く、良心の篤い人々との交友は厚く、本当に終生、長く続いてきた。これは決して少ない人数ではない。このために、残念な事実について明らかにして、批判するよう

なことを強く自己制御し、我慢してきた。しかし、人生の時間がもう少ないので、正直に事実を記して、三つの謎を解く鍵を示し、将来への課題を明らかにしておきたい。ここで FAO 世界農業遺産への登録申請活動を 10 年続けながら、諦めるに至ったのは私個人の高齢のためだけではない。3 つの謎、現世の人々は自然や先人の生活文化に関心がない（第 1 謎）、地域振興のための市民による公共活動が軌道に乗ると地域有力者から排除される（第 2 謎）、地域社会の歴史を消し去り、誇りを失う（第 3 謎）、これらの主要因は次の通りである。

山村地域としてみると、狭くて閉鎖社会であることは否めない。都会は人口が多く、開放的であるから、地域閉鎖性は同じであっても、ムラ撥撫は目立たず、回避できる。むしろ、都会では、学校などの方が逃げ場のない閉鎖社会で集団いじめが顕在化する。雑穀街道地域では、①地域の個人の私利私欲、嫉妬 *Jealousy*、羨望 *envy*、②地域有力者、市議員などの排他性、③環境市民団体の環境全般への無知と偏狭さ、④働きたくない地方政府の役人の保身、⑤マスメディアの傍観、無関心、無視、あるいは切り取り利用、⑥精神的に毒を持ち、良心の欠如したサイコパスが地域有力者と結託して執拗なムラ撥撫、集団絶交宣言をされて、十分な信頼を築けず、将来展望をついに確信できなかった。

雑穀街道地域の排他的特性、雑穀への差別意識、長年にわたって蓄積されてきた、地域の篤農の基層文化に関する伝統的知識体系、先達学者の科学的知識体系に対する敬意がない。今だけ、金だけ、自分だけの流行にのるのである。国の基盤であった穀物、農耕文化基本複合への敬意が無くなり、金が代替し、ついには金融・株が経済の中核になっている。このようにして、雑穀街道普及会は寄って集って千載一遇の機会をぶち壊されたのである。

2011 年の東日本大震災の結果、自然災害に加えて、人新世の根源である原子力発電所のメルトダウンが身近な場所で起こり、非常な絶望状況の下に置かれた。このため、委託を受けていた収集種子約 1 万系統をイギリスに移管せざるを得なかったことは、私にとっての大きな絶望であった。それでも、残された希望に繋ごうと、定年退職後に、雑穀栽培の普及、継承を図る目的のために、手段として FAO 世界農業遺産登録申請の活動を始めた（2014）。絶望の中で、どのようにして彼方に希望を見つけて、今後に維持するのか。再び立ち上がり、人新世の主流をなす動向に抗うのはとても勇気が必要されるのだろう。忍たま乱太郎のオープニング曲にある 100% 勇気（松井五郎作詞、馬飼野康二作曲 1993）、ドクター X のエンディング曲の阿修羅ちゃん（Ado 2022）、あるいは中島みゆきのファイト（中島 1994）に、励まされた。辛い世相の下でも、多くの師友や家族の情愛により、鬱病にもならず、自殺にも至ることはなかった。これまでの人生で、言ったこと、行ったこと、責任は、雑穀街道普及会の提案も含めて十分に果たした。これで市民社会活動からは姿を消し、遊行の途に至ることにした。雑穀街道普及会からは退会することにし、会員の意見を求めたのち、閉会解散した。この 10 年間の経緯の詳細について、本論で報告し、責任をもって記録を残した。なぜ、雑穀街道普及会を閉会解散することになったかの顛末の事実は理解していただけるかと思う。絶望の先に、私ができる希望は、こうした人生の最大遺物、直接経験の記録を残して、この国にいずれか再起の時があったら、将来世代の参考にしてもらうことである。

謝辞と謝罪

雑穀街道普及会の活動を進めるにあたって、街道筋の篤農や住民の皆様には多大な援助をいただき、まず感謝申し上げます。とりわけ、雑穀栽培を継承してこられた篤農の岡部良雄夫妻、中川智・仁兄弟、守屋秋子さん、アカデミック・アドバイザーの安孫子昭二さん、藤村達人さん、雑穀栽培を普及しておいでの方の幹事の宮本透さん、富澤太郎さん、佐野守平さん、井上典明さん始め自給農耕ゼミ（佐野川）参加者の皆さん、映像記録を残してくださったワノサト・エコビレッジの梶間陽一さん、市長との仲介の労を取ってくださった橋本登志子さんに心よりお礼申し上げます。

雑穀街道普及会の目的を達成できずに時間切れ、志半ばで、それでも責任を果たし終えたこととして、謝罪の意は残しておきます。

引用文献

東浩紀 2023、訂正可能性の哲学、ゲンロン、東京。

文福洞先斗 2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト第 14 号 : 76-115。

榎本英剛 2021、僕らが変わればまちが変わり、まちが変われば世界が変わる : トランジション・タウンという試み、地湧の杜、千葉県長南町。

花房尚作 2022、田舎はいやらしい : 地域活性化は本当に必要か?、光文社、東京。

黍稷農季人 2021、孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能（電子版）、植物と人々の博物館。

黍稷農季人 2024、この阿修羅は天道の門近くに咲く草花に転生する～風の時代に心を豊かに育む～、民族植物学ノオト第 17 号 : 1。

木俣美樹男 1992、「だけど」の思考～時空を超える想像を、生きもののうた第七集 : 4-6、生きもののうた文学会。

木俣美樹男 2011、森とむらの生物文化多様性～家族を守るための自給農耕と栽培植物在来品種の保全～、森とむらの会記念誌、社会的共通資本としての森とむら、財団法人森とむらの会、東京。

木俣美樹男 2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～、民族植物学ノオト第 14 号 : 52-75。

西川一三 1991、秘境西域八年の潜行上・下、中央公論社、東京。

佐伯啓思 2022、さらば、欲望 : 資本主義の隘路をどう脱出するか、幻冬舎、東京。

鈴木宣弘 2013、食の戦争、米国の罠に落ちる日本、文芸春秋、東京。

参考文献

東浩紀 2020、ゲンロン戦記 : 知の観客をつくる、中央公論新社、東京。

林朗子・加藤忠史 2023、心の病の脳科学、講談社、東京。

森嶋通夫 2010、なぜ日本は没落するか、岩波書店、東京。

内藤朝雄 2009、いじめの構造：なぜ人が怪物になるのか、講談社、東京。
スタウト、マーサ 2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。
スタマテアス、ベルナルド 2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち、SBクリエイティブ、東京。
山田奨治 2002、日本文化の模倣と創造：オリジナリティとは何か、角川書店、東京。
山本圭、嫉妬論：民主社会に渦巻く情念を解剖する、光文社、東京。

関連文献

木俣美樹男 2023、植物と人々の博物館小史、民族植物学ノオト第 16 号 : 47-93。
木俣美樹男 2023、随筆国際雑穀年 2023 への餞、雑穀研究 No.37:21-24。
木俣美樹男 2023、果てしない雑穀の物語、雑穀研究 No.38:35-37。
木俣美樹男 2023、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に、土と健康 No.518 : 2-5。
木俣美樹男 2023、雑穀は生物文化多様性豊かな食と農の文化残したい、女性のひろば通巻 529 : 47-51。
木俣美樹男 2023、巻頭言、生きている文化財—雑穀と家族農業に誇りある未来を、国際農林業協力 46 (1) : 1。
木俣美樹男 2023、2023 年は国際雑穀年～日本の雑穀街道文化を FAO 世界遺産に、木俣美樹男さんインタビュー、つぶつぶ vol.15:2-4。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 1、立花登さん夫妻、つぶつぶ vol.16:14。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 2 降矢静夫さん夫妻、つぶつぶ vol.17:17。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 3 椎葉秀行さん夫妻、つぶつぶ vol.18:19。
木俣美樹男 2023、雑穀物語 4 貝澤薫さん夫妻、つぶつぶ vol.19:17。
木俣美樹男 2022、第四紀植物（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら（電子版）、植物と人々の博物館。
黍稷農季人 2022、巻頭言人新世の姿形寡聞、民族植物学ノオト第 15 号 : 1。
降矢静夫・木俣美樹男 2022、山村農人降矢静夫対話集（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男編 2022、降矢静夫光岑書簡集～最後の山村農人からの贈物、希望（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2021、巻頭言、素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標、民族植物学ノオト第 14 号 : 1。
木俣美樹男 2021、食べ物と農耕に依拠する私たちの不易の暮らし、環境と文明 29 (11) : 5-6。
木俣美樹男 2021、環境学習原論～人世の核心；増補改訂版（電子版）、植物と人々の博物館。
木俣美樹男 2020、巻頭言、老衰したこの国にも再生の春を希求する、民族植物学ノオト第 13 号 : 1- 2。
木俣美樹男 2020、まねごと山村農の 6 年記、民族植物学ノオト第 13 号 : 35-60。
木俣美樹男 2020、降矢静夫光岑書簡集（電子版）、植物と人々の博物館。

- 木俣美樹男 2020、家族の物語：アシュラと禰豆子を事例に、環境と文明 27 (7) : 5-6.
- 木俣美樹男 2019、巻頭言、商品ではない任意無償性への敬意、民族植物学ノオト第 12 号 : 1。
- 木俣美樹男 2019、先真文明時代への覚書 5、文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト第 12 号 : 17- 36。
- 木俣美樹男 2019、雑穀は世界を救う、自然栽培 : 20-28。
- 木俣美樹男 2019、環境学習原論～人世の核心 (電子版)、植物と人々の博物館。
- 木俣美樹男 2019、先真文明の時代 (電子版)、植物と人々の博物館。
- 木俣美樹男 2018、巻頭言、解きたい謎—西暦第2千年紀に生きる、民族植物学ノオト第 11 号 : 1。
- 木俣美樹男 2018、九州・沖縄地方における雑穀農耕文化複合、民族植物学ノオト第 11 号 : 7-50。
- 木俣美樹男 2018、信仰の個人主義を探る—発端 : 科学への妄信を越えるために、民族植物学ノオト 第 11 号 : 56-62。
- 木俣美樹男 (監修) 2017、こどもかんきょう絵じてん、三省堂、東京。
- 木俣美樹男 2017、焼畑の作物、特に雑穀の栽培方法と現代的価値、椎葉焼畑研究会。
- 木俣美樹男 2017、タネは誰が守るの? 種子法の廃止を受けて、では何が出来るか、日本パーマカルチャー・センター。
- 木俣美樹男 2017、巻頭言、生活世界の平安保守、民族植物学ノオト第10号 : 1。
- 木俣美樹男 2017、欧米の雑穀見聞録、民族植物学ノオト第10号 : 58-61。
- 木俣美樹男2016、巻頭言 多様な生活文化の中の雑穀 (特集)、民族植物学ノオト 9:
- 木俣美樹男2015、巻頭言—新しがりやの病を治して、再び人が生きる道の復興 renaissance へ、民族植物学ノオト 8: 1。
- 木俣美樹男2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト 8: 23-66。
- 木俣美樹男2014、ホームガーデンによる生物文化多様性保全と家族食料安全保障—特集にあたって、調査研究の概要と趣旨—、環境教育学研究 23 : 19-30。
- 木俣美樹男2014、岩手県の雑穀栽培と家族・地域の食料安全保障、環境教育学研究 23 : 103-130。
- 木俣美樹男2014、先真文明時代への覚書:、民族植物学ノオト 7: 29-37。
- 木俣美樹男2014、自らを問う — 事例 0 を伴う付録資料:、民族植物学ノオト 7:38-47。
- 木俣美樹男2014、未来のための伝統的知識の再創作、中山間地に残る伝統的知識による地域活性化に関する調査研究報告書「伝統的知識の現代的価値を求めて Traditional Knowledge」、p.8、緑と水の森林ファンド事業助成、ECOPLUS。
- 木俣美樹男2014、地域あるいは場での環境学習の意義—職場と仕事、学校と家庭・地域、学びと仕事、p.33-40、高野孝子編著「PBE 地域に根ざした教育、持続可能な社会づくりの 試み」、海象社、東京。

参考資料サイト 詳細は下記のウェブサイト

木俣美樹男 2022、第四紀植物、植物と人々の博物館、山梨。

<http://www.milletimplic.net/weedlife/quatlplants/quatlplantsfinal.html>

木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら、植物と人々の博物館、山梨。

<http://www.milletimplic.net/milletworld/millet/sn/jnmpilvil.html>

参考動画サイト： OK シード・プロジェクト学習会、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に

<https://www.youtube.com/watch?v=jucNJsWpivI>

雑穀街道普及会は解散したが、下記ホームページにアーカイブを公開しておく。これらは国会図書館のデジタル事業に登録しているので、記録は残る。

<http://www.milletimplic.net/milletworld/millstr.html>

<http://www.milletimplic.net/university/civicuues.html>

[雑穀街道を FAO 世界農業遺産に - YouTube](#)

[【報告】FFPJ 連続講座第 21 回：日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか - ニュース レポート](#)

[The historical sketch of millets in Japan \(milletimplic.net\)](#)

家族農業プラットフォーム・ジャパン FFPJ 連続講座第 21 回：日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか。つぶつぶパワーフェス 「雑穀は歴史的、風土的だからもの」 (57) 国際雑穀記念オンラインイベント「つぶつぶ雑穀パワーフェス」第 2 回 - YouTube 関連動画アーカイブがある。

環境学習市民連合大学 (milletimplic.net) 相模原市緑区の茶園・雑穀畑、飢饉用穀槽、アワと陸稲、篤農の雑穀品種保存 (2022) 相模原市長との会見。

雑穀街道普及会 2023.3 4 刷 Hirse Straße 事務担当幹事連絡先 木俣美樹男 e-メール：kibi20kijin@yahoo.co.jp 事務所：非営利活動法人 自然文化誌研究会／植物と人々の博物館 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2 ホームページ：エコミュージアム日本村 (トランジション小菅) 雑穀街道

<http://www.milletimplic.net/milletworld/millstr.html/>

付録 1. 雑穀街道普及会 会則

1. 名称。本会は雑穀街道普及会（以下普及会）と称する。
2. 目的。関東山地南部地域農山村の小規模家族農耕によって伝承保全されてきた雑穀他の生物文化多様性を継承するための普及啓発活動を行い、あわせて FAO 世界農業遺産に登録申請の準備をすることを目的とする。
3. 会員。個人会員、団体会員および賛助会員で構成する。会費は任意とする。
4. 事務所。山梨県小菅村、自然文化誌研究会／植物と人々の博物館に置く。
5. 普及会の活動。 1) 雑穀ほかの栽培植物在来品種の保存、普及、および生物文化多様性を中心とする 伝統的知識体系、小規模家族農耕技術を学習、啓発する。 2) 関東山地南部地域の農山村において、都県境を越えて広域連携による秩父多摩甲斐国立公園周辺農山村の地域振興を図る。 3) これらをもって FAO 世界農業遺産に登録申請のための諸準備をする。

付則 本会則は、2021 年 1 月 31 日に発効する。ただし、会則の追加修正は必要に応じて、会員の合意により行う。

幹事：＜事務担当幹事＞木俣美樹男、宮本透、佐野守平、玉木陸斗、富澤太郎 アドバイザー：木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授・農学博士／民族植物学・環境学習原論）安孫子昭二（立川市史編集委員・文学博士／縄文考古学）藤村達人（相模原市農業委員／筑波大学名誉教授・理学博士／作物育種学、植物分子遺伝学）

会員：ABC 順 2022.10.30 安孫子昭二（東京都日野市）土井利彦（愛媛県大洲市、地域振興）伊能まゆ（ヴェトナム、ホーチミン市、Seed for Table）木俣美樹男（東京都小金井市）御園美保子（埼玉県所沢市、造園）宮本幹江（愛媛県大洲市、地域振興）宮本透（神奈川県相模原市、農家）中川智（山梨県上野原市、農家）西村俊（石川県、北陸先端科学技術大学院大学准教授、触媒化学）岡部良雄（山梨県丹波山村、農家）大野康雄（岩手県、雑穀生産研究）大谷ゆみこ（東京都、未来食つぶつぶ創始者、フウ未来生活研究所代表）佐野守平（埼玉県横瀬町、秩父まるごと博物館、雑穀自由学校）玉木陸斗（神奈川県厚木市、芽ぐみれっと、東京農業大学院生）富澤太郎（山梨市上野原市、農家）

賛同団体：特定非営利活動法人自然文化誌研究会／植物と人々の博物館 特定非営利活動法人トランジション・ジャパン 家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン (FFPJ) 一般社団法人ジャパニーズビーガンつぶつぶ (JVATT) 小菅村漁業組合、北都留森林組合、雑穀研究会、藤野・あわ・きび・ひえの会、相模湖里山暮らしの会ちーむゴエモン、特定非営利活動法人パーマカルチャー・センター・ジャパン、特定非営利活動法人さいはら、ほか 後援団体：一般社団法人日本雑穀協会ほか

付録 2. 雑穀街道普及活動の 10 年史

年月	内容
前史	
1974	関東山地における雑穀の栽培と調理の調査研究の開始
1975	東京学芸大学自然文化誌研究会創部、上野原町西原の調査を開始。
1986	韓国調査。1983~1990東京女子大学、京都大学などのインド亜大陸調査隊に参加
1988	雑穀研究会を事務局として創立。
1992	JT クロスカルチャー大賞
1993	東京学芸大学中央アジア調査
1996	コカ・コーラ環境教育賞
1997	インド在外研究、調査1996~
2001	インド調査
2003	ミレット・コンプレックス創立、雑穀栽培講習会を開始。
2004	モンゴル調査
2005	イギリス在外研究、考古学文献調査~1996
2006	ミレット・コンプレックスを植物と人々の博物館に改称。
2010	東日本大震災によりキュー植物園に種子約1万系統を緊急移管
2014	
3月	雑穀標本を小菅村に移動、ローカル・シード・バンクを藤野に設置
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村
11月	雑穀街道の提唱、第 34 回環境学習セミナー／小菅。雑穀街道の講義、種市、藤野
2015	
3・5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。
9月	雑穀街道展示、藤野倶楽部結びの家。
11月	雑穀料理教室、藤野倶楽部結びの家。生物多様性アクション大賞審査員賞。
2016	
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。
6月	自給農耕ゼミ 7、藤野。
11月	上野原市保健センターで、雑穀街道の講義。自給農耕ゼミ 8、藤野。
12月	小菅村長および上野原市長に雑穀街道の提案。農水省環境保全官を訪問。宮崎県椎葉村 (FAO 世界農業遺産登録) の焼畑研究会で焼畑雑穀に関して講演。
2017	
1月	東京都公園協会講座で雑穀街道提唱・講義。関東農政局環境保全官を訪問。
4月	雑穀街道普及会の賛同者募集開始 (伝統知シンポジウム=第 39 回環境学習セミナー／藤野)。農水省日本農業遺産認証・講演会。
5月	展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。ミレット藤野講座開始。
6月	植物と人々の博物館の移転。
7月	雑穀街道巡検と 2 市 2 村の賛同者交流。
8月	パーマカルチャー・トランジション交流フェスティバルで、在来種に関して講演。社会科教員グループの巡検受け入れ。
9月	南アジア学会で雑穀の起源と伝播について発表。
12月	宮崎県椎葉村 (FAO 世界農業遺産登録) の焼畑研究会で山村の現代的意義に関して講演。ミレット藤野担当者自己都合で解散。

次ページに続く

2018

- 1月 上野原市長、相模原市長、小菅村長、丹波山村長の賛同依頼状。
- 4月 雑穀街道と FAO 世界農業遺産セミナー
- 8月 日本環境教育学会イクスカーション来訪
- 9月 丹波山村長及び役場職員に趣旨説明
- 12月 藤野まちづくりセンター長に趣旨説明

2019

- 冬季は雑穀腊葉標本、図書 of 整理
- 2月 藤野で自然文化誌研究会。
- 5月 相模原市緑区長に趣旨説明、東京学芸大学学生実習で雑穀街道への小菅村民意識調査。
パーマカルチャー・センターで「雑穀と地域」を講義。相模原市藤野まちづくりセンターで、企画について説明。相模原市緑区長が 2020 年度から FAO 世界農業遺産への申請準備活動を支援すると内定 (区長は小菅村まで雑穀街道を直接視察)。藤野で助成申請グループづくりを始めた。
- 7月
- 9月 上野原市農業委員会会長と雑穀街道の話し合。
- 11月 藤野仲介者は自己都合で個別に活動するというので、雑穀街道協議会設立に賛同しなくなった。
- 12月 上野原市農業委員会および山梨県富士東部農務事務所と話し合。

2020

- 2月 藤野仲介者は個人的に雑穀街道協議会設立に賛同せず、雑穀街道普及会 (準備会段階) 発起人・賛同者から退会し、相模原市緑区の提示した FAO 世界農業遺産に申請するための企画は中止決定したと、地域づくりセンターに通告した。
藤野仲介者は個人的関係の発起人・賛同者 (6 名と 1 団体) を雑穀街道普及会名簿からの削除するように求めた。藤野仲介者は個人的に FAO 世界農業遺産に関わらない活動助成をまちづくりセンターに申請した。これにより、行政が中心となる雑穀街道協議会の設立は延期せざるを得なくなった。
- 3月
- 4月 雑穀街道普及会 (準備会、正確には) の活動は一時停滞するが、継続した。
- 5月 雑穀種子の配布、栽培法のネット紹介 (小金井市)。上記の事情に伴い、藤野のローカル・シード・バンクを東京農業大学に移転した。森とむらの図書室 (藤野分室) も閉館し、原沢文庫を小菅村に移動した。
- 7月 雑穀発泡酒ピーボの復活計画プロジェクトを始めた。雑穀の種継の継続。さく葉標本の整理。

2021

- 1月 雑穀街道普及会は準備会からの賛同雑穀栽培者により会則を確認して創立した。
- 3月 種子の配布、種継、栽培法解説を続ける。
- 6月 小菅村と相模原市緑区佐野川地区で栽培見本園づくり
- 9月 自給農耕ゼミ (小金井)、隔月開催
- 11月 相模原市長秘書が佐野川の宮本茶園を視察した。
- 12月 上野原市長に面会、雑穀街道普及の趣旨説明を行った。

2022

- 1月 桂川・相模川流域協議会、ワノサト・プロジェクトの関係者と意見交換。その後、桂川・相模川流域協議会市民部会のオブザーバー参加で説明。NHK 甲府の取材を受けた。
- 3月 雑穀街道を巡回、小菅と西原で打ち合わせ。
- 4月 小菅で打ち合わせ。雑穀街道を世界農業遺産登録するための趣意書冊子を作成し配布 (1000 部)。雑穀街道協議会準備会の賛同団体のお願いを始める。相模原市長らが佐野川を視察。
- 5月 自給農耕ゼミ (佐野川) で雑穀類播種実習開催。桂川・相模川流域協議会市民部会で賛同を得た。
- 6月 桂川・相模川流域協議会市民部会で賛同を得て、総会で冊子を配布、さらに、同幹事会で提案する機会を与えられたが、賛同は保留された。NHK おはよう日本で西原の雑穀保存活動とともに、世界農業遺産登録活動が紹介された。
- 7月 上野原市建設産業部農村地域づくり担当リーダー石井春彦氏、市民部生活環境課長関戸治氏に重ねて趣旨説明、相模湖のチーム五右エ門の白水さんに現況報告をした。
- 8月 NPO さいはら、ワノサト・プロジェクトおよび NPO 自然文化誌研究会で協議。
- 9月 佐野川でキビ収穫、脱穀 (相模湖)。自給農耕ゼミ (佐野川)、自給農耕ゼミ (小金井) 開催。OK シード・プロジェクト学習会で話題提供、ユーチューブ動画記録 1200 回以上視聴。
- 10月 自給農耕ゼミ (佐野川)、勝坂遺跡・相模原市立博物館見学。
- 11月 五穀豊穣つぶつぶ新嘗祭で話題提供。
- 12月 環境を考える相模原の会学習会、桂川・相模川流域協議会市民部会に再度提案。

付録3. 国際雑穀年2023における活動

月日	内容	参加者	備考	You tubeアクセス
1月7日	雑穀研究会国際雑穀年記念シンポジウム	パネリスト、70名 ほど	日本大学生物 資源科学部	
1月9日	千葉県いすみ市のエコバーシティを訪問	木俣		
1月20日	FFPJ第21回オンライン連続講座話題提供；日本における麦・雑穀・豆類の栽培はなぜ衰退したのか	講義、50名ほど	ZOOM	483回
1月21日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	70名ほど	ZOOM	556回
1月23日	相模湖里山暮らしの会との話し合い	宮本、木俣		
2月5日	第8回自給農耕ゼミ（小金井）	15名		34回
2月8日	相模原市長に面会	宮本ほか5名		
2月11日	桂川・相模川流域協議会市民部会	宮本、木俣		
2月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	トーク・ゲスト、 60名ほど	ZOOM	345回
	自然文化誌研究会総会		ZOOM	
3月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス、	50名ほど	ZOOM	175回
3月18日	東アジア・ローカルシードバンク・ネットワーク	韓国と日本で20名 ほど	ZOOM	
3月30日	民族植物学ノオト16号発行			
4月15日	第6回自給農耕ゼミ（小金井）	10名ほど		
5月9日	相模原市緑区長に説明			
5月14日	谷崎さん、稲本さんが雑穀街道を視察			
5月21日	第12回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名参加		
6月11日	ローカリゼーション・デイ日本、分科会；雑穀=食のローカリゼーション	解説、60名ほど	ZOOM	264回
6月25日	第13回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
6月26日	臨時拡大運営委員会；植物と人々の博物館の今後について検討	14名	ZOOM	
7月11日	Second Webinar of the IYM Global Webinar Series "Historical aspects of millets" (FAO.org)	講義、130名ほど	ZOOM	
7月23日	第14回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
8月6日	第15回自給農耕ゼミ（佐野川）	9名		
8月9日	上野原市長と協議	21名		
8月27日	第16回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
9月11日	谷崎さんインタビュー小菅	2名		
9月17日	第17回自給農耕ゼミ（佐野川）	7名		
9月20日	ソビボ・ピーボ第1回発送			
9月22日	和ハーブ協会視察	4名		
9月22日	雑穀街道／世界農業遺産登録申請説明会、上野原市役所	83名	ZOOM併用	83回
10月2日	スウェーデンから調査来訪	槌本さん2名		
10月18日	書籍運搬／小金井から	黒澤さん		
10月22日	第18回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
11月13日	竹井さん標本調査、井上さん標本移管都留高校			
11月19日	第9回自給農耕ゼミ（小金井）	10名	ZOOM併用	80回
11月27日	図書の整理	梶間さん、川口さん、黒沢、木俣		
12月1日	伊能さん雑穀街道視察	6名		
12月18日	博物館運営担当者協議1	6名		
12月20日	博物館運営担当者協議2			
12月22日	ソビボ・ピーボ第2回発送、田端環状積石遺構見学			

この阿修羅は天道の門近くに咲く草花に転生する
 ～風の時代に心を豊かに育む～
 黍稷農季人

This Ashura would become a blooming flower near the gate of heaven in reincarnation.

～Growing up my own Mind in the Air Era～

Kibikibi Noukijin

雑誌『民族植物学ノオト』を創刊することにした際 (2005)、創刊号巻頭言に、「もう一つの阿修羅として」と題して一文を記した。すでに 19 年を経ているが、まさに絵にでも描いたように、ぼくはこの通りの後半生を歩み、何とか此岸には恨みを残さずに、気持ちよく彼岸への旅立ちを迎えようとしている。これまでに、人生の先達として阿修羅の眷属を探してきた。なぜ改めてまた阿修羅かは、唐突ながら最近、見捨てられた雑穀 millets (lost crops, orphan crops) の研究に人生を過ごしたぼくは阿修羅の眷属ではないかということに、新たに気付いたからである。ぼくが思うに、阿修羅は人間としての苦しみを自らの課題として 4 億年も終始戦い (学び) に明け暮れた。人間道や畜生道だけではなく、阿修羅は天道も含めて、全ての六道に移動できる存在ではなかろうか。

全ては心の仕業、ぼくという人間の歴史時空は常時戦場、阿修羅界 (修羅道) にあるようだ。現代のアニミストであるぼくは誠心誠意、公正を心掛けてきたが、菩薩の心 (R. エイトキン老師) にはほど遠いので、やはり人間界 (人間道) に属するのではない。宮沢賢治 (1923) は心象スケッチ『春と修羅』中の 1 編「春と修羅」で、「はざしり燃えてゆききする おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。まだ学生の頃であったか、読みふけたジョージ秋山 (1970) の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都 (1995) が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である (図 1)。

アシュラ

アーリア人のインド・イラン共通の時代にはアスラ asura とデーバ deva はともに神を意味していた。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。住所は海底や地下とされる (定方、世界宗教大事典 1991)。

今では、阿修羅 asura は八部衆に属する仏教の守護神である。六道の阿修羅道に住む。一般的には、サンスクリットのアスラ (asura) は歴史言語学的に正確にアヴェスター語のアフラ (ahura) に対応し、おそらくインド-イラン時代にまでさかのぼる古い神格であると考えられている。古代インドでは生命生気の善神で、呼称はサンスクリットの asu (息、命) に由来するが、悪者とみなされるようになってからは、「a」が否定の接頭語と解釈され、非天、非類などと訳された。

仏教に取り込まれた際には仏法の守護者として八部衆に入れられた。六道のうちの天道、人間道、修羅道を三善趣 (三善道) といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三悪趣 (三悪道) というが、三悪趣に修羅道を加えて四悪趣 (四悪道、四趣) とする場合もある。法華経では阿修羅は悪として書かれることはごく少なく基本的には三善道の 1 つもしくは八部衆の 1 つとして描かれており善趣の存在である。

阿修羅は帝釈天に齒向かった悪鬼神と一般的に認識されているが、阿修羅はもともと天界の神であった。阿修羅が天界から追われて修羅界を形成したのには次のような逸話がある。阿修羅は正義を司る神といわれ、帝釈天は力を司る神といわれる。阿修羅の一族は、帝釈天が主である忉利天に住んでいた。阿修羅には舎脂という娘がおり、いずれ帝釈天に嫁がせたいと思っていた。しかし、その帝釈天は舎脂を力づくで奪ったので、それを怒った阿修羅が帝釈天に戦いを挑むことになった。帝釈天は配下の四天王などや三十三天の軍勢も遣わせて応戦した。戦いは常に帝釈天側が優勢であった。一説では、阿修羅は正義ではあるが、舎脂が帝釈天の正式な夫人となっていたのに、戦いを挑むうちに赦す心を失ってしまった。つまり、たとえ正義であっても、それに固執し続けると善心を見失い妄執の悪となる。このことから仏教では天界を追われ人間界と餓鬼界の間に修羅界が加えられたともいわれる。修羅道は六道の一つ。妄執によって苦しむ争いの世界。果報が優れていながら悪業も負うものが死後に阿修羅に生れ変わる。人間道の下とされ、天道・人間道と合わせて三善趣（三善道）、あるいは畜生道・餓鬼道・地獄道の三悪趣と合わせて四悪趣に分類される。五趣に修羅道はなく、天道に含まれていた（Wikipedia など）。

長谷川（1987）によれば、アシュラ阿修羅はインド神話における鬼神の一種で、サンスリット語 asura の写音、アーリア人のインド・イラン共通時代にはアスラとデーバ deva は共に神を意味し、彼らが分かれて定住してからはインドではアスラが悪神を、デーバが善神を意味するようになった。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。神 deva と阿修羅の闘争はインド文学のよいテーマとなった。阿修羅は初期仏教の五道にはなく、阿修羅は天道や餓鬼道に含まれていたが、大乘仏教になって新たに修羅道が派生して六道になり、三善趣の下位に位置付けられた。阿修羅は原初の古い神であり、ヒンドゥーでは敵対する鬼神となり、佛教では改心して守護神に位置付けられている（Wikipedia、世界宗教大辞典 1991）。アシュラは本来系統の異なる神であって、古くは邪悪な存在とはされておらず、たとえば、乳海攪拌の時はヴィシュヌ神らと協力しており、リグ・ベダの暴風雨神ルドラもアシュラの一つであり、否定的な意味はなかった。インド神話が先住民との闘争史を反映しているのならば、アシュラはアーリア人に対抗した種族と考えられる。

ぼくは自然崇拜、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとっても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅の心象を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかったと推察する。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたいぼくも一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない抵抗こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、またぼくたちの歴史である。日本列島に居住してきた多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指してきた。雑誌の表紙にした門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて 2 体飾る。門男

は山の神の使いで、農耕の智恵と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。本雑誌の表紙絵は研究室卒業生三輪誠が原図を書いた。

そこでジョージ秋山の『アシュラ』(1970~1971、少年マガジン)をもう一度読み直すことにした。アシュラの歴史背景は室町時代の終わり、乱世の頃、飢饉の最中で庶民は飢餓線上を彷徨っていた。

室町時代末期の戦乱と飢饉の最中にある村で、アシュラの実父は散所太夫で、身ごもった妻藤乃を放擲した。彼女は赤子のアシュラを生んだが、鬼狂女になり、飢えのあまり吾子さえ喰おうとした。捨て子アシュラは放浪を生きぬいた。アシュラは自分を導く乞食法師が差し出した彼の腕を食べることができなかった。散所太夫はアシュラが自分の息子であることを知り、後に罪深い所業を悔いた。狂母は息子アシュラを探し求め、病を得て余命いくばくもなく、やっと再会したが、アシュラは母の末期においてさえも、彼女を容易に許せなかった。しかし、アシュラは死した母に百合の花を手向け、生まれてこなければよかったぎゃと慟哭した。ここでアシュラは母と自分の人生を受忍したのだろう。哀しくも父母と子が心で許し合ったのかのようだ。アシュラが阿修羅として生きたのか人間になって死んだのか、その後は描かれることなく終わっている。

もう一つ彼の作品『The Moon』(1972~1973、少年サンデー)を思い出して、確かに最終場面を切り抜いて保存しておいたはずなので、書庫を探したが発見できずに、これも古書を注文した。その最終場面とは、ケンネル星人が地球との友好関係を求めたにもかかわらず、彼らを私欲で利用しようとした木の国屋が星人を殺した。星人は報復として地球が一年で亡びるというカビ発生機械を設置した。純粋な心の少年サンスウがカビ発生装置を破壊しようとしてカビに蝕まれてもがき苦しみながら、ムーンの名を叫び、一方、ムーンは何もできずに涙を流すのであった。この先に恐らく未来はなく、人類は滅亡に向かい、このデストピアはまさに絶望で終わっていた。ムーンは新たなカミとして造られた巨大なロボットで、純粋な心を持った少年たち9名が合意した時にしか操作ができない。

ぼくが大学院生で実験の合間に、水俣病患者やその支援者たちとともに抗議活動をしていた頃に、少年サンデーに掲載されていたのだ。ここには公害、連合赤軍や三島由紀夫らの行動が変形されて時代背景に描き込まれている。権力の圧倒的暴力に挑発されて、ささやかな暴力で対抗しようとした学生運動の戦術が、市民ばかりか、当事者である学生たちからも信頼を失い、見放されてしまった。この学生運動の敗北の歴史的責任はとても重い。ガンジーのように非暴力・不服従を戦術として、忍耐するのが良かったとは思う。それでも、ぼくはさらに50年近くも生きてきた。ぼくはこのサンスウの心を受けて、象徴としてのカビ発生装置を止めようとしてきたのだろう。そのような自分の人生にささやかな誇りこそあれ、何ら不満はないが、いくつかの悔しさはある。

さらに、孫子が読んでいた『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴 2016~2020、少年ジャンプ)のアニメーションのストーリーからからインスピレーション inspiration を受け止めた。大正ロマン・デモクラシーを背景に、東京時代中期、主人公、竈門炭治郎は妹の禰豆子を人間に戻そうと剣の修行に励み、鬼殺隊員として血鬼術を縦横に操る鬼たちと戦った。禰豆子は炭焼きを職業とする竈門家の長女で、母、父が他界していたので、弟妹たちと暮らしてい

た。一夜、炭治郎が町に炭を売りに行き家を留守にしたときに、一家は鬼の長、鬼舞辻無惨に襲われ、殺されてしまい、唯一人禰豆子は鬼となって生きていた。禰豆子は鬼になったにもかかわらず、兄の愛情を認識していたので、鬼には成りきらず、人喰いを自制でき、兄が約束した通りついには人間に戻った。鬼人として兄の背負う箱の中で眠り、時として出て、兄を助け鬼との闘いに生きた。

ここに出てくる鬼たちは飢餓によってだけではなく、強くなり人間や鬼を支配する権力を得るために人間を楽しみで沢山喰うのである。彼らは思い違えた家族への心に飢えており、それを権力で置き換えていたのである。鬼より恐ろしいのは人間の心の闇に深く潜み澱む毒である。毒を溜め込んだ人間は残念なことに実在している。鬼は見た目が怖く。毒人間は見た目ではわからない。鬼は人間の心の闇の中に隠れ住んでいる。恐ろしいのは鬼よりも人間だ。何故なら、鬼の姿は見るからに恐ろしいが、人間の姿は神に似せてあり、一見では優しいか恐ろしいかはわからない。



図 1. 阿修羅に関連した作品

半世紀ほど前に描かれた『アシュラ』は恐ろしい描写で、神奈川県では、PTA からの意見で有害図書指定された。ところが、もっと恐ろしい描写が出てくる『鬼滅の刃』は有害図

書指定などではなく、子供から大人まで、爆発的に視聴・読者を得ている。個別作品の違いやアニメ同伴など美的な表現や発信方法にも大きな違いはもちろんある。

一方、別の視点で、大正期という時代背景も関わっているとすると、それはどのようなことなのだろうか。恐ろしい世界大戦の狭間の大正ロマン・デモクラシーの陰に隠され、蠢いていた鬼たちに重ねてみているのだろうか。ちなみに、任意団体 NPO の鬼殺隊士は、廃刀令 (1876) 後の大正時代に剣の道に励み、鬼退治を行っているのである。鬼の力に勝てはしない絶望があっても、信頼できる隊士間の友愛に依拠して抗うことに共感しているのだろうか。主人公の竈門炭治郎も阿修羅なのだろう。これらの鬼よりもっと怖い鬼は人間の心の闇に棲みついているのだ。完結編では、鬼を滅した人間は現代に輪廻転生して楽しく暮らしており、ハッピーエンドになっていた。

現代は後世になれば歴史区分として東京時代と呼ばれるのだろうか。ジョージ秋山が『アシュラ』や『The Moon』を描いた時空と、吾峠呼世晴が『鬼滅の刃』を描いた時空にはおおよそ 50 年の経過がある。前者は大学 (知的権威) が国権力との紛争で敗退、同時に公害も激甚化する状況にあった。一方で、後者の現在はどうのようにとらえたらよいのだろうか。沈黙したままの大学は抑圧され学問の不自由に甘んじて、原子力発電所の放射性物質公害、権力犯罪の腐敗構造にさえ異議を言わなくなった。市民社会、大方の世間も代替の権力構成を求めながら、それを見つけ出せずに不憫をかこっている。吾峠は絶望の彼方に、希望を見つけたのだろうか。

COVID19 (一本鎖 RNA ウイルス) への恐怖では人間所業の醜悪をさらけ出したが、一方で恐怖に抗い美しい心性を輝かせてもいる。たとえば現場の医療従事者や廃棄物処理従事者は恐怖と闘いながら、誇り高く社会的責任を遂行しており 経済格差や属性差別も一層露わになり、しかし、熱い感謝を示す人々はとても多い。救援を受けながらも、過剰に心無い応対をする人々も少しはいた。感染防止のために会社も学校も自宅待機になり、家族として寄り添った時間ができた。一時の社会的空白が不幸中の幸いとして、次第に薄弱となっていた家族の情愛を深めることができたことだろう。

人生と学問

ぼくは、学問は孤独な一人遊びと見つけた。学問には先達の長い系譜があるので孤立はしていない。しかし、孤独にならないと、先師や先達の努力の成果 (理論仮説) を、新たに明かされた事実を追加して、深く根底的 radical に考えて、ほんの少しでも加筆修正を試みることができない。権威に甘え、縫うのでは学問は展開しない。

ヒンドゥー教では人生の理想的な過ごし方として四住期を詠えている。ぼくとしては幼児期を加えて、心の構造と機能と関連付けて、次のように考えてみている。ちなみに幼児は遊び惚けることが生業仕事である。

幼児期：天性の遊び心	五感で生きる
学生期：修行としての学問	直感を得る
家住期：仕事としての学問	直観を磨く
林住期：趣味を遊びに昇華し、学問は遊びに統合される。良心を知る	
遊行期：解脱に向かう。	

ヒンドゥー教の教えでは、学生期には師に絶対的に服従し、ひたすら学び、厳格な禁欲を守らなければならない。このような学びの期間が過ぎると、次は家住期である。家住期では、親の選んだ相手と結婚して、職業に就いて生計を立てなければならない。そして子どもを育てるのが大切で、このことによって子孫を確保し、祖先への祭祀（さいし）が絶えないように心がけなければならない。この家住期は世俗的なことが重要とされるのである。現代人であれば、これで人生は終わりとさえ言えるのだが、ヒンズー教の場合にはさらに二段階が加わる。

第三の林住期は、これまでに得た財産や家族を捨て、社会的な義務からも解放され、人里離れたところで暮らすことができる。このような過程を経て、最後の遊行期は、この世への一切の執着を捨て去って、乞食となって巡礼して歩く。ヒンドゥー教徒たちは、永遠の自己との同一化に生きようとしたのである。

『アシュラ』(1970~1971)と『鬼滅の刃』(2016 ~ 2020)、この二作品への世間の対応に大きな違いがあった。これらの比較によって、心の構造について考えてみたい。両作品共に惨たらしい場面が頻繁に出てくる。前者の人間は醜く、後者の鬼は悍ましくも、美しくも描かれている。このため後者は少女や若い母親層にも人気でアニメーションや小説も含めてベストセラー第一位である。この二つの漫画、COVID-19の恐怖の中で、この両作品を家族の物語として読んでみた。より惨い場面がある後者的の方が、子どもはともかくとしても、それでも子育て世代の女性から、非難も受けずにむしろ大好評であるのはいくつかの要因があるのだろう。前者の出版年代よりも後者の現実社会に鬼が多くいる、あるいは人の生死もゲーム感覚になったからなのだろうか。

その上、追い打ちをかけて COVID19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID19の恐怖に脅え、それを利用して、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるようにカミガミ（自然）に祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽だが、希望を探し続けたい。過去・闇世の澱みは陰湿で今でも絶望に沈んでいる。何が正義で、何が邪悪かを問うても、人々の間には強固なバカの壁があり（養老 2003）、空虚にも、越えることはほとんどできない。それでも阿修羅は永遠に抗い、挑み続けるべきなのだろうか。すでに 4 億年も抵抗してきたと、阿修羅王は言っている。

COVID-19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID-19の恐怖・脅えを利用して、人心を惑わし、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるように祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽、仮想だが、希望を探し求め続けたい。

地祇と祖先神

ある週末に、孫たちの七五三で静岡の浅間神社や東照宮に行った。不思議な方と一瞬言葉をお互いに交わしたので、「お手水の地祇」というような一文を課題（良心、教養）に重ねて考えてみた。言葉に誠がなく、行動に実がない大方の日本人に異議を申し立てたい。

老女が自転車を引き歩いてきて、ぼくの前で立ち留まった。孫たちの記念写真を浅間神社でお願いして撮っていたから、それを遮らない配慮をしてのことだ。お礼を言って、近所に住んでおいでなのかと問うたところ、鳥居前の信号機を渡ったところだという。そこは仲間見世の商店街だから、お店をやっているのかと重ねて伺ったところ、意外な答えであった。彼女は神社の手水（トイレ）の掃除をしている。信号が変わるのを待つ間、彼女の話聞いた。廁の使い方が男女とも行儀悪く、日本人の道徳的退行を憤っていた。特に女性がひどく、男性も清掃中の老女に配慮がないとのことであった。トイレ掃除はとても大事な仕事である。汚いトイレは使いたくないのに、大方の使用者が礼儀をわきまえずに汚す。それを掃除する老女を蔑視するような態度をとるそうだ。やむを得ない緊急時でも、配慮し、お礼は述べるべきだ。

浅間神社には少彦名命の社もある。少彦名命は常世の国で石を示現する小さなカミで、粟茎に弾かれて淡島より常世国に至った。本質は粟の穀物霊であり、生成神神産巢日神の子とされる。大己貴神（大国主命）は、この常世の穀霊と合体して国造りに成功する。農業、酒造、医薬、温泉のカミとして信仰されている。ちなみに、木俣の神は大国主命と八神姫の長男であったので、私は高天原の天孫族の神々にくにを奪われた出雲族の子孫である。それでも楠一統として南朝に味方して敗走し、岐阜に逃げたようだ。ただし、これも神話であり、史実については確証がない。

心の構造と機能

心の構造と機能についての詳細は木俣（2021）で記した。本論稿の理解のために、次に概要を示す（図 2 および図 3）。

ぼくは国内外の自然を探索するうちに、自然という概念には原生自然、文化的な自然および自然観があると考えようになっていた。岩田（1986）は、自然には三相があり、これらは原生自然、文化としての半自然および心の中の真の自然であると言う。ぼくの考えていたこととまさに重なり合ったので、ELF 環境学習過程の基本学習プログラムに位置づけることができた。次に、ミズン（1996）の述べるチンパンジーから現生人類までの心の構造を形成する、諸知能の進化の論考に啓発されて、環境学習過程に心の構造を重ねることができた。偶然ながら、ミズンが大聖堂モデルという結論を得るに至ったサンティアゴ・デ・コンポステーラにはぼくも観光旅行でいった。

さらに、最近数年に経験したムラ撥撫のストレスを解き明かそうとの学びで出会ったスタウト（）によって、良心という第七感があり、人類はこの感覚についてはまだ未熟だという見解に啓発されて、心の各知能間の認知流動性が心の諸機能を高めるのだと理解した。ミズンの言う小聖堂の壁を通過するために認知流動性を高める必要がある。これが環境学習の根底的な理論と腑に落ちるに至った。

心の構造：狩猟採集民と都市民の比較

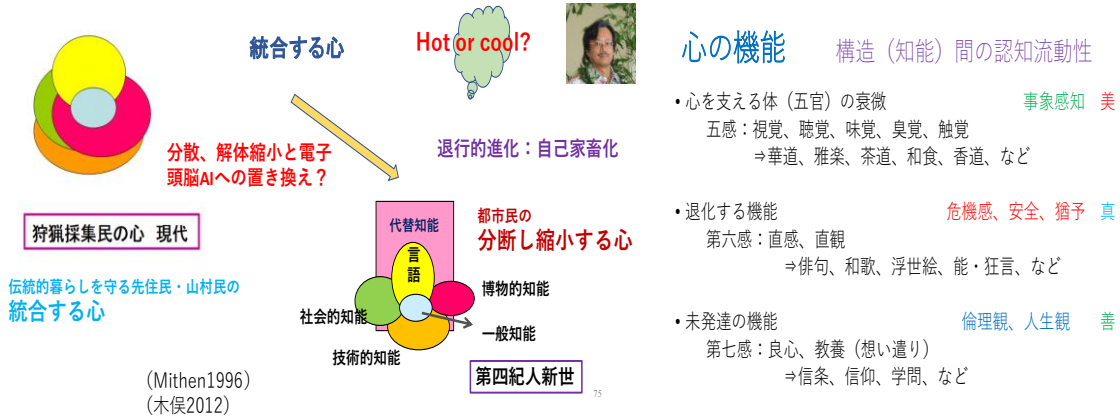


図 2. 心の構造と機能

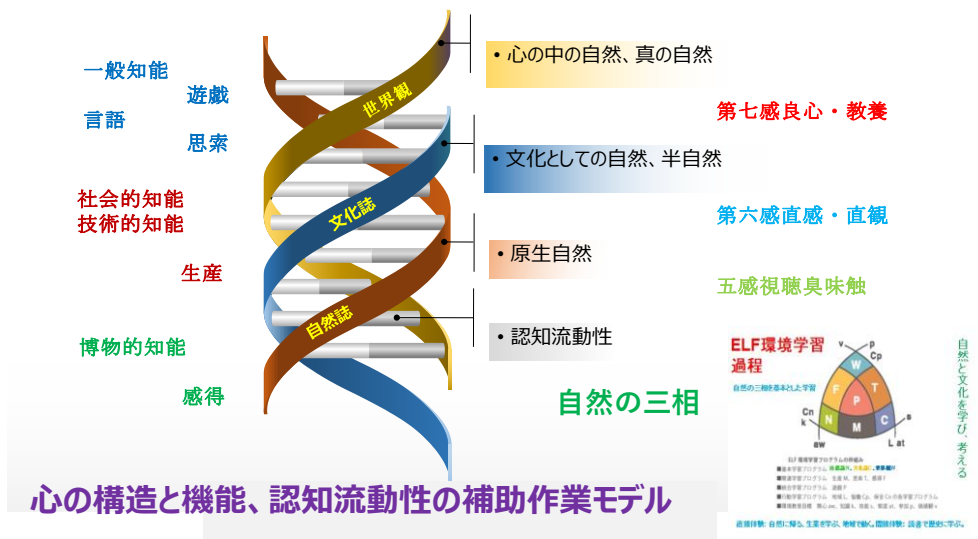


図 3. 心を構成する各知能をつなぎ、機能を作動させる認知流動性の補助作業モデル

心優しい日本人は、あなたの幸せや健康などを祈りあるいは願います、と言ってください。ぼくもほとんど意識せずに、この 2 語を使っていたようだ。しかし、数年前から、何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、日本人にとって、ぼくにとっても、それが自明なことなのか、疑問に思うようになった。人生で、力及ばずに苦しいことが起これば、日本人は何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、そうなのだろうか。

真に僭越ながら、神ならぬ身が、我が身に及ぼされた罪を許すこととは論理的にもできない。悪意をもって危害を加えられたら、反撃するのは当然だ。神仏でない人間が、悪意をもって攻撃する相手を許すことなど、あまりに僭越だ。でも、やり返す過程で憎悪に溺れれば、似て非なるとはいえ罪を犯して、意識せずして当事者以外の人々をも巻き込むだろう。復讐をしないのは自律して我慢するからだ。

しかし、心情的に他者の罪を恨み問うても、自らを浅ましいと思ってしまう心情は、一体どこから来るのだろうか。被害者が自らを責める心的外傷はどのような心の作用なのだろうか。加害者に反撃しても、心的外傷は直らないという心情、復讐を押しとどめて自傷

するのはなぜなのだろうか。神仏に心の傷の治癒を祈り、願えば癒えるのだろうか。宗教に敬意をはらってはいるが、ぼくの信仰は自然にあり、アニミストだから、その祈りや願いの先は自然のカミガミであり、言い換えれば自然治癒、自分で治す、すなわち超克するという事だろうか。我慢する、自律できる強い精神力を鍛えることだろうか。自問するばかりだ。

最近の日本人の多くは神仏、カミガミを畏れていない。増上慢は極まって、神童、神業、神泡、神対応、神回、・・・なんて不遜なのだろうか。ムラ社会の事はすでにかなり論考してきた (木俣 2015)。しかし、さらに心が凍り憑く事象が自らに起こったのだ。このことについて自傷しながらも、超克するために、さらに具体的事実に基づき、テキスト分析を用いて客観的に論考した。一方で、降矢静夫老師の山村賛美、自給知足の暮らしを対照して、心を洗うように比較研究することも同時に進めてきた。

ぼくは田中正造翁が求めた真の文明は生き物の文明と同じ概念だと思い、さらに生き物の文明への希望を探すために論考を深めたい。1) 山村の景観・生態系と山村農人の心性の美しさを降矢静夫師のはがきのテキスト分析で明らかにした。他方で、2) 日本のムラ社会の形成過程について、自らの人生で体験してきた事実および多くの人々が田舎・都会暮らしで体験した証言 (書籍、論文、書評、コメント、eメールなど) を根拠資料としてテキスト分析などによってすでに詳細検証した (文福洞 2021、黍稷 2021、木俣 2021)。ムラ社会による集団的排除行為、ムラ撥撫は心に巣くう醜い犯罪だ。被害者が心的外傷後ストレス障害を治癒するには自律的に超克するしかない。山村農人に学び、美しい山村に希望を見出すために、これまで十分解くことができなかったこの課題に最期に当たって、明確な結論を示すように、挑むことにした。

ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生は学校や会社などでのいじめの構造と同じで、都会であれ、田舎であれ、閉鎖的な時空間で毒を充満させ、心的障害ストレス障害に長らく苦しませる。心的外傷後ストレス障害 PTSD を引きずり、悔しく苦痛であっても、感情に流されて行為しないように、自律制御できるように教養、思い遣りを磨くべきだろう。復讐心ではなく、犯罪者個人への反撃でもなく、ムラ社会とそれによって行われたムラ撥撫の罪を許さず、形成と発生のメカニズムを白日にさらして、その事象を告発する。属性は削除、個人情報保護、偏見・先入観を防いだ。個人の属性を記せば、心理的構造はより明瞭になるが、個人情報ではある。実名は示さずに、たんに記号 ABC で論ずるべきなのだろうか。被害者にすれば、犯罪者に対して容赦はいらないはずだ。罪を憎んで人を憎まずは、被害者の苦しみを黙殺する偽善だ。ぼくはもう古い先短いので、別稿では容赦しないで事実をありのままに記しておくことにした (木俣 2024)。

テレビ番組の「ドクターX」は小気味がよいので、珍しく毎回見ていた。そのエンディング曲は Ado の「阿修羅ちゃん」であった。群れを嫌い、自由気ままに生きる医者好きだ。子供の頃に目標とした職業であった。Ado の歌集 CD『狂言』には「阿修羅ちゃん」ほか、共感する歌詞の歌が収められている。非常に速いテンポの歌にはとてもついてはいけませんが、読める歌詞には著しく共感するのだ。お若い同類眷属がいた。中島みゆきの歌で、「麦の唄」や「ファイト！」には聞くたびに涙が出る。昼間に聞く荒井由実、夜に聞く中島みゆき、彼らの歌にどれだけ気持ちを支えられてきたことか。共感する画家ファン・ゴッホの作品をたくさん見て、テオへの手紙も読み、彼も阿修羅の眷属であったと思う。

人びとの心を分断し、貶め、知性ある周りの人々や傍観者さえも毒に晒されると操られ同調者になってしまう。次は自分がいじめの対象者になることを怖れる。現実から抽出したこんなに面白い人生ゲームが『鬼滅の刃』や『アシュラ』の主題に他ならない。ほとんどの人間にはとても信じられないことであるが、心に毒を持つばかりでなく、さらに良心を持たない人たちもいる。心理セラピストによれば、アメリカでは4%が良心を未だに有していないという。人間にとっては、良心は第七の感覚で人類史では、まだ進化の過程にある感覚である (スタウト, M. 2005)。

時々起こる感染症、現在は COVID-19 のパンデミックによるものであるが、この毒素は人間の心にも及び、隠れていた実に醜い心性を増幅し、露出させているのだ。禍福転じて反省し、現実を見つめ、心の構造と機能を整理して真の文明への移行準備をしたい。五感、直感・直観 (第六感) を澄まして、大切に保ち、良心 (第七感) を鍛える。苦境を乗り越えるには先人から学び、自律することだ。心の構造、知能を鍛錬して、人を傷つけず、疑心暗鬼に罹るのではなく、自らも傷つかない。師友を求め、学びを深めて人生への信念を鍛え、家族との信頼を育み、幸せになって良いのである。

第七感を発達させるためには表 1 にまとめたような負の感情を自制するトレーニングがいる。嫉妬 jealousy ; 嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること。妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。羨望 envy ; 悪性の場合には、悪意を持って他者が持つ優れた事物への渴望、その対象がそれらを失うことへの願望となる。良性の場合には、昇華する方向で、社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換される。好敵手として目標に鍛錬する。保身 self-protection ; 自己・個人の存在を保つ。組織ムラ・シマ 組織の利害・損得を守る。身の安全や地位・名誉などを保つこと (広辞苑)。

表 1. 心理学用語

語彙	語義	特性
嫉妬 jealousy	嫉む	嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること
	妬む	妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。
羨望 envy	悪性、悪意	他者が持つ優れた事物への渴望、その対象がそれらを失うことへの願望。
	良性、昇華	社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換されること (広辞苑)
保身 self-protection	自己	自己・個人の存在を保つ。
	組織ムラ・シマ	身の安全や地位・名誉などを保つこと (広辞苑) 組織の利害・損得を守る。

地域共同社会で共生するように、原則的に食物や学びを自給知足するための方策を、真の文明にむけてゆっくりと堅実に準備する。生活に関わる、重層して蓄積してきた文化複合はさらに宗教、芸術、科学、産業、生業 真の文明への移行を保障する。環境観 (心の構

造)に目覚めたい。家族を支えているのは職業による収入だけではなく、収入にならない生業も必須の支えである。自分たちでできる仕事はささやかでも行ない、さらに不足することを地域共同社会に委託する。人間の心は世界の良き事象にも共感することができ、現代の文明を支えすべてを包み込むように統合する。家族や地域を越えて、歴史的時間や地理的空間を越えてでも協働することができる。

パンデミックは感染症の世界的な大流行を意味しているのだが、人口爆発も自然に対するパンデミックと同じような現象だ。農業生産の余剰を基盤税収にして、都市国の文明が起源して以後、さらに現代では巨大都市集住、人間の食料となる穀物など栽培植物や牛・豚や鶏など家畜の画一種・品種の個体数の激増も同様で、これらには病虫害や病原体が伴いパンデミックを引き起こす。農耕地でのモノカルチャーや畜舎での多頭飼育などとして大集団を形成することが根本的な誘因だ、

ジャラルヴァンド (2022) は『サルと哲学者』で、「哲学について進化学はどう答えるか」と考察を述べている。彼の論理の基盤となる古典哲学の豊かな知識はヨーロッパの大学の基礎学習過程によるのだろう。こうした中で、いくつかの共感するあるいは気になる記述を摘要する。スピノザ (1632~1677) の汎神論では、神を信じていたが、神と自然は同一の存在である。神は宇宙を構成する物質であり、一貫して神あるいは自然という概念を使っていた。人生の意味は宇宙、どうしても避けられないことがあり、なるようにしかならないという現実を受け入れるほどに、人間は自由になり心の平安を得ることができる。カミュ (1913~1960) が描いた、シーシュポスは人生に生きる価値があるならば、この世の繊細な無関心を理解しても、憂鬱よりも解放を感じる。自分だけが人生の主であり、生あるうちに人生を満喫することで、存在の不条理を克服しなければならない。誠心誠意の人生、存在を肯定しつつも、同胞に不正を犯したり不正を容認したりすることを拒否する人生は天からの報酬をもらわずとも意味のあるものだ。経験を否定しないことが、あらゆる無意味さに対する反逆でもある。

科学的には地球上の生命は主に三種類に分類される。真核生物、アーキア (原核生物) および細菌 (原核生物) である。アーキアは 1970 年代後半まで存在すら知られていなかった。アーキアは分裂するたびに娘細胞が細菌を取り込み、細菌は内部で増殖し、真核細胞ができ、さらに藍藻が丸呑みされて、細胞内共生が生じ、真核生物から多細胞生物、植物の祖先ともなった。ぼくが十分に知らないうちに、急速に明かされる多くの知識がある。

最近、新たな遺伝子編集技術 CRISPR システムのメカニズムが解明され (2012)、例えば遺伝子のハサミである。これによって、短期間で遺伝子を切り貼りでき、自然界に存在しない何物かができてしまう。実際に、この遺伝子組み換え技術は、安全性も確認されておらず、関連学会は技術的にモラトリアムしていたにもかかわらず、名誉心のために中国の研究者が 3 人の人間に適用した (2018~2019)。ぼくが学生の頃から敬意をもって J. B. S. ホールデンの予測によらず、遺伝子技術が急発展したことを、ジャラルヴァンドは繰り返し指摘している。しかし、遺伝学者でありながら全体論の立場をとるホールデンやぼくは遺伝子編集技術という還元論を、生き物に摘要することには同意できない。それは生き物ではなく化け物である。

上記に摘要したジャラルヴァンドの記述は現実である。他方で、田中 (1968, 2010) の描いた『妖怪人間ベム』はフィクションである。科学は目覚ましく発達しているが、人間の

心は逆に衰えていると考えたマンストール博士によって、妖怪人間 3 人ベム、ベラ、ペロは人間の悪の心と戦うために造られた。彼らは「早く人間になりたい」と言う。アニメも見たが、邪悪な人間と戦いながら、良い人間になりたいと希望するのだろう。人間の悪と戦う後に望まれるその希望には非情理を感じた。『鬼滅の刃』の禰豆子は鬼になりきらず、兄の炭治郎も不死の鬼になることを最後まで拒絶した。

ジャラルヴァンドが紹介している Butler (1993) の “Parable of the Sower” も SF デイストピア小説である。2024 年、崩壊寸前のアメリカに暮らす少女ローレンの物語である。気候変動により自然が破壊され、独裁的な大統領が統治し、外国企業は国家のように振舞う。防壁の外では貧困が蔓延し、壁が崩壊してローレンの家族は殺されてしまう。ローレンはアースシード教団を創り、滅びゆく地球を離れ、新たな惑星を探す宿命を負う。

他方で、Wall-E は唯一地球で機能しているごみ処理ロボットの物語である (Disney and Pixar 2008)。汚染された地球から逃れて、2805 年には人間は世代宇宙船で生活していた。地球に帰還した彼らは再び農耕から文化的暮らしを始める。ぼくはこの物語も好きで、結局、人間は宇宙に将来を求めるのではなく、この地球に生きる未来を大切にすべきなのだ。

シと不死

宮崎駿 (1983) の『シュナの旅』はチベットの民話をもとに再話した。ヒワビエを栽培する谷合の小国の後継者シュナが西方の豊穡の地を目指し、飢えを除く黄金の穀物を探索する。人買いをして畑を耕かしている神人の島から大麦を盗み出して、村の人間に伝えた。この神人の畑はナウシカが廢墟の町に見つけた庭と同じものだろうか。ともに詳細は不明であるが、恐らく神人は宇宙人であり、遺伝子編集したと思しきオオムギを巨人に栽培させていた。この物語は別の話として語られるべきであろう。おしまい、と閉じられている。

10 年後に描かれた宮崎駿 (1993) の『風の谷のナウシカ』は火の 7 日間の戦争後 1000 年、停滞する人間社会を描いている。小難しいぼくの講義を理解してもらうために副教材としてよく引き合いに出した。今日からの千年間に起こることを想像させるような物語展開である。現代史で、科学者が何をしたのか、何をするのか、現実を象徴的に描いている。ナウシカは巨神兵オーマの名付け親になり、一緒に仕組まれた秘密のあるシュワの墓所の扉を閉じるために向かう。オーマは古エフタル語で無垢を意味する。浄化の神である墓所やその貯蔵庫である清浄な庭を守るのは土鬼僧会の博士たち、彼らは旧世界の人間が造った不死の番犬ヒドラ、死ぬこともできない化け物であった。ナウシカは言った、私たちの神は一枚の葉や一匹の蟲にすら宿っている、と。ナウシカと森の人セルムは腐海の秘密を解いたが、彼は言った、これは二人だけの秘密としておき、生きましょう、すべてをこの星にたくして、共に、と。秘密とは腐海が数千年をかけて不毛の大地を回復させたら、汚染された生き物は清浄な場所では生きられず、亡びるように定められていることである。この清浄な庭こそ、シュナで予告された別の話であると思われるが、ナウシカでも墓所の貯蔵庫とされる庭は、墓所が崩壊したのちに、どうなったかは語られていない。

阿修羅はシッタータ、オリオナエとともに宇宙創成の謎を解き明かそうとした。転輪王は宇宙の生成とともに存在し、すべてを見てきたと言う。いずこからか、永劫の門の向こうから、弥勒らが現れて、五十六億七千万年後に人々を救うと言ったが、弥勒の救済計画は失敗した。それでも、シ (死) は永劫の門の向こうから来て、彼岸に住む超越者は破滅へ

の開発者として存在する。二千億年すら一片となす無限の時を支配する。ゼンゼン市 A 級市民は記号に還元されて保護され、永遠の安らぎを持つ。人間であるというが、スイミンシツで眠る実体のないパンチ・カードである。B 級市民はロボットである。アスタータ 50 には惑星開発委員会があり、宇宙に初めて神が姿を現した場所はトバツ市である。シの命を受けた計画のすべては惑星委員会の行動の結果である。阿修羅は問う、永遠に世界が続くのなら、わたしの戦いはいつ終わるのだ？すでに還る道は無い。また新たな百億と千億の日々が始まる。おわり。

図 2 に六地藏尊の並びを示した。善光寺では向かって左から天道、人間道、修羅道の三善趣、次いで畜生道、餓鬼道、地獄道の三悪趣である。泉龍寺では、天道、人間道、修羅道、続いて地獄道、餓鬼道、畜生道であり、両寺を比較すると、地獄道と畜生道の位置が異なっている。

トランス・パーソナル・エコロジーを主唱してきたフォックス (1990) は R. エイトキン老師の言葉を次のように引用している。世界の現状では、菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。いやそれは、どの生物の存続にとっても唯一の希望だろう。食欲と憎しみと無知の三毒が、われわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、われわれはまっとうな死さえ迎えられないだろう。

他者の内なる心毒を制する方法はない。自己の心毒は教養を高めることで自律制御できる。学ぶことを望む人は他者から教養を高める方法を受け取ることができる。しかし、他者に教養を伝える意思を示し手助けはできるが、他者に受容を求めることはできない。すべては個人の自由な所業にあり、本人が望むのなら誰もが阿修羅のごとく自ら励むしかない。アシュラの眷属は世界中にいたのだ。解脱はないかもしれない。天道に行きたいのなら、解脱は死後だが、阿修羅道にとどまるのなら、その心は不死だろう。ぼくの解脱に関する詳細な論理の解説はすでにしてある (木俣 2021)。

ぼくにも罪業が少しもないなどとは言えない。生きてきた中で自ら認識していなくても、それなりに他者を傷つけたこともあるだろう。従って、天道には転生できず、と言って人間道には転生したくはなく、もう一度、阿修羅道に転生する前に一休みして、天道の門近くの道端に咲く草花になり、天国に行く人たちを拍手で迎えたい。『はてしない物語』(エンデ 1979) は子供たちの誰かに読み継がれなければならない。そうした子供がいなくなれば、ホモ・サピエンス人間の物語はすでに終わっているのだ。



左) 長野善光寺の六道地蔵尊 : 天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道
 右) 狛江泉龍寺の六道地蔵大菩薩 : 天道、人間道、修羅道、寄進者、地獄道、餓鬼道、畜生道
 私見) 天道、修羅道、人間道、畜生道、餓鬼道、地獄道

図 4. 六道地蔵尊

引用文献

Ado 2022、狂言、UNIVERSAL MUSIC LLC。

吾峠呼世晴 2016~2020、鬼滅の刃、集英社 2020、東京。

ジョージ秋山 1970~1971、アシュラ上巻・下巻、立風書房、東京。

ジョージ秋山 1972~1973、The Moon、復刊ドットコム 2019、東京。

Butler, O.E, 1993, Parable of the Sower, Headline Publishing Group, London, UK.

M. エンデ 1979、はてしない物語、訳、岩波書店、東京。

フォックス, W. 1990、星川淳訳 1994、トランスパーソナル・エコロジー : 環境主義を越えて、平凡社、東京。

ひろさちや 2005、わたしの中の阿修羅、佼成出版社、東京。

岩田慶治 1986、人間・遊び・自然—東アジア世界の背景、日本放送出版協会、東京。

木俣美樹男 2005、巻頭言もう一つの阿修羅として、民族植物学ノオト 1 : 1。

光瀬龍・萩尾望都 1994、百億の昼と千億の夜、秋田書店、東京。

光瀬龍・萩尾望都 2022、百億の昼と千億の夜、河出書房新社、東京。

光瀬龍 2010、百億の昼と千億の夜、早川書房、東京。

ミズン, S. 1996、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。S. Mithen, The Prehistory of the Mind; A Search for the Origins of Art, Religion and Science, Thames and Hudson Ltd., Kondon, UK.

宮崎駿 1983、シュナの旅、徳間書店、東京。

宮崎駿 1993、風の谷のナウシカ第 7 巻、徳間書店、東京。

宮沢賢治 1923、春と修羅、ゴマブックス 2016、東京。

中島みゆき 2000、2000 Singles MIYUKI NAKAJIMA, 瀬尾一三・井上堯之アレンジ、JASRAC。
MIYUKI NAKAJIMA 2016, 21st CENTURY BEST SELECTION 前途、YAMAHA MUSIC COMMUNICATIONS
CO. LTD。

Padulosi, S. et al. 2022, Orphan Crops for Sustainable Food and Nutrition Security:
Promoting Neglected and Underutilized Species, Routledge, New York, USA.

スタウト, M. 2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。

スタマテアス, B. 2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち、SB クリエイティブ、東京。

田中憲 2010、妖怪人間ベム、講談社、東京。

山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社、東京。

参考文献

木谷節子・中山ゆかり 2009、阿修羅展、ぴあ、東京。

いどきえり 2023、列車にのった阿修羅さん、土蔵に疎開してきた国宝、くもん出版、東京。

関連文献

木俣美樹男 2018、巻頭言、解きたい謎—西暦第 2 千年紀に生きる、民族植物学ノオト第
11 号 : 1。

木俣美樹男 2018、信仰の個人主義を探る—発端 : 科学への妄信を越えるために、民族植物
学ノオト 第 11 号 : 56-62。

木俣美樹男 2019、巻頭言、商品ではない任意無償性への敬意、民族植物学ノオト第 12 号 :
1。

木俣美樹男 2019、先真文明時代への覚書 5、文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト第 12
号 : 17-36。

木俣美樹男 2020、巻頭言、老衰したこの国にも再生の春を希求する、民族植物学ノオト第
13 号 : 1- 2。

木俣美樹男 2021、巻頭言、素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標、民族植物学ノ
オト第 14 号 : 22-54。

木俣美樹男 2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～、民族植物学ノオ
ト第 14 号 : 52-75。

文福洞先斗 2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト第 14
号 : 76-115。

黍稷農季人 2021、孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能 (電子版)、植物と
人々の博物館。

木俣美樹男 2021、環境学習原論～人世の核心 ; 増補改訂版 (電子版)、植物と人々の博物
館。

黍稷農季人 2022、巻頭言 新世の姿形寡聞、民族植物学ノオト第 15 号 : 1。

木俣美樹男編 2022、降矢静夫光岑書簡集～最後の山村農人からの贈物、希望 (電子版)、
植物と人々の博物館。

黍稷農季人 2023、巻頭言 : 個人を確かめ、超えていく存在、民族植物学ノオト第 16 号 :
1。

- 木俣美樹男 2023、植物と人々の博物館小史、民族植物学ノオト第 16 号 : 47-93。
- 木俣美樹男 2023、随筆国際雑穀年 2023 への餞、雑穀研究 No. 37:21-24。
- 木俣美樹男 2023、果てしない雑穀の物語、雑穀研究 No. 38:35-37。
- 木俣美樹男 2023、雑穀は生物文化多様性豊かな食と農の文化残したい、女性のひろば通巻 529 : 47-51。
- 木俣美樹男 2023、巻頭言、生きている文化財—雑穀と家族農業に誇りある未来を、国際農林業協力 46 (1) : 1。
- 木俣美樹男 2023、2023 年は国際雑穀年～日本の雑穀街道文化を FAO 世界遺産に、木俣美樹 男さんインタビュー、つぶつぶ vol. 15:2-4。
- 木俣美樹男 2022、日本雑穀のむら (電子版)、植物と人々の博物館。
- 木俣美樹男 2024、雑穀街道普及会の顛末記～見捨てられた穀物への多くの感謝と少しの謝罪、民族植物学ノオト第 17 号 : 22-54。

へだまと進ちゃん
岩谷美苗、NPO 法人樹木生態研究会
Hedama and Susumuchan
Minae IWATANI
Society of Trees Life

進ちゃんの突然の訃報は、大変ショックでした。進ちゃんは私たちにとって、ずっと中津川にいる人だとばかり思っていたからです。

はじめて秩父の中津川に行ったとき、民宿中津屋で進ちゃんは中津の歴史などについてたくさん教えてくれました。でも、なーんか受け売り感満載で、軽かったんですよ。進ちゃんが何度も言っていた「へだま枯れよ。からむし枯れよ。」っていったい何だったんでしょう？結局よくわかんなかったです。

進ちゃんは、よく酔っぱらって真っ赤になってゴロゴロ寝ているもんだから、奥さんのみっちーに「赤マグロ」と呼ばれていて、まさに赤マグロ！みっちーはうまいこと言うなーと思っていました。冒険学校の小学生には「もじゃ」と呼ばれていて、運転席にいる進ちゃんの髪に小学生が食パンの

袋をしめるあのクリップみたいなのをたくさんつけて遊んでいました。進ちゃんは怒ることもなく、されるがままで、もじゃもじゃの面白い頭になっていたのを今でも覚えていています。進ちゃんはおおらかで思いやりのある人で、進ちゃんの存在は周りをリラックスさせるので、みんな大好きだったと思います。

進ちゃんが亡くなったなんて、まだあまり信じられませんが、進ちゃんの記憶は私たちの中にあります。進ちゃんとの出会いは私たちの貴重な宝物です。中津川に行けば、進ちゃんのことを思い出さずにはいられないでしょう。進ちゃんのことだから、あの世でもみっちーに「この赤マグロ！どいて！」と、仲良くやっているといます。

進ちゃん、どうか安らかにお眠りください。

再録随筆 ; 雑穀物語 8 山中進・三千恵夫妻

木俣美樹男

植物と人々の博物館

Stories of Millet 8: Mr. & Mrs. Yamanaka, Susumuchan and Michy

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

奥秩父の中津川で 1991 年から 2000 年まで、エコミュージアム大滝や冒険学校ほか多彩な環境学習活動を展開しました。私にとっては最高水準の冒険学校の実践で、環境学習理論の構築にも有効でした。これらを強力に支えてくださっていたのは山中進・三千恵夫妻、即ち進ちゃんとミッチーでした。

高木文雄先生にお願いして、林野庁秩父営林署管轄の造林宿舎大河俣小屋を借用して、自然文化誌研究会のメンバーで修繕して、第 4 回冒険学校のベースキャンプを作り始めました。修繕の技術指導は技術科のコニちゃん(小西司)でした。中津川に通い始めて宿泊するようになったのが進ちゃんの民宿中津屋でした。コニちゃんと進ちゃんは意気投合したのでしょうか。ここから山中夫妻と自然文化誌研究会冒険探検部のメンバーや参加学生、子供たちとの強い友情が始まりました。たくさんの思い出が、私にもありますが、2 つのエピソードを記して、進ちゃんの追悼にしたいと思います。

私が冒険学校の意味と可能性を確信した場面です。子供たちに本物を体験してほしいので、進ちゃんに炭焼きを教えてくださいました。火を扱うことはとても危険で、技術に加え、その場での集中力がいらいます。ある子供が浮かれていたので、炭出しは危険だから進ちゃんは本気で叱りました。その瞬間に、子供の目の色が変わりました。炭焼きのおじさん、進ちゃんへの信頼と尊敬の眼差しになったのです。

学生たちがミッチーの誕生日だったかに、ミュージカル「マンマ・ミーヤ」のチケット

を贈ったのです。とてもうれしかったミッチーの笑顔を見て、私は彼らの厚情に感謝しました。

冒険学校の拠点が甲斐小菅村に移って、私は疎遠になりましたが、当時の学生たちは終生のお付き合いをしていました。自動車運転を止めたので、秩父に進ちゃんを訪ねることもできず、今生で会いたいと思いましたが、中津川キャンプ場の幸島さんらも一緒に此岸で秩父錦を飲んで、いずれ大宴会をすることになります。

秩父へも雑穀栽培調査には通いました。山中玉吉さんには栃餅の作り方を習いました。甲武信小屋の山中親子・孫にもお世話になり、やっさん(小川泰彦)やみどりさん(横山緑)達は毎年、登山道整備に通いました。いつも最初にやりだして、突っ走り、あとはお任せというパターンで、自らの人生を反省し、自然文化誌研究会の方々には申し訳ないです。環境主義の私が言うことではないですが、正直に言えば、秩父の山岳道路のまだ暗い早暁を普通自動車で走ることには楽しかったです。暗闇でキツネにも会えるし、日の出と山の神が拝めるからです。ここでも面白い年月を過ごしました。

付録 1. NPO 法人自然文化誌研究会 2023 年活動報告 (1~12 月)

事務局長 黒澤友彦

Appendix 1: A Record of the Institute of Natural and Cultural History in 2023

Kurosawa Tomohiko, Secretary-General

コロナウイルスによる影響も収まり従来の活動を再開することができました。小菅村での「冒険学校」事業だけではなく、タイ環境学習キャンプも開催しています。スタッフの体制は人数・研修会ともに順調で次年度の課題は、参加者が定員に達するべく広報活動でしょうか。

大きな変化としてはこれまで利用し、オーナーの木下善晴さん、本会のログビルダーと一緒に整備してきたキャンプ場＝「清水バンガロー」について、本会が管理の窓口になったことです。これまで以上に主催事業の質を上げ、受託事業として受け入れを増やし、会員の利用も増やし、活動の充実を図りたいところです。



(1) 野外環境学習事業 (冒険学校・のびと講座・ログ事業)

月日	事業	場所	参加者数	備考
5/3-5	むらまつりキャンプ	小菅村	19	19+40
8/4-10	こすげ冒険学校	小菅村	14	14+46
12/26-28	まふゆのキャンプ	小菅村	7	7+34
4/23	野草のてんぷらとお茶 つみ	東京学芸大 学	50	コロナ禍の影響あり定員制
8/14-24	タイ環境学習キャンプ	タイ	5	タイとベトナムを訪問
9/30-10/1	INCHまつり(ライブとき のこ)	小菅村	20	

(2) ELF 環境学習中堅指導者 (のびと) 研修会 (指導者養成事業)

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
7/2-3	ELF	のびと研修会	小菅村	20	8+26

(3) 委託事業・案内など

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
3/11-12	研修	トムソーヤクラブ 研修会	小菅村	20	トムソーヤクラ ブ研修会
5/27-28	研修	SPB 企業研修	小菅村	13	SPB 企業研修

(4) 広報事業

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
1/10	会報	会報ナマステ 148 号発行			200 部
3/10	会報	会報ナマステ 149 号発行			200 部
5/20	会報	会報ナマステ 150 号発行			200 部
9/10	会報	会報ナマステ 151 号発行			200 部
常時	HP	ホームページ、ブログの更新			
常時	メルマガ	植物と人々の博物館メールマ ガジン			12 回

(5) 共催事業

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
年間	共催	第 19 期ちえのわ農学校	東京学芸大学	12	

(6) 会議・その他

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
2/10	総会	第 19 回通常総会・ 理事会	小菅村	25	
常時	会議	運営委員会	メーリングリ スト	20	

●出版物

民族植物学ノオト第 16 号電子版発行

FAO 世界農業遺産趣意書 4 刷 (500 部)・5 刷 (1000 部) 印刷、配布

●会員 (2023 年 12 月 31 日現在)

正会員 : 30 人 一般会員 : 29 人 家族会員 : 14 家族

学生会員 : 8 人 賛助会員 : 3 人 友の会会員 3 人 合計 87 人 (前年比+4 人)

付録 2. 植物と人々の博物館 2023 年の活動記録

木俣美樹男

Appendix 2: A Record of Plants and People Museum in 2023

Mikio Kimata

1. 植物と人々の博物館

- 1) 自然文化誌研究会総会にて、博物館の現状と今後の課題を確認。
- 2) ホームページの更新。
- 3) 民族植物学ノオト第 16 号を発行、メールマガジン月刊発行。
- 4) 電子書籍の発刊、ホームページと国立国会図書館 e デポで閲覧公開。
- 5) 森とむらの図書室から、西原のびりゅう館へ森とむらの会蔵書を貸し出す。
- 6) 腊葉標本の東京都立大学牧野標本館への移管は取りやめる。
一部は都留高校に移管した。

2. エコミュージアム日本村 (トランジション小菅)

- 1) 今後について打ち合わせ (事務局)
- 2) トランジション・ジャパンおよびイギリス本部のウェブサイトに登録、リンク承認。
- 3) 自給農耕ゼミ、佐野川および小金井で実施。
- 4) キビ発泡酒ソビボ・ピーボの復刻プロジェクト、国際雑穀年 / 東京学芸大学創基 150 周年記念 (東京学芸大学環境教育研究センター、藤野) を実施。

3. 雑穀街道普及会

- 1) 雑穀栽培見本園の維持 (小菅守屋委託、藤野宮本、小金井木俣)、保存種子の配布普及。
- 2) 雑穀街道普及会は会則を確認して発足、幹事会の責任で雑穀普及活動を継続。
- 3) 雑穀街道普及会の活動停止。

4. 関連活動 ウェブサイト黍稷農季人『生き物の文明への黙示録』

- 1) ホームページの更新、雑穀街道普及会のサイト、環境学習原論、第四紀植物、日本雑穀のむら、雑穀の民族植物学、などの電子出版。
- 2) 雑穀栽培、加工、調理方法などの資料提供
- 3) 環境市民連合大学の運営と休止

5. 主な活動の記録

月日	内容	参加者	備考	You tubeアクセス
1月7日	雑穀研究会国際雑穀年記念シンポジウム	パネリスト、70名 ほど	日本大学生物 資源科学部	
1月9日	千葉県いすみ市のエコパーシティを訪問	木俣		
1月20日	FFPJ第21回オンライン連続講座話題提供；日本における麦・雑穀・ 豆類の栽培はなぜ衰退したのか	講義、50名ほど	ZOOM	483回
1月21日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	70名ほど	ZOOM	556回
1月23日	相模湖里山暮らしの会との話し合い	宮本、木俣		
2月5日	第8回自給農耕ゼミ（小金井）	15名		34回
2月8日	相模原市長に面会	宮本ほか5名		
2月11日	桂川・相模川流域協議会市民部会	宮本、木俣		
2月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス	トーク・ゲスト、 60名ほど	ZOOM	345回
	自然文化誌研究会総会		ZOOM	
3月18日	国際雑穀年記念；つぶつぶ雑穀パワーフェス、	50名ほど	ZOOM	175回
3月18日	東アジア・ローカルシードバンク・ネットワーク	韓国と日本で20名 ほど	ZOOM	
3月30日	民族植物学ノオト16号発行			
4月15日	第6回自給農耕ゼミ（小金井）	10名ほど		
5月9日	相模原市緑区長に説明			
5月14日	谷崎さん、稲本さんが雑穀街道を視察			
5月21日	第12回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名参加		
6月11日	ローカリゼーション・デイ日本、分科会；雑穀=食のローカリゼー ション	解説、60名ほど	ZOOM	264回
6月25日	第13回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
6月26日	臨時拡大運営委員会；植物と人々の博物館の今後について検討	14名	ZOOM	
7月11日	Second Webinar of the IYM Global Webinar Series "Historical aspects of millets" (FAO.org)	講義、130名ほど	ZOOM	
7月23日	第14回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
8月6日	第15回自給農耕ゼミ（佐野川）	9名		
8月9日	上野原市長と協議	21名		
8月27日	第16回自給農耕ゼミ（佐野川）	6名		
9月11日	谷崎さんインタビュー小菅	2名		
9月17日	第17回自給農耕ゼミ（佐野川）	7名		
9月20日	ソビボ・ピーボ第1回発送			
9月22日	和ハーブ協会視察	4名		
9月22日	雑穀街道／世界農業遺産登録申請説明会、上野原市役所	83名	ZOOM併用	83回
10月2日	スウェーデンから調査来訪	植本さん2名		
10月18日	書籍運搬／小金井から	黒澤さん		
10月22日	第18回自給農耕ゼミ（佐野川）	8名		
11月13日	竹井さん標本調査、井上さん標本移管都留高校			
11月19日	第9回自給農耕ゼミ（小金井）	10名	ZOOM併用	80回
11月27日	図書の整理	梶間さん、川口さ ん、黒沢、木俣		
12月1日	伊能さん雑穀街道視察	6名		
12月18日	博物館運営担当者協議1	6名		
12月20日	博物館運営担当者協議2			
12月22日	ソビボ・ピーボ第2回発送、田端環状積石遺構見学			

編集後記 西村俊

Editorial Postscript

Shun NISIMURA

コロナ過を起点とした非対面・非接触に偏重した日常から beyond コロナへの歩みを進めて更に 1 年。人と対面で会話する際の精神的な負担は段々と低減され、相手がマスクをしていない状況で挨拶から始まる機会も増えている。コロナに対する日本社会における寛容さの広がりや日常への歩みを後押ししている。コロナ過で急激な社会実装と認知の機会を得た様々なオンラインツールは対面以外での議論や交流をサポートするツールとして受け入れられ、大学・企業の説明会や小規模な研究会、個別面談などにも気軽に利用されている。ハイブリッド開催は（人的な負担も含めた）運営コストの観点から縮小されて行きそうだが、完全オンライン開催とする場も存在感を保ち選択肢の多様化をもたらしている。特に子育て世代にとっては日常に居ながら様々なイベントに参加できるオンライン化による機会創出の恩恵は大きいようである。コロナ過を経て、これまでの日常とは異なる“新たな日常”が生まれている。

第 170 回芥川龍之介賞 受賞作「東京都同情塔」では生成 AI が小説に登場し、著者・九段理江さんが ChatGPT との“対話”を執筆活動に活かしたことが話題を呼んだ。日常的に「AI 活用」を耳にする機会も増え、実際に大規模言語モデル (LLM) などを活かしたツールの社会実装も急速に進められている。他方、第 170 回直木三十五賞の受賞 2 作品の一つである「ともぐい」の作家・河崎秋子さんは、禁退出の地元の人々の覚書や漁師の自叙伝などを参考書として執筆活動を行っていたと述べている。新しい技術開発やこれまでの地道な記録・伝承の蓄積の形がそれぞれのニーズに合った“今”の創作活動の多様性に繋がっている。

現代に生きる私たちの価値基準や生活スタイルの変化によって後世に引き継ぐことが難しくなっている技術や記録が増えている。未来での多彩な公益性を想像し何をどのように引き継げるのか、社会の合理化が加速している今、継承のための仕組み作りが必要な時にあると感じている。

民族植物学ノオト 第 17 号 (2024)

ISSN 1880-3881

発行日： 2024 年 3 月 30 日

発行所： 特定非営利活動法人 自然文化誌研究会

発行責任者： 植物と人々の博物館 木俣美樹男・西村俊

所在地： 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

自然文化誌研究会

Ethnobotanical Notes No. 17 (2024)

ISSN 1880-3881

edited by Mikio Kimata and Shun Nishimura (Plants and People Museum)

The Institute of Natural and Cultural History,

3337-2 Kosuge, Kitatsuru-gun, Yamanashi Prefecture, 409-0211, Japan